平成10年度

神戸市埋蔵文化財年報

2001

神戸市教育委員会

平成10年度

神戸市埋蔵文化財年報

2001

神戸市教育委員会

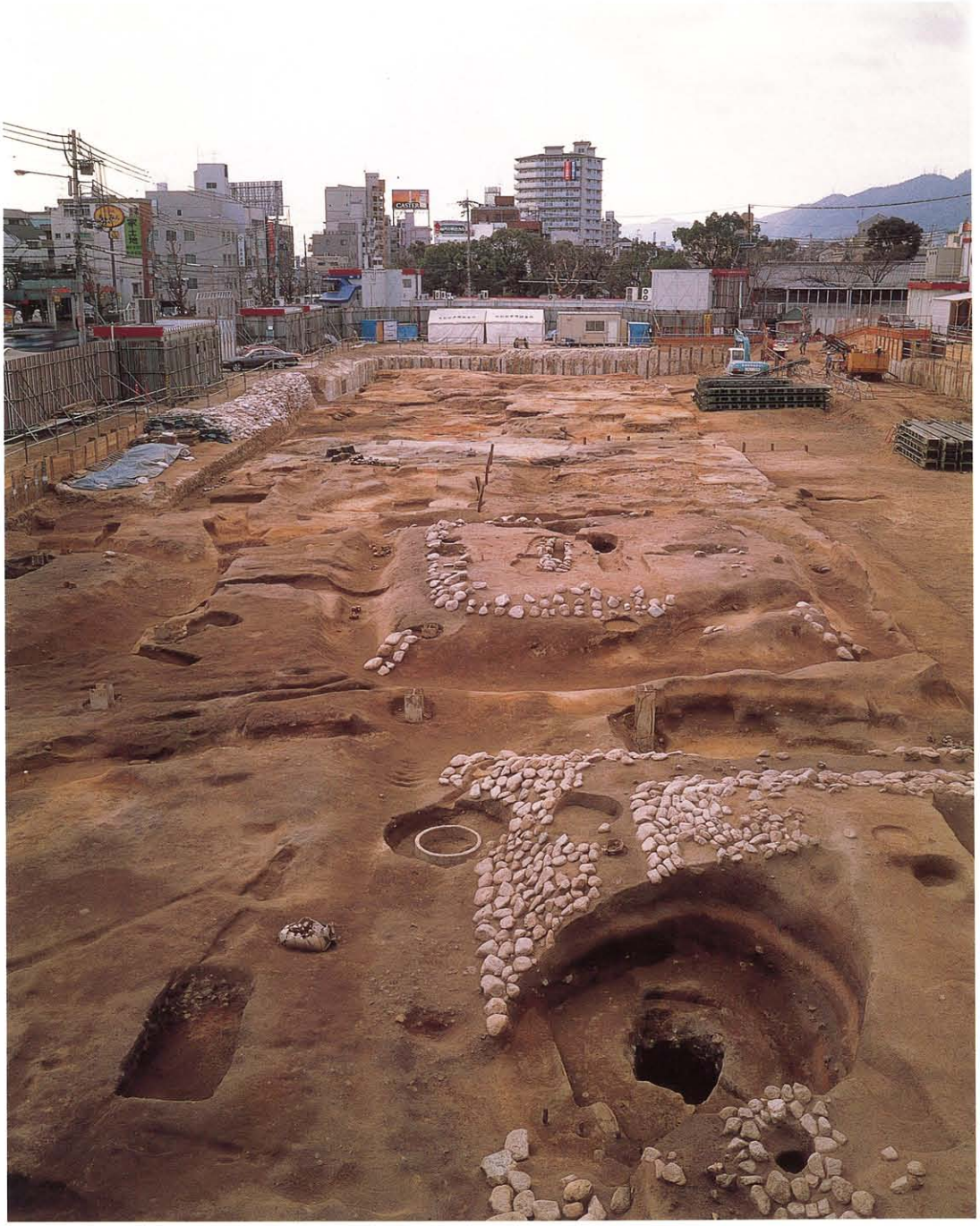


fig. 1　住吉宮町遺跡　第31次調査　古墳群

住吉宮町遺跡では、古墳時代後期の近接して築かれた方墳など10基の古墳が確認され、うち一基からは、県下で初の馬の殉殺例が確認された。また、同時期の石棺墓９基も検出されている。（本文53頁）

fig. 2
住吉宮町遺跡　第31次調査
出土遺物

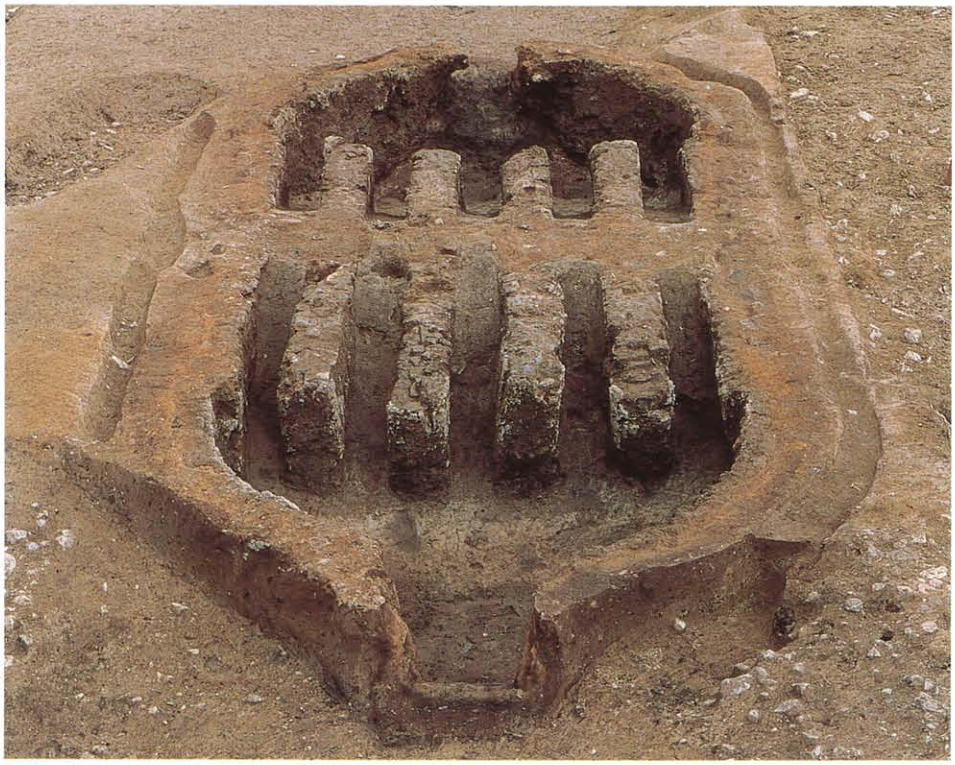


fig. 3　附物遺跡　第４次調査　瓦窯址　（本文259頁）

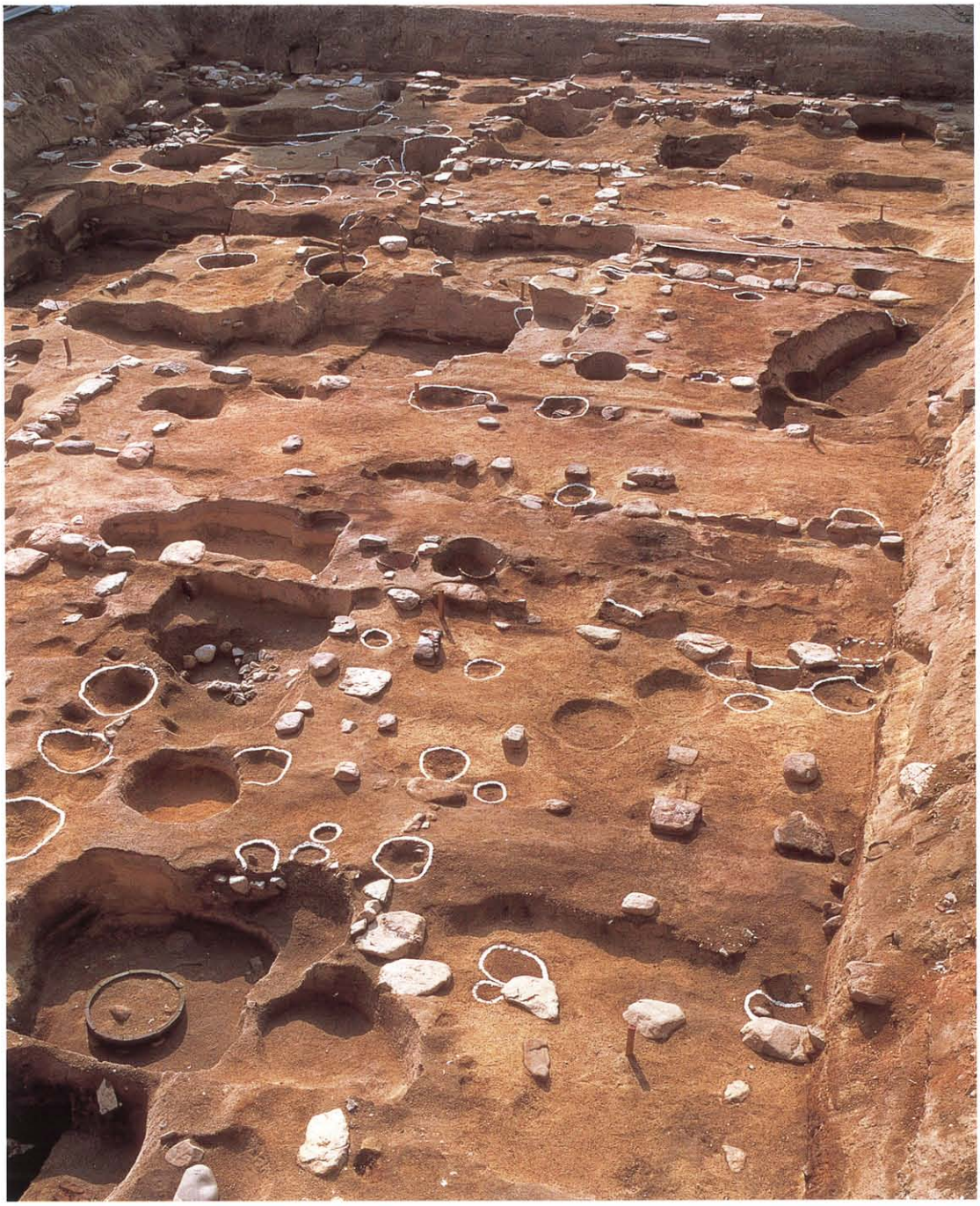


fig. 4　兵庫津遺跡　第15次調査　町屋群

兵庫津遺跡においては、中世から近世にかけての港町の跡が検出された。とくに第２遺構面は「宝永の大火」による火災の痕が生々しい町屋群が確認された。（本文97頁）

fig. 5　白水瓢塚古墳　出土埴輪棺

白水瓢塚古墳の後円部から南東方向にのびる尾根上およびその周辺に埴輪棺あるいは後期の方墳等の埋葬施設が営まれている様子が調査で確認された。7号棺のこの埴輪は大正時代に前方部の西十数メートルの地点で直良信夫氏が調査した埴輪棺と同工のもの。（本文219頁）

序

ミレニアムと呼ばれた年も過ぎ去り、いよいよ２１世紀の幕開けとなり、なにかしら節目を感じさせられる年となりました。

１０年をめどにいたしております「神戸市復興計画」も前期５年が終わりまして、これからは、より内面的な復興と新たなる発展をめざした後期復興事業に取り組みがはじまっております。

また、地方分権の流れのなか、本市におきましても、より充実した文化財行政をめざし組織改変がおこなわれることになりました。

さて、このたび年報でご報告いたします平成１０年度におきましては、多数の復興関連の発掘調査事業が引き続き実施されましたが、その一部については兵庫県教育委員会のご支援をいただきました。

このような状況のなかで、住吉宮町遺跡の古墳群や兵庫津遺跡の町屋跡、二葉町遺跡の船材など貴重な発見が相次ぎました。

これらの遺跡をはじめ、本書に掲載いたしました、数々の成果を通じて埋蔵文化財に対するご理解を深めていただければ幸いです。

最後に、この年報を作成するにあたりましてご協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申しあげます。

平成13年3月

神戸市教育委員会

例　言

1．本書は、神戸市教育委員会が平成10年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会　（史跡・考古資料担当）

檀上重光	前　神戸女子短期大学教授
工楽善通	奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター長
和田晴吾	立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男
社会教育部長	矢野　栄一郎
文化財課長	大勝　俊一
社会教育部主幹	奥田　哲通
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
文化財課主査	丹治　康明・丸山　潔
	菅本　宏明
事務担当学芸員	安田　滋・東　喜代秀
	井尻　格
調査担当学芸員	口野　博史・千種　浩
	谷　正俊・山本　雅和
	富山　直人・佐伯　二郎
	内藤　俊哉・浅谷　誠吾
	石島　三和・中村　大介

㈶神戸市スポーツ教育公社

理事長	福尾　重信
専務理事	田村　篤雄
常務理事	中野　洋二
事業課主幹	中西　光男
文化財調査係長	丹治　康明
事務担当学芸員	山口　英正
調査担当学芸員	西岡　巧次・黒田　恭正
	西岡　誠司・須藤　宏
	斎木　巌・池田　毅
	松林　宏典・阿部　敬生
	橋詰　清孝・藤井　太郎
	川上　厚志・関野　豊
	阿部　功・中谷　正
	平田　朋子・中居　さやか

㈶神戸市体育協会（平成10年10月改組）

会長	笹山　幸俊
副会長	田村　篤雄
専務理事	田村　篤雄（兼務）
常務理事	中野　洋二
同	静観　圭一
総務課長	村田　孝政
総務主幹	中西　光男
総務主査	丹治　康明

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班（神戸市調査担当職員）

小川　良太　　渡辺　昇　　中川　渉　　山田　清朝

山上　雅弘　　深江　英憲　　高木　芳史　　岡本　一秀　　高瀬　一嘉（平成９年度）

2．本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市スポーツ教育公社発行）の５万分の１神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の１地形図を使用した。

3．本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、Ⅰ．平成10年度事業の概要については東　喜代秀が執筆した。本書の編集については、菅本宏明の指導のもとに内藤俊哉が行った。

また、若松町遺跡第１次調査の土壌分析について、京都大学　宮路淳子氏より玉稿をいただいた。

4．市内の各遺跡の調査次数については、現在改正作業中であり、平成12年度より段階的に変更される予定である。本書は従前の調査次数によっているため、今後刊行される報告書等の次数表記については各々確認いただきたい。

5．表紙写真は二葉町遺跡出土の複材刳船（本文181頁）で、裏表紙写真は兵庫津遺跡出土の土人形（本文97頁）である。

目　次

序
例　言

Ⅰ．平成10年度　事業の概要 …… 1
平成10年度　埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 7
平成10年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図 …… 16

Ⅱ．平成10年度の復興事業に伴う発掘調査 …… 23
1．本庄町遺跡　第７次調査 …… 23
2．本庄町遺跡　第８次調査 …… 25
3．岡本北遺跡　第３次調査 …… 27
4．本山遺跡　第29次調査 …… 29
5．本山遺跡　第30次調査 …… 31
6．本山遺跡　第31次調査 …… 33
7．本山遺跡　第32次調査 …… 35
8．本山遺跡　第34次調査 …… 37
9．魚崎郷古酒蔵群　第１次調査 …… 39
10．魚崎郷古酒蔵群　第２次調査 …… 47
11．住吉宮町遺跡　第30次調査 …… 51
12．住吉宮町遺跡　第31次調査 …… 53
13．住吉宮町遺跡　第33次調査 …… 57
14．郡家遺跡城ノ前地区　第39次調査 …… 59
15．郡家遺跡城ノ前地区　第40次調査 …… 61
16．郡家遺跡大蔵地区　第７次調査 …… 63
17．郡家遺跡中地区　第７次調査 …… 67
18．都賀遺跡　第10次－１・２調査 …… 69
19．都賀遺跡　第11・12次調査 …… 73
20．都賀遺跡　第13次調査 …… 77
21．八幡遺跡　第６次調査 …… 79
22．篠原遺跡　第17次調査 …… 81
23．篠原遺跡　第18次調査 …… 85
24．篠原遺跡　第19次調査 …… 87
25．二宮遺跡　第１次調査 …… 89
26．兵庫津遺跡　第15次調査 …… 97
27．兵庫津遺跡　第17次調査 …… 103
28．祇園遺跡　第７次調査 …… 105

29. 兵庫松本遺跡　第１次調査 …… 109
30. 上沢遺跡　（第16・19・20・24・28・29・30次調査）…… 113
31. 上沢遺跡　（第21・22・23・25・26・27次調査）…… 131
32. 湯山遺跡（湯山御殿跡）　第３・４次調査 …… 139
33. 長田神社境内遺跡　第12次調査 …… 141
34. 長田南遺跡　第１次調査 …… 143
35. 御船遺跡　第４次調査 …… 147
36. 御船遺跡　第８次調査 …… 153
37. 御蔵遺跡　（第４・６・８・９・12・17次調査）…… 155
38. 御蔵遺跡　（第５・７・10・11・13・14・16・18次調査）…… 159
39. 神楽遺跡　第11次調査 …… 173
40. 神楽遺跡　第12次調査 …… 177
41. 松野遺跡　第６次－２・７次調査 …… 179
42. 二葉町遺跡　第７次－２・３・４調査 …… 181
43. 若松町遺跡　第１次調査　（付　若松町遺跡の土壌微細形態について）…… 185
44. 若松町遺跡　第２次調査 …… 191
45. 戎町遺跡　第27次調査 …… 197
46. 千歳遺跡　第３次調査 …… 199
47. 千歳遺跡　第４次調査 …… 205
48. 大田町遺跡　第11次調査 …… 207
49. 大田町遺跡　第12次調査 …… 211
50. 須磨天神町遺跡　第２次調査 …… 215
51. 白水瓢塚古墳　第５次調査 …… 219
52. 白水遺跡　第７次調査 …… 225
53. 水谷遺跡　第７次調査 …… 227
54. 日輪寺遺跡　第５次調査 …… 233
55. 日輪寺遺跡　第６次調査 …… 235
56. 今津遺跡　第10次調査 …… 237
57. 今津遺跡　第11次調査 …… 239
58. 今津遺跡　第12次調査 …… 241
59. 新方遺跡東方地区　第７次調査 …… 245
60. 新方遺跡七反田地区 …… 247
61. 新方遺跡野手西方地区　第３次調査 …… 249
62. 出合遺跡　第39次調査 …… 251
63. 出合遺跡　第40次調査 …… 255
64. 出合遺跡　第41次調査 …… 257

Ⅲ．平成10年度の通常事業に伴う発掘調査 …… 259
1．附物遺跡　第４次－１・２調査 …… 259
2．勝雄遺跡　第４次調査 …… 263
3．勝雄遺跡　第５次調査 …… 265
4．木ノ元・経塚山・西北・平井沢遺跡 …… 269
5．寒鳳遺跡　第３次調査 …… 273
6．栃木遺跡　第14次調査 …… 275
7．栃木遺跡　第15次調査 …… 279
8．玉津田中遺跡　第15次調査 …… 283

Ⅳ．平成10年度の保存科学調査・作業の概要 …… 287

挿図目次

fig. 1　住吉宮町第31次調査　古墳群 …… 巻頭
fig. 2　住吉宮町第31次調査　出土遺物 …… 巻頭
fig. 3　附物遺跡第４次調査　瓦窯 …… 巻頭
fig. 4　兵庫津遺跡第15次調査　町屋群 …… 巻頭
fig. 5　白水瓢塚古墳　円筒埴輪棺 …… 巻頭
fig. 6　企画展展示風景〔写真〕 …… 2
fig. 7　こどもたちの考古学講座〔写真〕 …… 2
fig. 8　赤米づくりに挑戦しよう〔写真〕 …… 4
fig. 9　現地説明会風景〔写真〕 …… 4
fig. 10　調査地位置図 …… 23
fig. 11　第５・６遺構面平面図 …… 24
fig. 12　調査地位置図 …… 25
fig. 13　調査区平面図 …… 26
fig. 14　調査地位置図 …… 27
fig. 15　Ⅰ区南壁断面図 …… 27
fig. 16　調査区平面図 …… 28
fig. 17　調査地位置図 …… 29
fig. 18　調査区北壁断面図 …… 29
fig. 19　調査区平面図 …… 30
fig. 20　調査地位置図 …… 31
fig. 21　調査区平面図 …… 32
fig. 22　調査地位置図 …… 33
fig. 23　調査区平面図・断面図 …… 34
fig. 24　調査地位置図 …… 35
fig. 25　調査区平面図・断面図 …… 36
fig. 26　調査地位置図 …… 37
fig. 27　第１・２遺構面平面図 …… 38
fig. 28　調査地位置図 …… 39
fig. 29　調査区設定図 …… 39
fig. 30　東蔵地区１区平面図 …… 40
fig. 31　東蔵地区２・３区平面図 …… 41
fig. 32　東蔵地区２区全景〔写真〕 …… 42
fig. 33　東蔵地区３区前身建物・竈〔写真〕 …… 42
fig. 34　内蔵地区前蔵〔写真〕 …… 43
fig. 35　内蔵地区１～３区平面図 …… 43
fig. 36　内蔵地区４区釜場平面図 …… 44
fig. 37　内蔵地区６区平面図 …… 45
fig. 38　調査区遠景〔写真〕 …… 46
fig. 39　調査地位置図 …… 47
fig. 40　Ⅰ・Ⅱ区全景〔写真〕 …… 47
fig. 41　Ⅱ区石列区画・小竈１〔写真〕 …… 47
fig. 42　調査区平面図 …… 48
fig. 43　Ⅱ区釜場〔写真〕 …… 49
fig. 44　Ⅱ区小竈２〔写真〕 …… 49
fig. 45　Ⅳ区井戸１〔写真〕 …… 50
fig. 46　Ⅳ区水琴窟〔写真〕 …… 50
fig. 47　調査地位置図 …… 51
fig. 48　第２遺構面平面図 …… 52
fig. 49　調査地位置図 …… 53
fig. 50　１号墳〔写真〕 …… 54
fig. 51　３号墳〔写真〕 …… 54
fig. 52　第３遺構面平面図 …… 54
fig. 53　石棺墓７〔写真〕 …… 56
fig. 54　ＳＢ404・406〔写真〕 …… 56
fig. 55　第４遺構面平面図 …… 56
fig. 56　調査地位置図 …… 57

fig. 57　調査区平面図 …… 58
fig. 58　調査地位置図 …… 59
fig. 59　調査区平面図 …… 60
fig. 60　調査地位置図 …… 61
fig. 61　調査区平面図 …… 61
fig. 62　出土遺物実測図 …… 62
fig. 63　調査地位置図 …… 63
fig. 64　第１遺構面平面図 …… 64
fig. 65　掘立柱建物１〔写真〕 …… 64
fig. 66　掘立柱建物２〔写真〕 …… 64
fig. 67　第２遺構面平面図 …… 65
fig. 68　竪穴住居３〔写真〕 …… 66
fig. 69　調査区断面図 …… 66
fig. 70　調査地位置図 …… 67
fig. 71　ＳＢ01全景〔写真〕 …… 67
fig. 72　調査区平面図 …… 68
fig. 73　ＳＢ01平面図・断面図 …… 68
fig. 74　調査地位置図 …… 69
fig. 75　調査区断面図 …… 69
fig. 76　第２遺構面全景〔写真〕 …… 70
fig. 77　第１・２遺構面平面図 …… 70
fig. 78　第３遺構面平面図 …… 71
fig. 79　ＳＫ201〔写真〕 …… 71
fig. 80　ＳＤ206〔写真〕 …… 71
fig. 81　北区周溝墓１〔写真〕 …… 72
fig. 82　南区周溝墓２〔写真〕 …… 72
fig. 83　調査地位置図 …… 73
fig. 84　調査区設定図 …… 74
fig. 85　Ａ区第２遺構面全景〔写真〕 …… 75
fig. 86　Ｃ区第１遺構面全景〔写真〕 …… 75
fig. 87　Ａ～Ｃ区平面図 …… 75
fig. 88　Ｄ－２区平面図・断面図 …… 76
fig. 89　調査地位置図 …… 77
fig. 90　調査区平面図 …… 78
fig. 91　調査地位置図 …… 79
fig. 92　調査区平面図 …… 80
fig. 93　調査地位置図 …… 81
fig. 94　ＳＴ01〔写真〕 …… 81
fig. 95　第２遺構面平面図 …… 82
fig. 96　第３遺構面平面図 …… 83
fig. 97　土器棺１〔写真〕 …… 84
fig. 98　土器棺２〔写真〕 …… 84
fig. 99　土器棺３〔写真〕 …… 84
fig.100　調査地位置図 …… 85
fig.101　調査区平面図・断面図 …… 86
fig.102　調査地位置図 …… 87
fig.103　調査区平面図 …… 88
fig.104　調査地位置図 …… 89
fig.105　Ａ区ＳＢ301・303〔写真〕 …… 90
fig.106　Ａ区ＳＢ304〔写真〕 …… 90
fig.107　Ｂ区飛鳥時代遺構面全景〔写真〕 …… 91
fig.108　Ｂ区ＳＢ309〔写真〕 …… 92
fig.109　Ｂ区ＳＸ201〔写真〕 …… 92
fig.110　鍛冶炉１・２平面図 …… 93
fig.111　Ｃ区全景〔写真〕 …… 94
fig.112　飛鳥時代遺構面平面図 …… 95
fig.113　出土遺物実測図 …… 95
fig.114　調査地位置図 …… 97
fig.115　第１遺構面全景〔写真〕 …… 98
fig.116　第２遺構面全景〔写真〕 …… 98
fig.117　焼土面上カマド出土状況〔写真〕 …… 99
fig.118　石組み２〔写真〕 …… 99
fig.119　第２遺構面平面図 …… 99
fig.120　第４遺構面全景〔写真〕 …… 100
fig.121　第４遺構面平面図 …… 100
fig.122　第６遺構面平面図 …… 101
fig.123　礎石建物〔写真〕 …… 102
fig.124　石敷建物〔写真〕 …… 102
fig.125　調査地遠景〔写真〕 …… 102
fig.126　調査地位置図 …… 103
fig.127　銅銭出土状況〔写真〕 …… 103
fig.128　第３遺構面全景〔写真〕 …… 104
fig.129　炭化材出土状況（柱材・畳）〔写真〕 …… 104
fig.130　第３遺構面平面図 …… 104
fig.131　調査地位置図 …… 105
fig.132　ＳＢ01遺物出土状況〔写真〕 …… 106
fig.133　第３遺構面平面図 …… 106
fig.134　第３遺構面全景〔写真〕 …… 107
fig.135　ＳＢ02・03〔写真〕 …… 108
fig.136　第４遺構面平面図 …… 108
fig.137　調査地位置図 …… 109
fig.138　第１遺構面全景〔写真〕 …… 110
fig.139　ＳＢ10〔写真〕 …… 110
fig.140　第２遺構面平面図 …… 110
fig.141　ＳＸ01〔写真〕 …… 111
fig.142　ＳＸ03〔写真〕 …… 111
fig.143　下層遺構面平面図 …… 111
fig.144　調査区断面図 …… 112
fig.145　調査地位置図 …… 113
fig.146　調査区平面図 …… 114
fig.147　ＳＫ403〔写真〕 …… 114
fig.148　ＳＲ401〔写真〕 …… 114
fig.149　調査区平面図 …… 115
fig.150　調査区全景〔写真〕 …… 116

fig.151　第１・２遺構面平面図 …… 117
fig.152　ＳＥ01平面図・断面図 …… 118
fig.153　ＳＥ01〔写真〕 …… 118
fig.154　ＳＥ201 平面図・断面図 …… 119
fig.155　ＳＥ201 〔写真〕 …… 119
fig.156　第３・５遺構面平面図 …… 120
fig.157　出土遺物実測図 …… 121
fig.158　第６遺構面平面図 …… 122
fig.159　調査区全景〔写真〕 …… 122
fig.160　第１遺構面平面図 …… 123
fig.161　３区第１遺構面全景〔写真〕 …… 124
fig.162　ＳＸ01内獣骨出土状況〔写真〕 …… 124
fig.163　第２遺構面平面図 …… 124
fig.164　第１遺構面平面図 …… 125
fig.165　第１遺構面全景〔写真〕 …… 125
fig.166　ＳＢ201 〔写真〕 …… 125
fig.167　第２遺構面平面図 …… 126
fig.168　第２遺構面全景〔写真〕 …… 127
fig.169　第３遺構面平面図 …… 128
fig.170　調査地遠景〔写真〕 …… 128
fig.171　第１遺構面平面図 …… 129
fig.172　出土遺物実測図 …… 129
fig.173　調査区平面図 …… 130
fig.174　調査地位置図 …… 131
fig.175　調査区全景〔写真〕 …… 132
fig.176　調査区平面図 …… 132
fig.177　調査区平面図 …… 133
fig.178　調査区平面図・断面図 …… 134
fig.179　調査区平面図 …… 135
fig.180　調査区全景〔写真〕 …… 136
fig.181　調査区平面図 …… 136
fig.182　第１遺構面平面図 …… 137
fig.183　第２遺構面平面図 …… 138
fig.184　第２遺構面全景〔写真〕 …… 138
fig.185　調査地位置図 …… 139
fig.186　調査区設定図 …… 139
fig.187　帯曲輪〔写真〕 …… 140
fig.188　隅櫓ＳＷ13〔写真〕 …… 140
fig.189　調査地位置図 …… 141
fig.190　ＳＢ01〔写真〕 …… 142
fig.191　調査区平面図・断面図 …… 142
fig.192　調査地位置図 …… 143
fig.193　ＳＢ04〔写真〕 …… 143
fig.194　第１遺構面ＳＢ04平面図 …… 143
fig.195　第２遺構面西部全景〔写真〕 …… 144
fig.196　第２遺構面平面図 …… 144
fig.197　第３遺構面東部全景〔写真〕 …… 145
fig.198　第３遺構面平面図 …… 145
fig.199　ＳＢ01・02〔写真〕 …… 146
fig.200　調査地位置図 …… 147
fig.201　１・２区第１遺構面平面図・断面図 …… 148
fig.202　３区第１遺構面平面図 …… 149
fig.203　３区第１遺構面全景〔写真〕 …… 150
fig.204　３区第２遺構面全景〔写真〕 …… 150
fig.205　３区第２遺構面平面図 …… 151
fig.206　地割れ痕跡〔写真〕 …… 152
fig.207　調査地位置図 …… 153
fig.208　第１遺構面平面図 …… 153
fig.209　第２遺構面平面図 …… 154
fig.210　調査地位置図 …… 155
fig.211　第１遺構面全景〔写真〕 …… 156
fig.212　１トレンチ全景〔写真〕 …… 157
fig.213　ＳＴ01〔写真〕 …… 157
fig.214　第２遺構面全景〔写真〕 …… 158
fig.215　調査地位置図 …… 159
fig.216　御蔵遺跡遠景〔写真〕 …… 159
fig.217　調査区平面図 …… 160
fig.218　調査区全景〔写真〕 …… 161
fig.219　調査区平面図 …… 161
fig.220　第１遺構面平面図 …… 162
fig.221　ＳＫ01平面図・断面図 …… 162
fig.222　第２・３遺構面平面図 …… 163
fig.223　ＳＨ01平面図・断面図 …… 164
fig.224　調査区断面図 …… 164
fig.225　調査区平面図 …… 165
fig.226　調査区全景〔写真〕 …… 165
fig.227　第１・２遺構面平面図 …… 166
fig.228　第２遺構面水田〔写真〕 …… 167
fig.229　第３遺構面平面図 …… 167
fig.230　第３遺構面全景〔写真〕 …… 167
fig.231　調査区平面図 …… 168
fig.232　調査区断面図 …… 168
fig.233　調査区全景〔写真〕 …… 169
fig.234　第１遺構面平面図 …… 170
fig.235　第１遺構面全景〔写真〕 …… 170
fig.236　第２遺構面平面図 …… 171
fig.237　ＳＸ203 〔写真〕 …… 171
fig.238　調査区平面図 …… 172
fig.239　ＳＥ01平面図・断面図 …… 172
fig.240　調査地位置図 …… 173
fig.241　調査区平面図 …… 173
fig.242　ＳＫ01・04・08平面図・断面図 …… 173
fig.243　ＳＨ01平面図 …… 174
fig.244　調査区全景〔写真〕 …… 175

fig.245　調査区壁面断面図 …… 176
fig.246　1－1区西壁深掘り断面図 …… 176
fig.247　調査地位置図 …… 177
fig.248　調査区平面図 …… 178
fig.249　調査地位置図 …… 179
fig.250　調査区平面図 …… 180
fig.251　調査地遠景〔写真〕 …… 180
fig.252　調査地位置図 …… 181
fig.253　ＳＢ09〔写真〕 …… 182
fig.254　ＳＥ01〔写真〕 …… 182
fig.255　ＳＴ02〔写真〕 …… 183
fig.256　ＳＸ02〔写真〕 …… 183
fig.257　調査区平面図 …… 183
fig.258　調査地遠景〔写真〕 …… 184
fig.259　調査地位置図 …… 185
fig.260　第１遺構面平面図 …… 186
fig.261　写真１〔写真〕 …… 189
fig.262　写真２〔写真〕 …… 189
fig.263　写真３〔写真〕 …… 190
fig.264　写真４〔写真〕 …… 190
fig.265　写真５〔写真〕 …… 190
fig.266　試料採取地点 …… 190
fig.267　試料採取断面模試図 …… 190
fig.268　調査地位置図 …… 191
fig.269　第１遺構面平面図 …… 192
fig.270　第２遺構面全景〔写真〕 …… 193
fig.271　第２遺構面平面図 …… 193
fig.272　ＳＴ101　〔写真〕 …… 194
fig.273　ＳＴ101　平面図・断面図 …… 194
fig.274　ＳＢ201・203平面図 …… 194
fig.275　出土遺物実測図１ …… 195
fig.276　出土遺物実測図２ …… 196
fig.277　調査地位置図 …… 197
fig.278　ＳＢ01〔写真〕 …… 198
fig.279　調査区平面図 …… 198
fig.280　調査地位置図 …… 199
fig.281　西区第１・２遺構面平面図 …… 200
fig.282　西区第１～２遺構面全景〔写真〕 …… 201
fig.283　西区調査区断面図 …… 202
fig.284　東区第１遺構面平面図 …… 203
fig.285　東区第１遺構面全景〔写真〕 …… 204
fig.286　ＳＲ301　〔写真〕 …… 204
fig.287　調査地位置図 …… 205
fig.288　調査区断面図 …… 205
fig.289　調査区平面図 …… 206
fig.290　調査地位置図 …… 207
fig.291　第１遺構面東部全景〔写真〕 …… 208
fig.292　第１遺構面平面図 …… 208
fig.293　第２・６・７遺構面平面図 …… 209
fig.294　ＳＤ601　〔写真〕 …… 210
fig.295　杭703　〔写真〕 …… 210
fig.296　出土遺物実測図 …… 210
fig.297　調査地位置図 …… 211
fig.298　ＳＢ101　〔写真〕 …… 211
fig.299　第１・２遺構面平面図 …… 212
fig.300　第３・４遺構面平面図 …… 213
fig.301　ＳＢ201　〔写真〕 …… 214
fig.302　ＳＢ301　〔写真〕 …… 214
fig.303　調査地位置図 …… 215
fig.304　Ⅶ・Ⅻ区平面図 …… 215
fig.305　ＳＸ1201〔写真〕 …… 215
fig.306　ＳＥ801　〔写真〕 …… 216
fig.307　呪符木簡実測図 …… 216
fig.308　ＳＥ801　平面図・断面図 …… 216
fig.309　Ⅷ区・Ⅸ～ⅩⅤ区平面図 …… 217
fig.310　ＳＢ701　〔写真〕 …… 218
fig.311　ＳＥ1401〔写真〕 …… 218
fig.312　出土瓦実測図 …… 218
fig.313　調査地位置図 …… 219
fig.314　調査区全景〔写真〕 …… 220
fig.315　調査区平面図 …… 220
fig.316　ＳＴ05・06平面図・断面図 …… 221
fig.317　ＳＴ07平面図・断面図 …… 221
fig.318　ＳＴ07〔写真〕 …… 221
fig.319　出土遺物実測図１ …… 222
fig.320　出土遺物実測図２ …… 223
fig.321　２号墳〔写真〕 …… 224
fig.322　２号墳平面図 …… 224
fig.323　調査地位置図 …… 225
fig.324　調査区遠景〔写真〕 …… 226
fig.325　第１トレンチ第２遺構面平面図 …… 226
fig.326　調査地位置図 …… 227
fig.327　ＳＤ01遺物出土状況〔写真〕 …… 228
fig.328　ＳＤ02遺物出土状況〔写真〕 …… 228
fig.329　馬形埴輪〔写真〕 …… 229
fig.330　盾形埴輪・靫形埴輪〔写真〕 …… 229
fig.331　出土遺物実測図 …… 230
fig.332　調査区平面図・断面図 …… 231
fig.333　調査区全景〔写真〕 …… 232
fig.334　調査地位置図 …… 233
fig.335　調査区南壁断面図 …… 233
fig.336　調査区全景〔写真〕 …… 234
fig.337　古墳時代遺構面平面図 …… 234
fig.338　調査地位置図 …… 235

fig.339　遺構配置図 …… 235
fig.340　ＳＨ11〔写真〕 …… 236
fig.341　調査区全景〔写真〕 …… 236
fig.342　調査地位置図 …… 237
fig.343　調査区設定図 …… 237
fig.344　調査区平面図・断面図 …… 238
fig.345　調査地位置図 …… 239
fig.346　調査区平面図 …… 240
fig.347　調査地位置図 …… 241
fig.348　第１遺構面全景〔写真〕 …… 241
fig.349　第２遺構面全景〔写真〕 …… 241
fig.350　第１遺構面平面図 …… 242
fig.351　出土遺物実測図 …… 243
fig.352　第２遺構面平面図・断面図 …… 244
fig.353　ＳＫ202・203平面図・断面図 …… 244
fig.354　調査地位置図 …… 245
fig.355　調査区全景〔写真〕 …… 246
fig.356　調査区平面図 …… 246
fig.357　調査地位置図 …… 247
fig.358　調査区設定図 …… 248
fig.359　調査区断面図 …… 248
fig.360　調査地位置図 …… 249
fig.361　調査区東壁断面図 …… 249
fig.362　調査区平面図 …… 250
fig.363　落ち込み内出土土器〔写真〕 …… 250
fig.364　調査地位置図 …… 251
fig.365　第２遺構面平面図 …… 252
fig.366　第３・４遺構面平面図 …… 253
fig.367　流路２〔写真〕 …… 254
fig.368　ＳＫ18〔写真〕 …… 254
fig.369　調査地位置図 …… 255
fig.370　調査区平面図 …… 256
fig.371　調査地位置図 …… 257
fig.372　第２遺構面平面図 …… 257
fig.373　Ｂ－１区第３遺構面平面図 …… 258
fig.374　調査地位置図 …… 259
fig.375　調査区平面図 …… 260
fig.376　瓦窯および関連施設平面図・断面図 …… 261
fig.377　調査地遠景〔写真〕 …… 262
fig.378　調査地位置図 …… 263
fig.379　第５調査区〔写真〕 …… 264
fig.380　第８調査区〔写真〕 …… 264
fig.381　調査地位置図 …… 265
fig.382　ＳＢ01〔写真〕 …… 266
fig.383　ＳＢ03〔写真〕 …… 266
fig.384　第11調査区平面図 …… 266
fig.385　調査区遠景〔写真〕 …… 267
fig.386　出土遺物実測図 …… 268
fig.387　調査地位置図 …… 269
fig.388　経塚山遺跡調査区平面図 …… 270
fig.389　平井沢遺跡遠景〔写真〕 …… 271
fig.390　平井沢遺跡２次調査平面図 …… 271
fig.391　南僧尾城縄張図 …… 272
fig.392　南僧尾地区遠景〔写真〕 …… 272
fig.393　調査地位置図 …… 273
fig.394　調査区設定図 …… 273
fig.395　10区全景〔写真〕 …… 274
fig.396　６～10区全景〔写真〕 …… 274
fig.397　１～５区全景〔写真〕 …… 274
fig.398　調査地位置図 …… 275
fig.399　供養塔〔写真〕 …… 275
fig.400　第１地区平面図 …… 276
fig.401　弥生時代遺構面〔写真〕 …… 277
fig.402　第２地区平面図 …… 278
fig.403　調査地位置図 …… 279
fig.404　第１・２遺構面平面図 …… 280
fig.405　第３・４遺構面平面図 …… 281
fig.406　第４遺構面全景〔写真〕 …… 282
fig.407　調査地位置図 …… 283
fig.408　第２遺構面平面図 …… 284
fig.409　中央部第２遺構面〔写真〕 …… 284
fig.410　ＳＫ05平面図・立面図 …… 285
fig.411　出土遺物実測図 …… 286
fig.412　住吉宮町遺跡31次調査
　地滑り断面土層転写〔写真〕 …… 287
fig.413　同　ガーゼ貼り作業〔写真〕 …… 288
fig.414　同　剥がし作業〔写真〕 …… 288
fig.415　兵庫津遺跡15次調査
　樹脂塗布作業〔写真〕 …… 288
fig.416　兵庫津遺跡15次調査
　炭化材取り上げ〔写真〕 …… 289
fig.417　同　〔写真〕 …… 289
fig.418　同　〔写真〕 …… 289
fig.419　同　〔写真〕 …… 289
fig.420　兵庫津遺跡15次　土錘と網〔写真〕 …… 290
fig.421　同　炭化した草鞋〔写真〕 …… 290
fig.422　同　炭化した畳〔写真〕 …… 290
fig.423　同左　拡大〔写真〕 …… 290
fig.424　二葉町遺跡　船材Ｘ線透過象〔写真〕 …… 291
fig.425　兵庫津遺跡17次　緡銭〔写真〕 …… 291
fig.426　二葉町遺跡　近世桶含浸準備〔写真〕 …… 292
fig.427　同　船材〔写真〕 …… 292
fig.428　同　船材〔写真〕 …… 292

Ⅰ．平成10年度　事業の概要

1．はじめに

平成10年度は阪神・淡路大震災から４年目を迎え、震災復興事業に支障をきたすことなく、埋蔵文化財の適切な保存保護をはかるために、震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が全事業の中心に位置づけられ、そのための体制で取り組んだ。

震災復興関連調査事業は、平成７年の文化庁次長通知「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」と、兵庫県教育長通知「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱い適用要領」に基づいた特例措置の制度が平成12年３月31日まで延長され、各事業との調整はほぼ順調に行われた。

また平成10年度より、震災復興土地区画整理事業区域内の街路築造工事に伴う調査が本格的に開始された。震災復興市街地再開発事業に伴う調査も遅滞なく進捗している。

さらに、平成10年度末には震災復興土地区画整理事業区域の仮換地指定が40％に達し、区域内の個人住宅建築や共同再建事業に伴う調査が増加し、長田区の若松町遺跡、御蔵遺跡、神楽遺跡での調査で、地域の歴史を考える上での貴重な発見が相次いだ。

なお、全国から兵庫県教育委員会に派遣された専門職員による発掘調査の支援は平成９年度をもって終了し、平成10年度は兵庫県教育委員会の専門職員に本市の発掘調査を10件支援していただいた。

一方、通常事業に伴う調査は、北区の圃場整備事業関連が中心で、前年度と横這いの事業量であった。

また、埋蔵文化財に対する市民の関心の高まりを背景に、重要な発見があった場合に開催する現地説明会の他に、地元住民を対象とした説明会を開催し、埋蔵文化財の普及啓発に努めている。

2．普及啓発事業

〔埋蔵文化財センター〕

神戸市埋蔵文化財センターでは、特別展示・企画展示・速報展示を年数回実施し、調査成果を公開している。

特別展示

本年度は『縄文人と弥生人』と題した特別展示を開催した。これは平成９年に西区の新方遺跡より発見された弥生時代前期の人骨が、形質人類学的に縄文人の特徴が顕著であることが注目されたのを契機に、縄文人と弥生人がどのような顔・表情をもった人々であったのかを、当時の人々が自ら描いたり、形作ったりしたものを通して、考えてみるという趣旨で実施した。期間中の10月18日には、京都大学霊長類研究所教授片山一道氏の講演会「縄文人と弥生人－新方人骨発見の意義－」を開催し、170名の聴講を得た。

展示会名称	開催期間	入館者数
『縄文人と弥生人』	H10. 10／３～11／15	3,042名
『地下に眠る神戸の歴史展XI』	H10. ７／25～８／30	2,969名
『むかしのアクセサリー －ちょっとおしゃれな神戸っ子』	H11. ３／27～６／６	11,611名
『二葉町遺跡出土の船材』	H10. ８／１～８／２	40名

企画展示　震災復興関連発掘調査を含めた近年の調査成果を展示した、『地下に眠る神戸の歴史展XI』と、縄文時代から近世の装身具を展示した『むかしのアクセサリー－ちょっとおしゃれな神戸っ子－』の２回の企画展を開催し、好評を得た。

速報展示　新聞等で大きく報道され話題を集めた、長田区二葉町遺跡出土の船材を、埋蔵文化財センターエントランスホールにて展示した速報展『二葉町遺跡出土の船材』を開催し、保存処理する前に一般公開した。

学校展示　遺跡から出土した資料を子供たちが直接目で見て触れながら、地域の歴史や文化を学ぶことを目的に、平成10年度より社会科教育の一環として小中学校で展示会を開催した。

館外展示　地域の身近な遺跡を紹介し、地域の歴史について理解を深めてもらうため、地域の施設を利用し展示会を開催した。

学　校　展　示		
展　示　会　名　称	開催期間	場　　所
須磨区の遺跡	５／29～６／19 11／14～12／１	須磨区若宮小学校
宮川小学校とその周辺の遺跡	11／14～12／１	長田区宮川小学校
館　外　展　示		
展　示　会　名　称	開催期間	場　　所
新方ムラのまつり	６／24～７／３	神戸市立玉津南公民館
地下に眠る道場の歴史展	11／２～11／３	神戸市立農業振興センター

考古学講座　『こどもたちの考古学講座』は学校の休日である第２・第４土曜日の催しとして、体験学習を通じて、先人の生活や技術を学び、歴史に興味を抱いてもらう目的のため、小学校４年生以上高校生までを対象として開催した。また、平成10年度より新たに「赤米作りに挑戦しよう」が講座の一つに加わった。さらに、埋蔵文化財センターから比較的遠隔地である市内東部・北部地域のこどもたちの便宜をはかるため、地域の施設での講座も開催した。なお成人対象の『体験考古学講座』も昨年に引き続き開催している。

fig. 6　企画展展示風景

fig. 7　こどもたちの考古学講座

こどもたちの考古学講座			
講　座　名	開　催　日	内　　容	参加者
遺跡発掘に挑戦しよう	平成10年４月25日	発掘調査中の遺跡で実際の発掘調査を体験する。	86名
石包丁をつくろう	平成10年５月23日	滋賀県産高島石で石包丁などの磨製石器をつくる。	85名
勾玉づくりに挑戦	平成10年７月25日	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	137名
土器・埴輪をつくろう	平成10年８月１日	乾燥すれば硬化する粘土で土器・埴輪をつくる。	168名
縄文時代の葉っぱをさがす	平成10年８月29日	縄文時代の木葉を水洗選別して取り出し種類を調べる。	91名
古代人の生活体験	平成10年11月14日	大歳山遺跡公園の復元住居で火起こしや調理をおこなう。	38名
縄文クッキーをつくろう	平成10年12月12日	ドングリ（シイの実）を粉にしてクッキーを焼く。	48名
出張します！こどもたちの考古学講座			
講　座　名	開　催　日	内　　容	参加者
勾玉づくりに挑戦（市東部対象）	平成10年５月９日	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	47名
土器・埴輪をつくろう 勾玉づくりに挑戦（市北部対象）	平成10年９月12日		中 止
土器・埴輪をつくろう（市東部対象）	平成10年９月26日	乾燥すれば硬化する粘土で土器・埴輪をつくる。	22名
体験考古学講座			
講　座　名	開　催　日	内　　容	参加者
勾玉づくりに挑戦	平成11年２月20日	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	40名
土器・埴輪をつくる　成形	平成11年３月20日	実際に粘土から土器を成形する。	19名
土器・埴輪をつくる　焼成	平成11年４月３日	乾燥させた土器を野焼き法によって焼成する。	19名
古代人が食べていた『赤米作りに挑戦しよう』			
講　座　名	開　催　日	内　　容	参加者
貫頭衣を着て田植えに挑戦	平成10年６月13日	神出自然教育園の水田において、古代米である赤米を実際に田植えから収穫までを体験する。	51名
がんばって草取りをしよう	平成10年８月８日		31名
石包丁で収穫に挑戦	平成10年10月24日		49名
		合　　計	931名

〔文化財保護強調週間の催し〕

大歳山遺跡公園では、11月１日から７日までの期間、復元した竪穴住居の内部を公開するとともに、古代人の生活の一部を体験できるように、舞錐による火起こしや臼・杵による米の脱穀等をおこなった。また、火起こしが成功した参加者には、「古代人認定書」を配付した。７日間の参加者は、1,246名であった。

〔発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供〕

発掘調査及び出土遺物の整理において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地調査期間中であって安全管理上可能であれば現地説明会を開催している。さらに、要望があれば地元住民対象の説明会も開催している。本年度も下表のとおり８件の説明会を開催した。

現地説明会			
遺　跡　名	内　　容	開　催　日	見学者数
長田区若松町遺跡	弥生時代後期の畠跡	平成10年６月６日	300名
兵庫区兵庫津遺跡	近世の町屋跡	平成10年８月14日～21日	60名
東灘区住吉宮町遺跡	古墳時代の馬の殉葬	平成11年１月24日	430名
中央区二宮遺跡	飛鳥時代の鍛冶工房跡	平成11年３月７日	130名
地元説明会			
遺　跡　名	内　　容	開　催　日	見学者数
兵庫区上沢遺跡	弥生時代の集落跡	平成10年５月10日	180名
長田区神楽遺跡	弥生時代の集落跡	平成10年６月４日～５日	98名
長田区御蔵遺跡	平安時代の木棺墓	平成10年10月４日	80名
長田区松野遺跡	古墳時代の集落跡	平成11年３月２日	60名

記者発表のみ		
遺　跡　名	内　　容	発　表　日
北区湯山遺跡	湯山御殿跡の曲輪遺構	平成10年６月19日
長田区二葉町遺跡	鎌倉時代の船	平成10年７月30日
長田区長田神社境内遺跡	弥生時代の後頭部結髪土偶	平成10年10月１日

fig. 8　赤米づくりに挑戦しよう

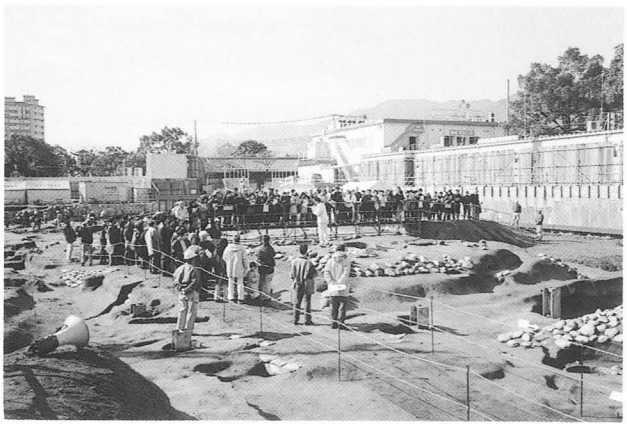


fig. 9　現地説明会風景

〔資料等の貸出〕

平成10年度に各機関等に貸し出した資料は、写真41件139点、出土遺物９件125点である。

〔刊行物〕

平成10年度の刊行物は以下の６点である。

(1)	平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報	平成11年３月発行	頒価 3,000 円
(2)	白水遺跡第４次発掘調査報告書	平成11年３月発行	頒価 1,000 円
(3)	北青木遺跡	平成11年３月発行	頒価 1,800 円
(4)	地下に眠る神戸の歴史展XI（展示図録）	平成10年７月発行	頒価　300 円
(5)	縄文人と弥生人（展示図録）	平成10年10月発行	頒価　500 円
(6)	神戸市埋蔵文化財分布図	平成10年４月発行	頒価 1,000 円

３．文化財保護条例

平成９年に制定された『神戸市文化財の保護及び文化財等を取り巻く文化環境の保全に関する条例』に基づき、平成10年度に文化財保護審議会に諮問し、答申を受けた指定文化財・登録文化財等のうち、埋蔵文化財に関係するものとして以下の１件が指定された。

神戸市指定有形文化財（考古資料）

滝ノ奥経塚出土遺物　一括

４．調査事業

平成10年度の発掘調査事業は、民間事業関連・公共事業関連の調査の一部及び国庫補助事業については教育委員会の直営で実施し、公共事業関連の調査の大部分を㈶神戸市スポーツ教育公社に委託して実施した。なお、㈶神戸市スポーツ教育公社は平成10年10月に㈶神戸市体育協会に統合された。

本市では便宜上、阪神・淡路大震災に起因する復旧・復興事業関連調査と起因しない通常事業関連調査を区別し処理している。全体の調査件数及び発掘調査面積は別表のとおりである。平成９年度と比較すると調査件数はほぼ同数であるが、調査面積が約３割減少している。このことは復興に伴う大規模な宅地造成などの開発事業がほぼ終わり、小規模な個人住宅等へ調査の主体が移行してきたことに起因する。これらの調査に要した費用は1,286,052 千円である。

復興事業に伴う調査

復興事業に伴う調査は８４件で、このうち６１件が個人及び中小企業が事業者の国庫補助事業で、大企業及び公共の事業者の経費負担による受託調査は２３件である。国庫補助事業は 475,000 千円で、内訳は事前の試掘・確認調査が 17,214 千円、個人及び中小企業の発掘調査が 451,793 千円、その他整理・報告書作成等が 5,993 千円である。

平成10年度は、兵庫県教育委員会の埋蔵文化財専門職員に、本市の発掘調査を10件支援していただき、その他区画整理事業に伴い県が直接受託した調査が１件あった。

５．市内発掘調査の概要

平成10年度の主な調査成果を時代順にまとめる。

長田区**若松町遺跡**では、市内ではじめて弥生時代後期の畠の畝溝が検出され、弥生時代の食料生産を考える上での良好な資料を提供した。

東灘区**住吉宮町遺跡**では、古墳時代後期の方墳８基と古墳の周濠から馬の歯が出土し、馬を殉殺し埋葬したものと推定されている。

中央区**二宮遺跡**では、飛鳥時代の鍛冶工房跡が検出され、鍛冶炉専用の小屋と排水施設を持つことから、専業化された集団が鉄製品の生産を行っていたことが推定されている。

長田区**二葉町遺跡**では、井戸枠の部材として転用された鎌倉時代の船材が出土した。三材構造船と判明し、鎌倉時代の船の構造が明らかにする資料が得られた。

兵庫区**兵庫津遺跡**では、江戸時代中期の町屋群が検出された。軒を接して長屋が立ち並び、当時の庶民のくらしをうかがわせる遺物が大量に出土し話題を呼んだ。

文化財保護法に基づく届出・通知，試掘依頼等

No.	内容			件数
1	発見　発掘届・通知（保護法57条関係）			237件
	i	調査のための発掘届（57条第１項）	1件	
		民間事業に伴う発掘届（57－２）	200件	
		通常事業関連	26件	
		復興事業関連	174件	
	ii	公共事業に伴う発掘通知（57－３）	30件	
		通常事業関連	23件	
		復興事業関連	7件	
	iii	発見届・発見通知（57－５・６）	6件	
2	発掘調査の報告（保護法98条２）			105件
3	開発行為事前審査等各種申請			151件
4	試掘調査（依頼件数）			222件
	i	通常事業関連	61件	
		通常公共関連	31件	
		通常民間関連	30件	
	ii	復興事業関連	161件	
		復興公共関連	13件	
		復興民間関連	148件	

No.	内容			件数
5	発掘調査（大規模確認調査も含む）			111件
	i	公共事業に伴う発掘調査	35件	通常事業27件 復興事業84件
		通常事業関連	15件	
		復興事業関連	20件	
	ii	民間事業に伴う発掘調査	68件	
		通常事業関連	4件	
		復興事業関連	64件	
	iii	圃場整備事業に伴う発掘調査	8件	
	iv	立会調査	0件	
6	整理作業（復興調査整理作業を含む）			3件

発掘調査面積（単位：㎡）

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	17,521	449	17,970	18,446
復興事業	18,574	25,533	44,107	80,975
計	36,095	25,982	62,077	99,421

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(1)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	本庄町遺跡第7次調査	東灘区本庄町3丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	800㎡ 4,800㎡	10.4.1～10.5.15	水田畦畔	共同住宅建設
2	本庄町遺跡第8次調査	東灘区本庄町2丁目67	神戸市教育委員会	谷　正俊	137㎡ 137㎡	10.6.3～10.6.17	弥生時代の土坑 縄文時代の土器群	事務所再建 〔国庫補助事業〕
3	岡本北遺跡第3次調査	東灘区西岡本5丁目43－1	神戸市教育委員会	石島　三和	44㎡ 84㎡	10.10.14～10.10.29	中世および古墳時代初頭、弥生時代後期と考えられる3時期の遺構面を確認	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
4	本山遺跡第29次調査	東灘区田中町1丁目81－1	神戸市教育委員会	石島　三和	330㎡ 330㎡	10.5.27～10.6.15	遺構は確認されず 弥生時代中期の土器・石器が出土	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
5	本山遺跡第30次調査	東灘区本山南町8丁目18－13 －9～11	神戸市教育委員会	富山　直人	70㎡ 70㎡	10.6.8～10.6.13	中世の溝、土坑、流路	店舗付共同住宅建設 〔国庫補助事業按分〕
6	本山遺跡第31次調査	東灘区本山北町3丁目116・119	神戸市教育委員会	藤井　太郎	130㎡ 130㎡	10.6.15～10.7.6	古墳時代の柱穴	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
7	本山遺跡第32次調査	東灘区本山北町3丁目4－24	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	70㎡ 70㎡	10.8.6～10.8.21	弥生時代中期の土坑、古墳時代～中世の遺物包含層	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
8	本山遺跡第34次調査	東灘区本山北町1丁目11	神戸市教育委員会	富山　直人	540㎡ 1,350㎡	10.7.13～10.11.30	中世および古墳時代の溝、土坑、流路	共同住宅建設
9	魚崎郷古酒蔵群 第1次調査	東灘区魚崎南町3丁目18－1 19－1	神戸市教育委員会	関野　豊	1,400㎡ 1,400㎡	10.7.13～10.11.30	近世以降の酒蔵および付属施設	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
10	魚崎郷古酒蔵群 第2次調査	東灘区魚崎南町4丁目547－1～3	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	1,450㎡ 1,450㎡	10.11.24～11.2.9	酒蔵に伴う石垣、石列、カマド	共同住宅建設
11	住吉宮町遺跡第30次調査	東灘区住吉本町1丁目20－7	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	300㎡ 900㎡	10.4.1～10.4.30 (10.2.16～)	掘立柱建物、焼土坑、石組み遺構および流路	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
12	住吉宮町遺跡第31次調査	東灘区住吉宮町4丁目	神戸市教育委員会	菅本・浅谷 中村・平田	3,260㎡ 7,230㎡	10.6.25～11.3.16	古墳10基、うち最大の古墳から県下で初めて馬の殉殺例を確認	住吉駅南再開発事業 〔国庫補助事業〕
13	住吉宮町遺跡第33次調査	東灘区住吉宮町3丁目4	神戸市教育委員会	関野　豊	40㎡ 120㎡	11.1.6～11.2.1	奈良時代の旧河道、ピット、古墳時代後期の柱列、落ち込み、ピット等 弥生時代後期の土坑、ピット	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
14	郡家遺跡城ノ前地区 第39次調査	東灘区御影町御影字城ノ前442－1 他	神戸市教育委員会	石島　三和	216㎡ 216㎡	10.8.5～10.10.5	弥生後期～古墳時代のピット、土坑等	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
15	郡家遺跡城ノ前地区 第40次調査	東灘区御影町御影字城ノ前478－4	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	360㎡ 400㎡	10.9.7～10.9.29	古墳時代後期の土坑、ピット　中世の流路	事務所付共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
16	郡家遺跡大蔵地区 第7次調査	東灘区御影町郡家字大蔵24	神戸市教育委員会	菅本　宏明 中村　大介 平田　朋子	670㎡ 670㎡	10.4.23～10.7.15	奈良時代以前の建物跡	共同住宅建設
17	郡家遺跡中地区 第7次調査	東灘区御影中町2	神戸市教育委員会	山田　清朝 高木　芳史 (県支援)	372㎡ 372㎡	10.8.17～10.9.4	中世の掘立柱建物 古墳時代後期の柱穴	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(2)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
18	都賀遺跡第9次調査	灘区神前町5丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	川上　厚志	70㎡ 70㎡	10.4.1～10.4.28	鋤溝	市営住宅建設
19	都賀遺跡第10次－1調査	灘区神前町3丁目4－1	神戸市教育委員会	富山　直人	100㎡ 200㎡	11.1.18～11.2.11	中世の掘立柱建物　弥生時代の方形周溝墓	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
20	都賀遺跡第10次－2調査	灘区神前町3丁目4－1	神戸市教育委員会	富山　直人	60㎡ 120㎡	11.1.18～11.2.12	同　上	道路建設
21	都賀遺跡第11次調査	灘区神前町3丁目441－1・2	(財)神戸市体育協会	藤井　太郎 阿部　功	160㎡ 160㎡	11.1.25～11.3.31	近世の土坑 弥生時代の溝、土坑	山手幹線道路拡幅
22	都賀遺跡第12次調査	灘区神前町3丁目	(財)神戸市体育協会	藤井　太郎 阿部　功	185㎡ 185㎡	11.2.24～11.3.31	弥生時代の溝、土坑	山手幹線道路拡幅
23	都賀遺跡第13次調査	灘区神前町3丁目441－1・2	神戸市教育委員会	藤井　太郎	40㎡ 40㎡	11.3.8～11.3.23	弥生時代の方形周溝墓の可能性のある溝	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
24	八幡遺跡第6次調査	灘区八幡町1丁目8－15	神戸市教育委員会	富山　直人	40㎡ 40㎡	10.7.16～10.7.23	中世の区画溝	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
25	篠原遺跡第17次調査	灘区篠原中町2丁目7	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	149㎡ 386㎡	10.4.1～10.7.27 (10.3.3～)	縄文時代晩期の土器棺、ピット 弥生時代の竪穴住居、土坑、ピット	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
26	篠原遺跡第18次調査	灘区篠原中町1丁目	神戸市教育委員会	中村　大介	30㎡ 60㎡	10.4.17～10.4.28	弥生時代末の溝　中世の流路	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
27	篠原遺跡第19次調査	灘区篠原北町2丁目	神戸市教育委員会	石島　三和	220㎡ 220㎡	10.7.7～10.8.6	弥生時代後期の土坑、ピット等 磨製石剣出土	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
28	二宮遺跡第1次調査	中央区二宮町3丁目12	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	谷　正俊	2,374㎡ 8,536㎡	10.8.31～11.3.31	飛鳥時代の掘立柱建物、竪穴住居および鍛冶炉跡	市営住宅建設
29	兵庫津遺跡第15次調査	兵庫区七宮町2丁目12	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	750㎡ 5,000㎡	10.5.13～11.1.31	近世町屋に伴う建物、井戸、石組み遺構、埋甕など	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
30	兵庫津遺跡第17次調査	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	内藤　俊哉	60㎡ 420㎡	11.2.4～11.3.31 H11継続	中世末～近世にかけての町屋に伴う遺構	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
31	兵庫津遺跡第18次調査	兵庫区本町1丁目12・13	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	100㎡ 100㎡	11.3.16～11.3.31 H11継続	近世の礎石、ピット、土坑	共同住宅建設〔国庫補助事業〕
32	祇園遺跡第7次調査	兵庫区上祇園町4丁目	(財)神戸市体育協会	西岡　誠司	68㎡ 272㎡	10.12.1～11.1.11	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴住居、土坑	道路拡幅
33	兵庫松本遺跡第1次調査	兵庫区松本通2丁目5－1	神戸市教育委員会	松林　宏典	285㎡ 341㎡	10.4.1～10.5.26	弥生時代の流路 弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居、掘立柱建物	市営住宅建設
34	上沢遺跡第16・19次調査	兵庫区上沢通8丁目10－6	神戸市教育委員会	斎木　巌	280㎡ 620㎡	10.4.1～10.6.9	弥生時代後期の円形竪穴住居	山手幹線拡幅

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(3)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
35	上沢遺跡第20次調査	長田区五番町1丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	橋詰　清孝	110㎡ 110㎡	10. 5.19～10. 6.26	中世および平安時代前期の井戸、掘立柱建物	山手幹線拡幅
36	上沢遺跡第21次調査	兵庫区上沢通8丁目12－8他	神戸市教育委員会	斎木　巌	100㎡ 100㎡	10. 6.15～10. 7.20	中世の掘立柱建物	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
37	上沢遺跡第22次調査	兵庫区上沢通8丁目7－18	神戸市教育委員会	斎木　巌	35㎡ 70㎡	10. 7.21～10. 8. 6	古墳時代初頭の溝 弥生時代前期の土坑、溝	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
38	上沢遺跡第23次調査	兵庫区五番町2丁目	神戸市教育委員会	中村　大介	45㎡ 90㎡	10. 7.29～10. 8.13	古墳時代後期の掘立柱建物 中世の溝	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
39	上沢遺跡第24次調査	兵庫区上沢通8丁目1－1	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	斎木　巌	360㎡ 480㎡	10. 8.20～10.10.20	平安時代の掘立柱建物 弥生時代前期の土坑	山手幹線拡幅
40	上沢遺跡第25次調査	長田区六番町1丁目4－1	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	81㎡ 243㎡	10. 9.30～10.10.23	弥生時代～中世の遺物包含層 土石流	事務所再建 〔国庫補助事業〕
41	上沢遺跡第26次調査	長田区五番町2丁目7－12	神戸市教育委員会	斎木　巌	60㎡ 60㎡	10.10.26～10.11. 5	奈良時代掘立柱建物 6世紀末の掘立柱建物	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
42	上沢遺跡第27次調査	兵庫区上沢通8丁目13－21	神戸市教育委員会	斎木　巌	40㎡ 80㎡	11.11. 9～11.11.30	中世の掘立柱建物、土坑 布留期の竪穴住居	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
43-1	上沢遺跡第28次調査	兵庫区上沢通8丁目8	(財)神戸市体育協会	斎木　巌 中居さやか	220㎡ 660㎡	10.12. 4～11. 2. 5	古墳時代初頭の竪穴住居 奈良時代の掘立柱建物	公園建設事業
43-2	上沢遺跡第29次調査	兵庫区上沢通7丁目2－3	(財)神戸市体育協会	中居さやか	80㎡ 160㎡	11. 2. 8～11. 2.25	自然流路	山手幹線拡幅
43-3	上沢遺跡第30次調査	兵庫区上沢通8丁目6－14	(財)神戸市体育協会	斎木　巌	30㎡ 60㎡	11. 3. 9～11. 3.26	中世の土坑、ピット 古墳時代初頭の溝	区画整理事業
44	上沢遺跡第31次調査	兵庫区上沢通8丁目6－14	神戸市教育委員会	斎木　巌	8㎡ 8㎡	10. 7.21～10. 8. 6	中世～奈良時代の土坑、ピット	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
45	湯山遺跡（湯山御殿跡）第3・4次調査	北区有馬町字有馬	神戸市教育委員会	須藤　宏	130㎡ 130㎡	10. 4. 8～10.12.24	湯山御殿跡に伴う石垣、風呂、建物跡	寺院庫裏再建 〔国庫補助事業〕
46	中遺跡（試掘）	北区八多町中字下ノウテ	神戸市教育委員会	山田　清朝 岡本　一秀 （県支援）	206㎡ 206㎡	10. 7.28～10. 7.31	中世の水田面	区画整理事業 〔国庫補助事業〕
47	長田神社境内遺跡第12次調査	長田区六番町8丁目1－2	神戸市教育委員会	中村　大介	140㎡ 140㎡	10. 8.26～10. 9.18	弥生時代末の竪穴住居2棟、ピット 中世の落ち込み	店舗兼教会再建 〔国庫補助事業〕
48	長田南遺跡第1次調査	長田区五番町8丁目1－12	神戸市教育委員会	池田　毅	600㎡ 2,400㎡	10. 4. 1～10. 5.28	中世の掘立柱建物　弥生時代中期～後期の竪穴住居、土坑　縄文時代後期～弥生時代前期の遺物を含む流路	共同住宅再建 〔国庫補助事業〕
49	御船遺跡第4次調査	長田区大道通1丁目14・15　御船通1丁目1－1他	(財)神戸市スポーツ教育公社	西岡　誠司 藤井　太郎	347㎡ 700㎡	10. 4. 1～10. 5.27	弥生時代後期の水田畦畔、古墳時代後期の掘立柱建物7棟、竪穴状遺構4基溝、土坑など	市営住宅建設

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(4)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
50	御船遺跡第8次調査	長田区大道通2丁目15－4	神戸市教育委員会	石島　三和	80㎡ 240㎡	11.3.17～11.3.30	古墳時代以降、古墳時代、弥生時代後期後半の遺構面	事務所兼個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
51	御蔵遺跡第4次調査（試掘）	長田区御蔵通5丁目	神戸市教育委員会	斎木　巌	45㎡ 45㎡	10.7.6～10.7.10	弥生時代後期の溝	区画整理事業
52	御蔵遺跡第5次調査	長田区御蔵通5丁目73－8他	神戸市教育委員会	富山　直人	140㎡ 140㎡	10.7.28～10.8.9	古墳時代の掘立柱建物	工場兼個人住宅 〔国庫補助事業〕
53-1	御蔵遺跡第6次調査	長田区御蔵通5丁目73－8	神戸市教育委員会	富山　直人	470㎡ 470㎡	10.8.10～10.9.12	柱穴・土坑・溝・落ち込み状遺構	区画整理事業
53-2	御蔵遺跡第8次調査	長田区御蔵通5丁目78－8	神戸市教育委員会	富山　直人	100㎡ 100㎡	10.9.12～10.9.21	古墳時代の溝	区画整理事業
53-3	御蔵遺跡 第8次－2区調査	長田区御蔵通5丁目	神戸市教育委員会	口野　博史	12㎡ 12㎡	10.10.10～10.11.13	奈良時代末～平安時代初頭の溝・落ち込み	区画整理事業
53-4	御蔵遺跡第9次調査	長田区御蔵通6丁目58・59番地	神戸市教育委員会	西岡　誠司	114㎡ 228㎡	10.9.14～10.11.6	平安時代の木棺墓	区画整理事業
53-5	御蔵遺跡第12次調査	長田区御蔵通6丁目	神戸市教育委員会	口野　博史	70㎡ 70㎡	10.10.19～10.11.10	平安時代初頭の建物	区画整理事業
53-6	御蔵遺跡第15次調査	長田区御蔵通6丁目18－1	神戸市教育委員会	石島　三和	5㎡ 10㎡	10.11.25	2面の遺構面	区画整理事業
53-7	御蔵遺跡第17次調査	長田区御蔵通6丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	100㎡ 400㎡	11.2.17～11.3.30	平安時代の木棺墓	区画整理事業
53-8	御蔵遺跡第19次調査	長田区御蔵通6丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	5㎡ 5㎡	11.3.23～11.3.27	攪乱のため、遺構等は確認されず	区画整理事業
54	御蔵遺跡第7次調査	長田区御蔵通5丁目73－8・73～76	神戸市教育委員会	西岡　誠司	61㎡ 61㎡	10.9.2～10.9.11	古墳時代前期頃のピット	工場付個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
55	御蔵遺跡第10次調査	長田区御蔵通5丁目	神戸市教育委員会	山田　清朝 高木　芳史 （県支援）	340㎡ 1,020㎡	10.9.16～10.10.29	弥生時代後期の土坑、ピット	住宅共同再建 〔国庫補助事業〕
56	御蔵遺跡第11次調査	長田区御蔵通5丁目	神戸市教育委員会	山上　雅弘 岡本　一秀 （県支援）	90㎡ 90㎡	10.10.5～10.10.28	古墳時代の竪穴住居 奈良時代の掘立柱建物 中世の柱穴群	工場付個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
57	御蔵遺跡第13次調査	長田区御蔵通5丁目92－3	神戸市教育委員会	山田　清朝 高木　芳史 （県支援）	134㎡ 402㎡	10.11.4～10.11.20	庄内期の土器溜まり 弥生時代後期の水田跡	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
58	御蔵遺跡第14次調査	長田区御蔵通6丁目18－1	神戸市教育委員会	石島　三和	170㎡ 170㎡	10.11.9～10.11.24	古墳時代中期の溝	事務所付倉庫建設 〔国庫補助事業〕
59	御蔵遺跡第16次調査	長田区御蔵通5丁目73	神戸市教育委員会	山本　雅和	95㎡ 165㎡	11.1.25～11.3.20	掘立柱建物・溝・柱穴・土坑・ピット	事務所付倉庫建設 〔国庫補助事業〕

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(5)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
60	御蔵遺跡第18次調査	長田区御蔵通６丁目18－７	神戸市教育委員会	富山　直人	70㎡ 70㎡	11. 3. 3～11. 3.19	中世のピットと井戸	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
61	神楽遺跡第11次調査	長田区神楽町４丁目１－１他	神戸市教育委員会	中川　渉 深江　英憲 （県支援）	930㎡ 930㎡	10. 5.19～10.12.24	弥生時代後期～古墳時代初頭の井戸、貯蔵穴、土坑、柱穴 弥生時代前期の土坑、柱穴	住宅共同再建 〔国庫補助事業〕
62	神楽遺跡第12次調査	長田区神楽町４丁目７	(財)神戸市スポーツ教育公社	西岡　誠司 浅谷　誠吾	350㎡ 350㎡	10. 7. 7～10. 8.12	弥生時代前期の土坑１基、弥生時代後期頃の溝状遺構・ピット	区画整理事業
63	松野遺跡 第６次－２，７次調査	長田区日吉町２丁目　若松町７丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	口野　博史 山本　雅和 中居さやか	3,116㎡ 3,466㎡	10. 7.28～11. 3.31	中世の掘立柱建物２棟、井戸１基 古墳時代後期の掘立柱建物５棟、竪穴住居４棟、井戸５基	新長田駅南再開発
64	二葉町遺跡 第７次－２・３・４調査	長田区二葉町６丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	川上　厚志 中居さやか	6,200㎡ 6,200㎡	10. 4. 3～11. 3.31	平安時代末～鎌倉時代初めの掘立柱建物、井戸など集落跡	新長田駅南再開発
65	若松町遺跡第１次調査	長田区若松町11丁目	神戸市教育委員会	山田　清朝 高木　芳史 （県支援）	1,380㎡ 5,520㎡	10. 5.11～10. 7.10	平安時代の畠跡 弥生時代後期の掘立柱建物	住宅共同再建 〔国庫補助事業〕
66	若松町遺跡第２次調査	長田区若松町11丁目	神戸市教育委員会	口野　博史	987㎡ 2,387㎡	10. 5.26～10.10. 5	中世の木棺墓２基、掘立柱建物４棟、井戸１基　古墳時代前期の竪穴住居 弥生時代後期の溝	住宅共同再建 〔国庫補助事業〕
67	戎町遺跡第27次調査	須磨区戎町２丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	140㎡ 140㎡	10.12. 7～10.12.16	中世の土坑と溝、古墳時代の竪穴住居	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
68	千歳遺跡第３次調査	須磨区千歳町４丁目１－４他	神戸市教育委員会	関野　豊	535㎡ 1,605㎡	10. 4.10～10. 6. 8	弥生時代中期の掘立柱建物、自然流路	住宅共同再建 〔国庫補助事業〕
69	千歳遺跡第４次調査	須磨区千歳町３丁目２－５	神戸市教育委員会	阿部　功	105㎡ 210㎡	11. 2. 8～11. 2.17	二面の遺構面から溝、水田畦畔	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
70	大田町遺跡第11次調査	須磨区大田町６丁目71－１	神戸市教育委員会	山本　雅和	181㎡ 645㎡	11. 1.18～11. 2.11	奈良～平安時代中期のピット、落ち込み　平安時代後期～鎌倉時代前期のピット、溝	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
71	大田町遺跡第12次調査	須磨区大池町５丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	藤井　太郎	800㎡ 3,200㎡	10. 7.21～10.10.30	弥生時代～中世の水田址	区画整理事業
72	須磨天神町遺跡 第２次調査	須磨区天神町３～５丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	松林　宏典	1,600㎡ 1,600㎡	10. 8.24～11. 3. 1	弥生時代～中世にかけての遺物の流れ込み	道路建設
73	白水瓢塚古墳第５次調査	西区伊川谷町潤和字シンド山	神戸市教育委員会	須藤　宏	2,800㎡ 2,800㎡	10. 7.10～10.10. 5	埴輪棺、古墳、地滑り跡	宅地造成 〔国庫補助事業〕
74	白水遺跡第７次調査	西区伊川谷町潤和字垣ノ内	(財)神戸市体育協会	川上　厚志 中居さやか	720㎡ 1,400㎡	10.11. 2～10.12. 4	中世の水田、古墳時代の竪穴住居１棟 掘立柱建物１棟	区画整理事業
75	水谷遺跡第７次調査	西区玉津町水谷字大東526－１	(財)神戸市体育協会	西岡　巧次 中谷　正	92㎡ 92㎡	10.10. 6～10.11.12	５世紀後半の方形墳	区画整理事業
76	日輪寺遺跡第５次調査	西区玉津町二ツ屋字西山695－１ 696－１	神戸市教育委員会	小川　良太 渡辺　昇 （県支援）	171㎡ 171㎡	10.10.21～10.11.13	古墳時代初頭の竪穴住居、落ち込み、土坑	宅地造成 〔国庫補助事業〕

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(6)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
77	日輪寺遺跡第6次調査	西区玉津町二ツ屋字西山526－1	神戸市教育委員会	山田　清朝 高木　芳史 （県支援）	2,550㎡ 2,550㎡	10.12.14～11.3.31	弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居	宅地造成 〔国庫補助事業〕
78	今津遺跡第10次調査	西区玉津町今津字宝来	神戸市教育委員会	山本　雅和	240㎡ 240㎡	10.4.9～10.4.22	弥生時代中期以降の溝	宅地造成 〔国庫補助事業〕
79	今津遺跡第11次調査	西区玉津町今津字宝来	神戸市教育委員会	富山　直人	360㎡ 360㎡	10.6.24～10.7.10	弥生時代の竪穴住居と流路 中世の掘立柱建物	宅地造成 〔国庫補助事業〕
80	今津遺跡第12次調査	西区玉津町今津字宝来531	神戸市教育委員会	山本　雅和	390㎡ 550㎡	11.1.28～11.2.26	中世の掘立柱建物、土坑 弥生時代中期の土坑、ピット	宅地造成 〔国庫補助事業〕
81	新方遺跡東方地区第7次調査	西区玉津町新方字東方206	神戸市教育委員会	富山　直人	40㎡ 40㎡	10.6.1～10.6.17	流路	共同住宅建設 〔国庫補助事業〕
82	新方遺跡七反田地区	西区玉津町西河原字七反田45－5他	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	30㎡ 30㎡	10.7.2～10.12.10	古代の溝、古代～中世の遺物包含層	個人住宅建設 〔国庫補助事業〕
83 -1	新方遺跡野手西方地区第3次調査	西区玉津町新方字野手他	神戸市教育委員会	中川　渉 深江　英憲 （県支援）	60㎡ 120㎡	11.2.25～11.3.8	中世以降の護岸石組み 中世のピット・土坑	区画整理事業 〔国庫補助事業〕
83 -2	新方遺跡野手西方地区第4次調査	西区玉津町新方字野手他	神戸市教育委員会	山本　雅和 浅谷　誠吾	200㎡ ㎡	11.3.26～11.3.31	中世以降の護岸石組み 中世のピット・土坑	区画整理事業 〔国庫補助事業〕
84	出合遺跡第39次調査	西区中野1丁目10－3	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	164㎡ 404㎡	10.5.12～10.6.12	弥生時代後期の竪穴住居、土坑　古墳時代後期の土坑、溝、流路　中世の溝	宅地造成 〔国庫補助事業〕
85	出合遺跡第40次調査	西区玉津町出合字寺池50・69－1・70	神戸市教育委員会	谷　正俊 中谷　正	333㎡ 333㎡	10.7.2～10.12.10	鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、ピット	宅地造成 〔国庫補助事業〕
86	出合遺跡第41次調査	西区玉津町中野1丁目10－5	神戸市教育委員会	松林　宏典	40㎡ 120㎡	10.12.9～10.12.24	弥生時代後期の溝	個人住宅 〔国庫補助事業〕
87	兵庫津遺跡第16次調査	中央区西出町2丁目・兵庫町1丁目	兵庫県教育委員会	水口　富史 深江　英憲	52㎡ ㎡	10.6.4～10.6.17	江戸時代中期以降の「船入江」に伴う石垣	共同溝整備事業

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）(1)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	下二郎遺跡第5次調査	北区有野町二郎字西浦	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	42㎡ 42㎡	10.11.12～10.11.16	中世の土坑、ピット	商業施設建設
2	岡場遺跡第2次調査	北区有野町有野字西岡場	神戸市教育委員会	松林　宏典	340㎡ 340㎡	10.11.26～10.12.8	中世の柵列、ピット	商業施設建設
3-1	宅原遺跡群	北区長尾町上津字下上津	(財)神戸市体育協会	阿部　功	27㎡ 27㎡	10.11.11～10.11.12	中世の圃場面	汚水管敷設
4	上小名田遺跡第19次調査	北区八多町上小名田	(財)神戸市スポーツ教育公社	阿部　敬生	340㎡ 340㎡	10.4.1～10.4.27	中世のピット	汚水管敷設
5	附物遺跡第4次－1調査	北区八多町附物字番匠屋	(財)神戸市スポーツ教育公社	谷　正俊 阿部　功	310㎡ 310㎡	10.4.20～10.5.21	近世の炭焼き窯と関連施設	圃場整備事業
6	附物遺跡第4次－2調査	北区八多町附物字番匠屋	神戸市教育委員会	谷　正俊 阿部　功	20㎡ 20㎡	10.5.20～10.5.21	同　上	圃場整備事業
7	萩原城遺跡第7次調査	北区淡河町萩原	(財)神戸市体育協会	中谷　正	220㎡ 220㎡	10.10.26～10.11.21	中世の溝、ピット	農業集落排水敷設
8	勝雄遺跡第4次調査	北区淡河町勝雄字天神ノ口他	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	西岡巧・池田・阿部 阿部・中谷	3,940㎡ 3,940㎡	10.4.13～11.3.31	中世の掘立柱建物5棟、溝 奈良時代の掘立柱建物6棟	圃場整備事業
9	勝雄遺跡第5次調査	北区淡河町勝雄字上ノ原	神戸市教育委員会	西岡　巧次 中谷　正	437㎡ 437㎡	11.1.18～11.3.19	溝8条、土坑、ピット	圃場整備事業
10-1	木ノ元遺跡第1次調査	北区淡河町南僧尾	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	池田　毅 阿部　敬生	1,500㎡ 1,500㎡	10.5.27～10.7.6	溝・ピット等	圃場整備事業
10-2	経塚山遺跡第1次調査	北区淡河町南僧尾	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	池田　毅 阿部　敬生	1,200㎡ 1,200㎡	10.7.29～10.9.30	屋敷地に伴う落ち込み	圃場整備事業
10-3	木ノ元遺跡第2次調査	北区淡河町南僧尾	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	須藤　宏 阿部　敬生 阿部　功	600㎡ 600㎡	10.10.1～10.11.24	杭列等	圃場整備事業
10-4	西北遺跡第1次調査	北区淡河町南僧尾	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	須藤　宏 阿部　敬生	4,000㎡ 4,000㎡	10.11.18～11.3.31 H11継続	中世の掘立柱建物・棚列・水溜め	圃場整備事業
10-5	平井沢遺跡第1次調査	北区淡河町南僧尾	(財)神戸市スポーツ教育公社 (財)神戸市体育協会	阿部　敬生	400㎡ 400㎡	10.11.18～11.3.31 H11継続	近世以降のピット	圃場整備事業
11	平井沢遺跡第2次調査	北区淡河町南僧尾字平井沢	神戸市教育委員会	関野　豊	300㎡ 300㎡	11.2.9～11.3.18	溝2条、土坑、池、落ち込み各1基	圃場整備事業
12	寒鳳遺跡第3次調査	西区伊川谷町潤和字イガミ畑	(財)神戸市体育協会	西岡　誠司	441㎡ 441㎡	11.2.16～11.3.31	古墳時代後期の竪穴住居、掘立柱建物	道路建設
13	寒鳳遺跡第4次調査	西区伊川谷町潤和	(財)神戸市体育協会	中居さやか	200㎡ 200㎡	11.3.3～11.3.31	古墳時代の大壁造り建物、竪穴住居	下水道敷設

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）(2)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
14	青谷地区（試掘）	西区玉津町水谷字ヨシカ谷	神戸市教育委員会	中谷　正	243㎡ 243㎡	11. 3. 23～11. 3. 29	弥生時代後期の遺物を確認	福祉施設建設〔国庫補助事業〕
15	栃木遺跡第14次調査	西区櫨谷町菅野字東下・土井	㈶神戸市スポーツ教育公社 ㈶神戸市体育協会	松林　宏典 阿部　功	362㎡ 402㎡	10. 7. 2～11. 1. 6	弥生時代中期の土坑、溝	道路改良
16	栃木遺跡第15次調査	西区櫨谷町谷口字地蔵下	㈶神戸市体育協会	藤井　太郎 阿部　功	160㎡ 500㎡	10. 11. 9～10. 12. 21	弥生時代～古墳時代の流路	道路建設
3-2	菅野・栃木・西神第62地点遺跡	西区櫨谷町菅野・栃木・松本	㈶神戸市スポーツ教育公社	西岡　誠司	88㎡ 88㎡	10. 5. 26～10. 6. 12	既設の埋設管による撹乱により遺構、遺物は確認されなかった	汚水管敷設
17	福谷地区（試掘）	西区櫨谷町福谷字奥鎌ヶ谷	神戸市教育委員会	西岡　誠司	150㎡ 150㎡	10. 6. 15～10. 6. 26	発見遺構なし	道路建設
18	小東野地区（試掘）	西区神出町小東野	神戸市教育委員会	西岡　誠司	16㎡ 16㎡	10. 7. 2～10. 7. 2	遺構、遺物は確認されなかった	圃場整備事業
19	神出古窯址群（神出東）	西区神出町東字歳ノ神	神戸市教育委員会	佐伯　二郎	67㎡ 67㎡	10. 10. 28～10. 11. 6	遺物包含層のみ	個人住宅建設〔国庫補助事業〕
20	出合遺跡第42次調査	西区玉津町出合字高田	㈶神戸市体育協会	西岡　誠司	22㎡ 22㎡	11. 1. 25～11. 1. 27	発見遺構なし	道路改良
21	西戸田遺跡第５次調査	西区平野町繁田	㈶神戸市体育協会	阿部　功	116㎡ 116㎡	11. 1. 12～11. 1. 25	遺物が若干出土したが遺構面は確認されなかった	自歩道設置
22	繁田遺跡	西区平野町繁田	㈶神戸市体育協会	阿部　功	116㎡ 116㎡	11. 1. 12～11. 1. 25	中世の遺構面を確認	自歩道設置
23	芝崎遺跡（試掘）	西区平野町芝崎	神戸市教育委員会	山下　史朗（県支援）	52㎡ 52㎡	10. 11. 5～10. 11. 11	中世の落ち込み、時期不明のピットなどを確認	道路建設
3-3	玉津田中遺跡第14次調査	西区平野町中津字小松ケ坪他	㈶神戸市スポーツ教育公社	西岡　誠司	218㎡ 218㎡	10. 8. 17～10. 8. 21	弥生時代後期後半～古墳時代前半の遺物が出土 遺構は確認されなかった	汚水管敷設
24	玉津田中遺跡第15次調査	西区平野町芝崎 福中 中津	㈶神戸市体育協会	池田　毅 橋詰　清孝 中居さやか	1,600㎡ 4,000㎡	10. 10. 7～11. 3. 31	弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居、土坑	道路改良
25	大開遺跡	兵庫区水木通３－１－４	大開遺跡調査団（㈱埋文）	村尾　政人 他	552㎡ ㎡	10. 9. 7～10. 10. 3	平安時代後期～鎌倉時代にかけての２次期の遺構面	店舗建設
26	東畑遺跡	整理	阪神文化財調査会	岩崎　直也	㎡ ㎡			
27	萩原遺跡	整理	㈱埋文	村尾　政人	㎡ ㎡			
28	住吉宮町遺跡	東灘区住吉宮町６丁目88	兵庫県教育委員会	鐵　英記 服部　寛	1,307㎡ ㎡	10. 8. 4～10. 11. 18	古墳時代の集落	県営住宅建替

平成10年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）(3)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
29	楠・荒田町遺跡	中央区楠町７丁目	兵庫県教育委員会		㎡ ㎡	10. 8.10～10. 8.12	平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構・遺物	病棟建設
30	楠・荒田町遺跡	中央区楠町７丁目	兵庫県教育委員会	別府　洋二 三枝　　修	3,047㎡ ㎡	10.11.20～11. 3.25	平安時代の集落	病棟建設
31	楠・荒田町遺跡	中央区楠町７丁目	兵庫県教育委員会		㎡ ㎡	11. 3.29		病棟建設
32	二郎宮前遺跡	北区有野町二郎	兵庫県教育委員会	山本　　誠 池田　征弘	548㎡ ㎡	10.11. 2～10.11.26	古墳および奈良時代・中世の遺構	車庫建設
33	勝雄遺跡	北区淡河町勝雄	兵庫県教育委員会	岡田　章一 松岡　千寿	2,880㎡ ㎡	10.11.30～11. 3. 5	江戸時代の集落	河川改修
34	御船遺跡	長田区大道通２丁目	兵庫県教育委員会	平田　博幸 藤田　　淳	150㎡ ㎡	10.11. 9～10.11.11	６世紀代の集落	道路建設
35	御船遺跡	長田区大道通２丁目	兵庫県教育委員会	平田　博幸 藤田　　淳	97㎡ ㎡	11. 3. 8～11. 3.26	６世紀代の集落	道路建設
36	西神Ｎ．Ｔ．No.62遺跡	西区櫨谷町菅野字野手	兵庫県教育委員会	岸本　一宏 松野　健児 小田　　賢	2,007㎡ ㎡	11. 1. 5～11. 3.25	弥生時代～中世の集落	道路建設
37	神出遺跡	西区神出町北	兵庫県教育委員会	岡田　章一 松岡　千寿	2,876㎡ ㎡	10. 8.25～10.12. 2	鎌倉時代の集落	道路建設

平成10年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図

（各遺跡の番号は掲載遺跡と一致）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
芦屋市
東灘区
灘区
六甲山町
荒地山
六甲トンネル
鷹尾山
朝日ケ丘
山手町
長峰山
鶴甲
住吉台
住吉山手
本山北町
本山中町
本山南町
北青木
青木
深江南町
深江浜町
阪神高速道路湾岸線
阪神電鉄
阪急神戸線
御影浜町
住吉浜町
灘浜東町
摩耶埠頭
向洋町西
向洋町東
向洋町中
六甲アイランド
ACT
K.CAT
N

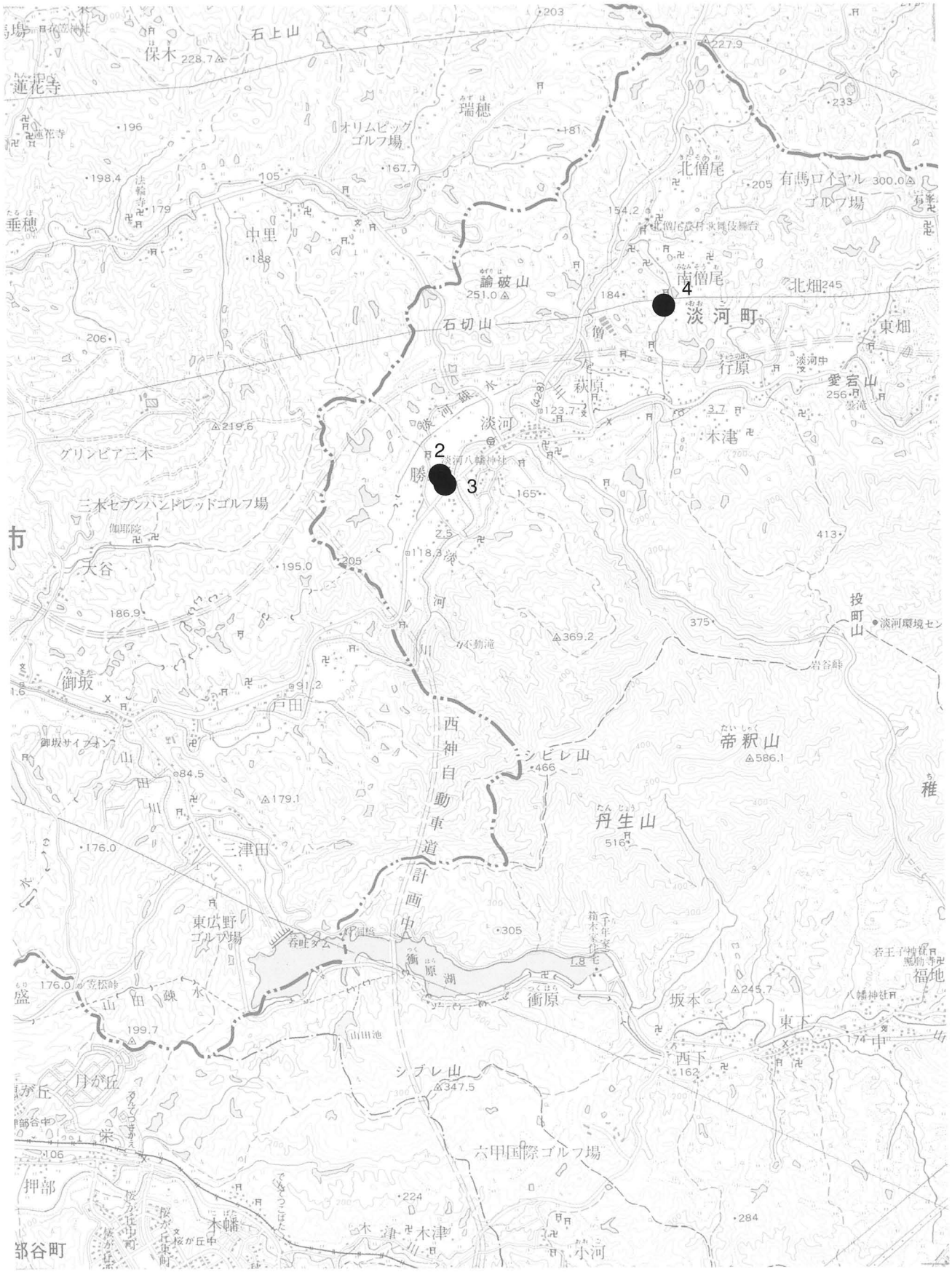
調査地点位置図 1

25
26
27
28
29
30
31
33
34
35
36
37
38
39・40
41
42
43・44
45
46
47
48
49
50
中央区
兵庫区
長田区
須磨区
神戸

調査地点位置図 2

長尾町
宅原
神戸リサーチパーク
北神戸第2団地
鹿の子台
国下部
道場町
北神戸第1団地
北神戸ゴルフ場
下小名田
上小名田
神付
八多町
北神星和台
吉尾
神有ゴルフ場
藤原台北町
藤原台中町
藤原台南町
柳谷
有野
有野台
東有野台
有野町
高丸山
キスラシ山
梶岡山
ナダレ尾山
唐櫃台
唐櫃
大池見山
西大池
東大池
古寺山
蓬ケ山
高尾山
鬼ケ島灰形山
湯槽谷山
落葉山
射場山
有馬町
六甲山
西お多福山
六甲カンツリー
山口町
中野
金仙寺
金仙寺湖
畑山
西宮グリーンカンツリー
西宮北六甲台
名来
生野
塩田
平田
第2名神自動車道(予定線)
附物
1
32

調査地点位置図 3


石上山
保木
228.7
蓮花寺
瑞穂
オリムピック
ゴルフ場
北僧尾
有馬ロイヤル
ゴルフ場
300.0
垂穂
中里
論破山
251.0
南僧尾
北畑
245
4
淡河町
石切山
東畑
行原
愛宕山
256
萩原
淡河
木津
2
勝
3
グリンピア三木
三木セブンハンドレッドゴルフ場
大谷
195.0
186.9
御坂
戸田
369.2
西神自動車道
計画中
シビレ山
466
帝釈山
586.1
丹生山
516
三津田
東広野
ゴルフ場
春吐ダム
衝原湖
衝原
坂本
245.7
東下
西下
162
シブレ山
347.5
六甲国際ゴルフ場
木津
小河
押部
木幡
224
284
305
176.0
199.7
179.1
84.5
91.2
413
375
投町山
淡河環境セン
岩谷峠
稚
福地
若王子神社
八幡神社
174
月が丘
栄
106
桜が丘中町
桜が丘中
郡谷町

調査地点位置図 4

西区
西神地区工業団地
西神インダストリアルパーク
高塚台
高塚山
神戸明石
和田
堅田
黒田
繁田
美賀多台
西神住宅団地
糀台
福谷
西神中
竹の台
春日台
平野町
宮前
印路
下村
福中
向井
芝崎
大野
慶明
松本
栃木
長谷
谷口
如意寺
菅野
西神南ニュータウン
井吹
大久保町
松陰新田
中津
田中
居住
小山
屋
水谷
玉津町
丸塚
神明道路
上脇
森田
松陰
玉津IC
玉津中
潤和
別府
高津橋
持子
曙町
石市
鳥羽
森友
西河原
新幹線
有瀬
大蔵谷IC
神戸学院大
桜台
上池
和坂
荷山町
朝霧丘
松が丘
神陵台
明石公園
太寺
南多聞台
大蔵谷
狩口台
西舞子
舞子坂
舞子台
明石港
明石川
山陽電鉄
松江
5
6
7
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62・64
63

調査地点位置図 5

Ⅱ．平成10年度の復興事業に伴う発掘調査

１．本庄町（ほんじょうちょう）遺跡　第７次調査

１．はじめに　本庄町遺跡は、六甲山麓から流れ出る芦屋川と高橋川に挟まれた平野の三角洲帯および自然堤防帯に立地する。今回の調査は、共同住宅建設に伴う復興調査で工事により影響の及ぶ範囲について調査を実施した。

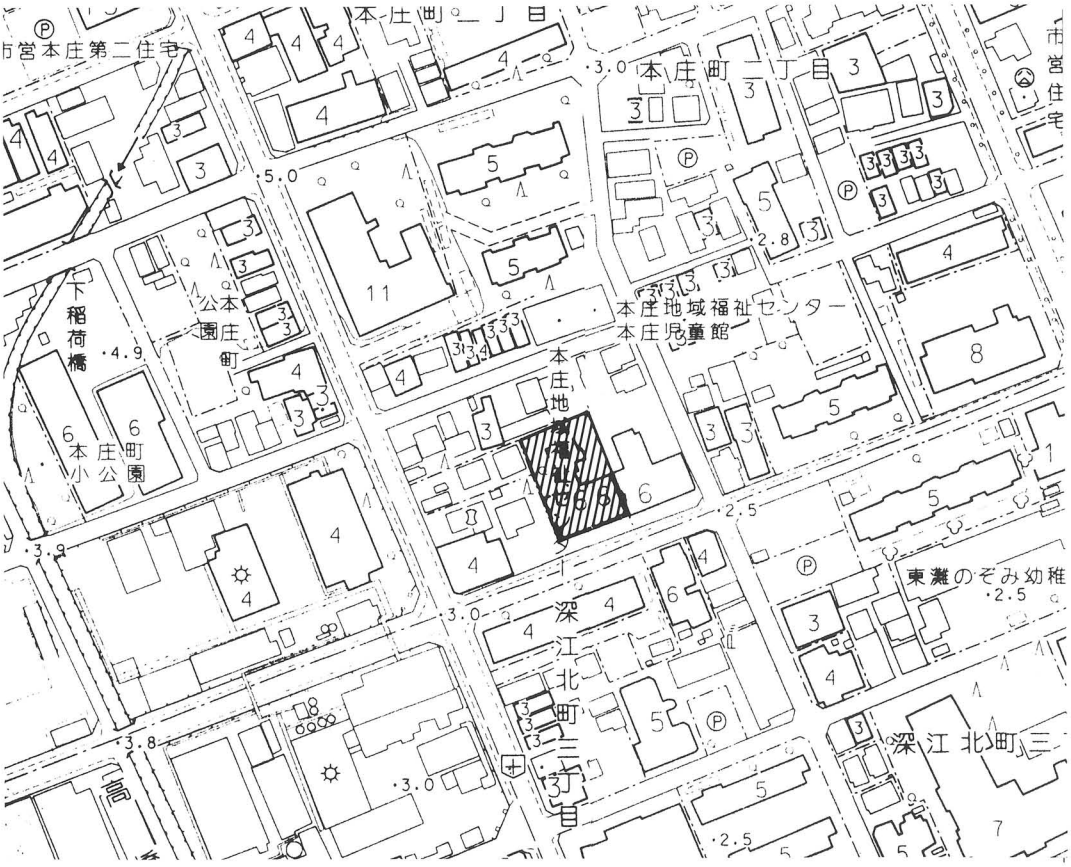


fig. 10
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要　調査において６面の遺構面を検出した。

第１遺構面　調査区の北半部分において浅い鋤溝が数条検出された。上面は砂で覆われており、検出面は土壌化していることから、水田であったと考えられる。

遺物は、羽釜や陶磁器類が出土しており、１３世紀から１４世紀にかけての時期が考えられる。

第２遺構面　さらに薄い粗砂層を外すと、土壌化した第２遺構面が検出された。

一面に動物の足跡が観察され、水田もしくは湿地帯と考えられる。

遺物としては、黄瀬戸や羽釜や陶磁器類が出土しており１３世紀から１４世紀にかけての時期が考えられる。

第３遺構面　第２遺構面と同様に動物の足跡等が検出された。出土遺物から１２世紀から１３世紀にかけての時期が考えられる。

第４遺構面　調査区の全面に動物の足跡があり南半部分において東西方向の畦畔が２条検出された。

出土遺物から６世紀後半の水田と考えられる。

第５遺構面　調査区の北半部においては砂層となるが、南半部においては薄い細砂に覆われたシルト層がある。このシルト層の上面において溝１条が検出された。

ＳＤ01は、幅1.0ｍ、深さ10㎝を測り、弥生時代後期の土器が出土している。

第６遺構面　北半部に広がる砂層上面において浅い落ち込み状の遺構が数基検出された。

出土遺物としては、サヌカイトや石鏃、縄紋土器、翡翠製玉などがある。

縄紋時代後期から晩期にかけての時期が考えられる。

３．ま　と　め　確認できた遺構面の大半が水田面もしくは湿地帯であったようである。調査時の状況からみてT.P.１～1.5ｍ前後の標高で水没しやすい環境にあったものと考えられる。

調査区内においては中央部付近が最も高く、北と南方向に下がる地形となっており中央部が砂堆の頂部である可能性がある。

今回の調査においては、縄紋時代の遺構面が確認されたことは特記すべきである。特に遺物の出土状況が何箇所かに集中する傾向がみられ、人為的傾向が現れていると考えられる。このことから、調査区内において集落は確認できなかったものの、周辺にその存在を推定することができよう。

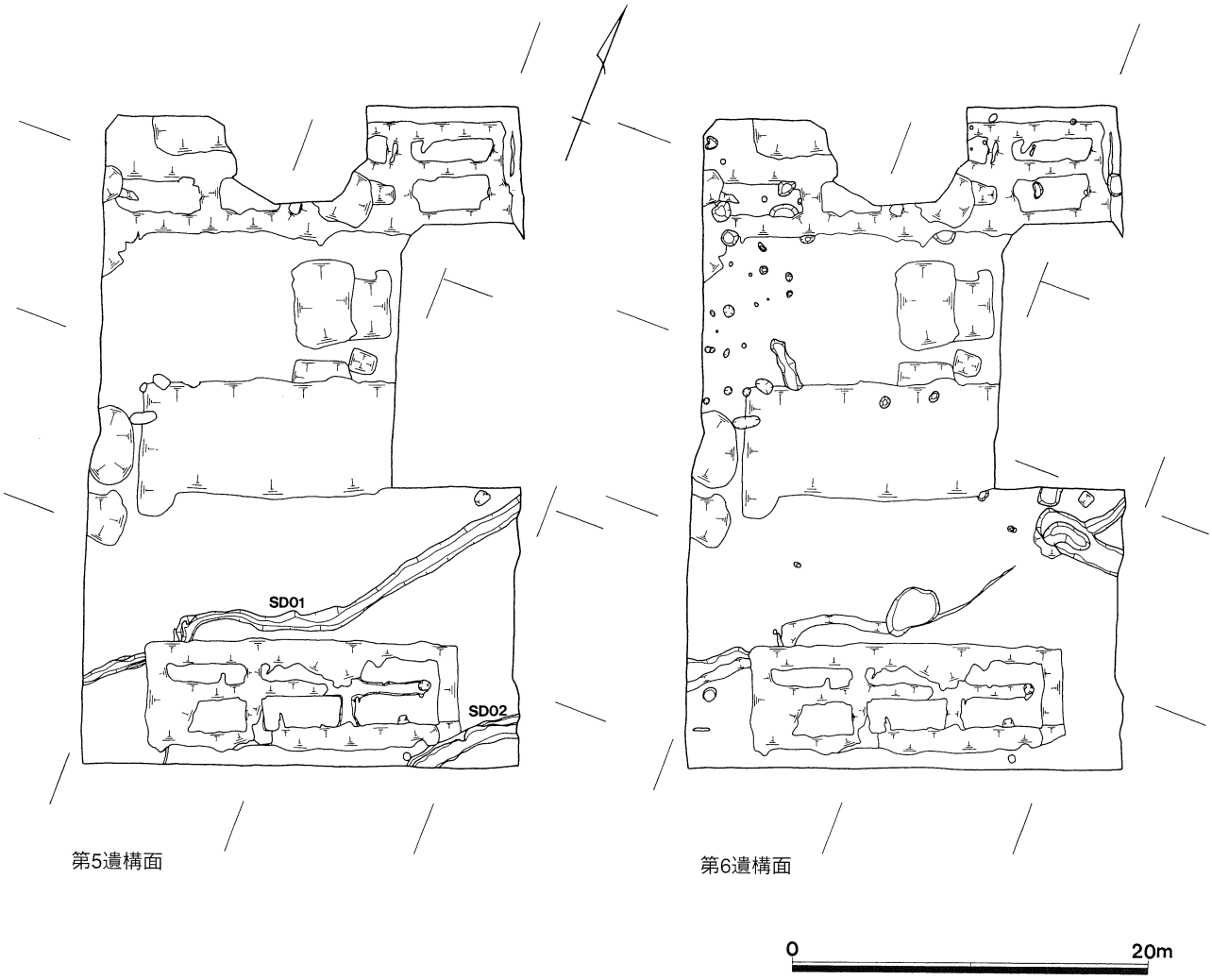


fig. 11　第５・６遺構面平面図

2．本庄町（ほんじょうちょう）遺跡　第８次調査

1．はじめに　本庄町遺跡は、六甲山系南麓の沖積地上に立地し、遺跡東辺を芦屋市境と接する場所に位置する。今回の調査地は、北側に国道２号線が通り、車両の往来が著しい場所である。

この周辺は、市街地形成の時期が早く、遺跡の分布が明確でなかったが、昭和50年代後半以降の発掘調査により、本山遺跡や森北町遺跡等の弥生時代の拠点集落が確認され、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。

fig. 12
調査地位置図
１：2,500

2．調査の概要　表土・盛土層の下に中世～近世にかけての耕作土が複数の層をなして認められる。現地表下約80cm前後に褐色～黒褐色細砂が堆積する。北半部では40cm堆積し、上位では褐色、下位では黒褐色を呈する。上位と下位の境目付近に縄文土器を多く含む。南半部では、10～20cmの層厚があり、褐色～茶褐色を呈し、縄文土器と弥生土器を包含する。この層を除去すると、茶褐色～黄灰褐色細砂層があり、断ち割り調査では１ｍ以上堆積していることが判明している。同層は南東から北西に緩やかに傾斜し、標高は2.4～2.9ｍである。

検出遺構　南半部では、４基の土坑（穴）、２基のピット（小穴）が検出された。

ＳＫ01　直径1.1ｍ、深さ40cm、円形の平面プランで、断面はすり鉢状を呈する土坑である。埋土内からは、サヌカイト製の石鏃、石器を作る際にできた剥片、縄文土器片、魚骨が出土した。サヌカイトの剥片は、２～３㎜程度のものが含まれており、ごく近辺で石器を製作した際の石屑をこの穴に捨てたものと判断される。

ＳＫ02　長軸2.5ｍ、短軸1.7ｍ、深さ60cm、不整な楕円形の平面プランで、断面はすり鉢状を呈する。埋土からは、縄文土器、サヌカイトの剥片が出土した。ＳＫ01と同様の廃棄物を捨てる土坑と推定される。

ＳＫ03　長軸2.1ｍ、短軸1.4ｍ、深さ15cm、ほぼ楕円形の平面プランで、断面は浅い皿状を呈する。埋土内からは弥生土器が若干出土した。なお、この土坑の上面では、弥生土器がまとまって出土し、それらを外して、平面の形状を確認したところ遺構が確認された。このことから、土坑が掘られて若干埋まった段階で、土器が投棄されたものと判断される。

ＳＫ04　　６区で発見された。長軸方向1.5ｍ以上、短軸方向1.3ｍ、深さ20㎝、楕円形の平面プランを呈すると考えられるが、北東端を断ち割り作業の際に削っているため明確でない。

ＳＰ01　　６区で発見された。直径約30㎝、深さ約５㎝程度の円形のピットであると思われるが、平面プランは明確に検出できなかった。石と縄文土器片が詰め込まれた状態で出土した。

縄文土器群　１区北半部では、褐色～黒褐色細砂が40㎝堆積し、そのほぼ中位のあたりから縄文土器がまとまって出土した。（28ℓ入りコンテナ約４箱）これらの土器は詳細な検討をしていないが、概ね縄文時代後期前半（北白川上層式）のものと判断される。また、周辺から、サヌカイト剥片や石鏃、炭化材等が出土した。

３．ま　と　め

今回の調査では、縄文時代・弥生時代の土坑やピット、土器が集中して発見される個所等が発見された。遺構は、南半部に集中しており、調査区ほぼ中央の傾斜変換点より北では確認できなかった。遺構を検出した茶褐色～黄灰褐色細砂層は南東から北西に緩やかに傾斜しながら下がる。土質の状況や微地形の観察から、遺構は、砂堆の高い部分に掘り込まれ、中央の傾斜変換点より北に除々に下がって後背湿地に変化してゆく地形であると判断される。

平成４～５年にかけて、高山歴史学研究所が西隣りを調査しているが、今回と同様に、砂堆から後背湿地へ次第に変化してゆく地形が確認されている。

このように、縄文時代～弥生時代の初頭にかけて、砂堆の高い部分は、生活の場として利用され、中央の傾斜変換点より北側は除々に下がって後背湿地に変化し、その中に不要となった土器やその他の不要物を投棄したものと考えられる。

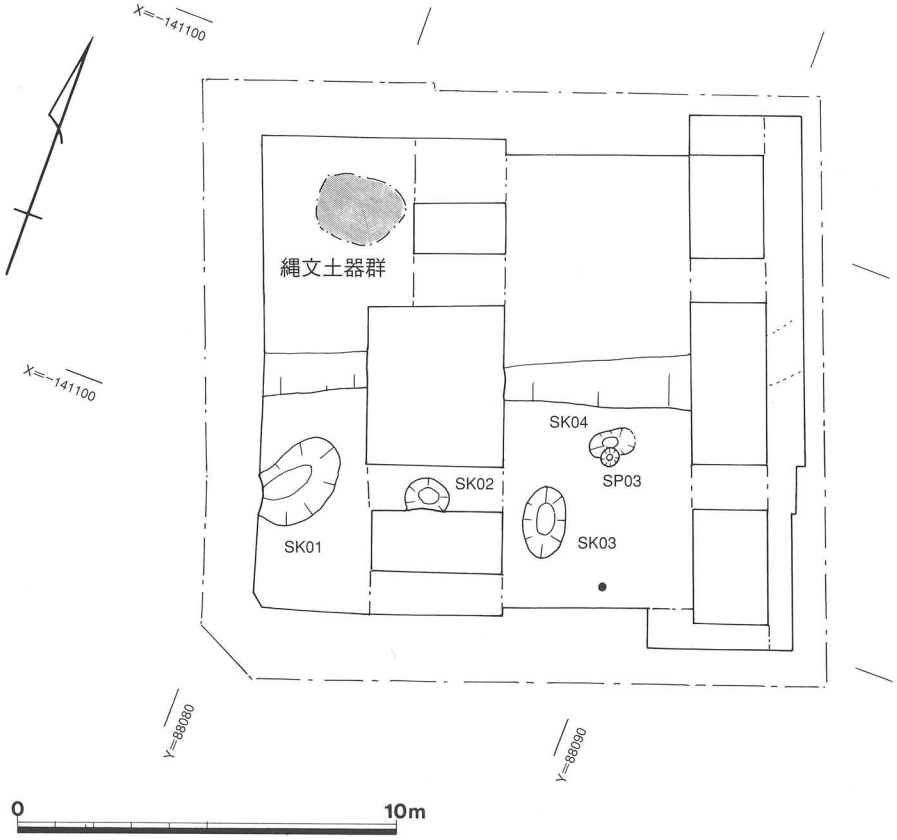


fig. 13
調査区平面図

3．岡本北遺跡（おかもときた）　第３次調査

1．はじめに　岡本北遺跡は、住吉川の沖積作用によって形成された扇状地上に位置する、弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。過去の調査によってこれまでに鎌倉時代の住居址や弥生時代末～古墳時代初頭の住居址や溝などが確認されている。

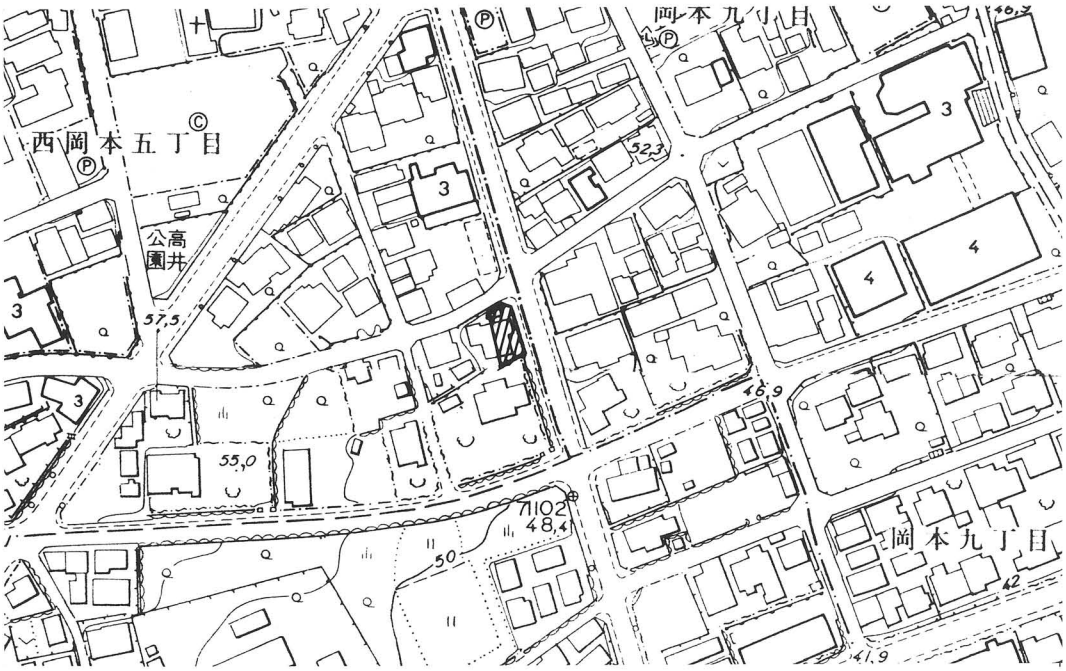


fig. 14
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　調査は工事掘削深度が埋蔵文化財に影響に達する部分について実施し、便宜上南側をⅠ区、北側をⅡ区とした。

Ⅰ　区　第１遺構面で検出した遺構は、鋤溝と思われる浅い溝が２条、ピットが７基である。調査区の東端と南西角は深く撹乱されており遺構面は失われていた。

第１遺構面　この遺構面は、ＳＤ02やＳＰ02・04などの出土遺物からみて、中世の遺構面と考えられる。出土土器はいずれも細片のため詳細な時期は限定できない。第１遺構面の直上まで近・現代の耕土が堆積しているがこれが中世の遺構面の上面を削平していると考えられる。

第２遺構面　第２遺構面で検出した遺構は、土坑２基と落ち込み状遺構１カ所である。

ＳＸ201の出土遺物から古墳時代初頭の遺構面である可能性が高い。

第３遺構面　北端の工事により影響のある部分のみトレンチ調査を実施した。検出した遺構は、溝１条とピット１基であるが、いずれも大半が調査区外で一部を確認したにすぎない。住居址の一部である可能性もある。弥生時代第Ⅴ様式の土器の破片が出土している。

Ⅱ　区　Ⅰ区で確認した第１・２遺構面は削平されて、弥生時代後期の第３遺構面とその包含層

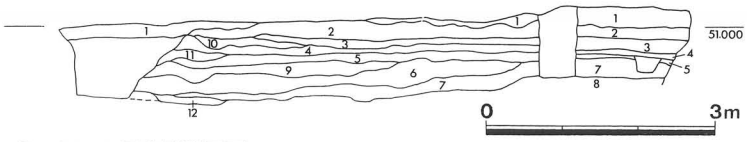


fig. 15　Ⅰ区南壁断面図

1．表土　2．青灰色粘土（近代耕土）
3．淡灰色粘土（近代～近世耕土）　4．淡黄灰色粘土
5．明黄橙茶色粘土（中世遺構面・古墳時代、弥生時代包含層）
6．黒灰色粘土（古墳時代？遺構埋土）
7．黒茶褐色土（弥生時代後期包含層）
8．暗褐色混礫土（地山）
9．黒灰色土（弥生時代？包含層）
10．灰黄色粘土　11．黄灰色粘土
12．黒褐色粘土（弥生時代埋土）

を確認した。土坑２基とピット１基、段差１カ所を検出した。土坑内からは、完形に近い土器も出土していることから、おそらく住居址の一部にあたっているものと考えられる。

ＳＫ01　調査区の北端で確認した。大半が調査区外のため正確な形状、規模等は不明である。検出した範囲での径は60㎝、深さは45㎝と深い。多量の弥生時代第Ｖ様式の土器、特に甕が３個体分以上粉砕した状態で出土したが、完形品を投棄した可能性が高い。

ＳＫ02　ＳＫ01の南側で確認した。ＳＫ02はＳＫ01より15㎝程下がった段差の中で確認されており、この段差は住居址の可能性もあるが調査範囲が狭く、正確には判定できない。このＳＫ02を含む段差内からは、高杯など弥生時代第Ｖ様式の土器が多く出土している。

３．ま と め

今回の調査では、調査範囲が狭く遺構の全容を知ることができなかった。本調査区の西すぐに平成７年度に行われた第２次調査地があるが、ここでは本調査区とほぼ同様の土層堆積状況を呈し、鎌倉時代および古墳時代初頭～弥生時代Ｖ期の集落を２面の遺構面で確認している。今回の調査で確認された遺構は、この第２次調査で検出した集落の続きと考えられる。特に弥生時代後期の遺構面については、Ｉ区では遺構の残存状況が不明瞭であったが、Ⅱ区では良好な状態の土器が多く出土し、土層の残存状況も良好であった。

岡本北遺跡についてはまだその様態がよく知られていないが、今回の調査区、第２次調査地区など、この付近の地点を中心に古墳時代初頭～弥生時代Ｖ期の集落が広がっていたと考えられる。今回の調査地は遺跡の中心に程近いと考えられる。

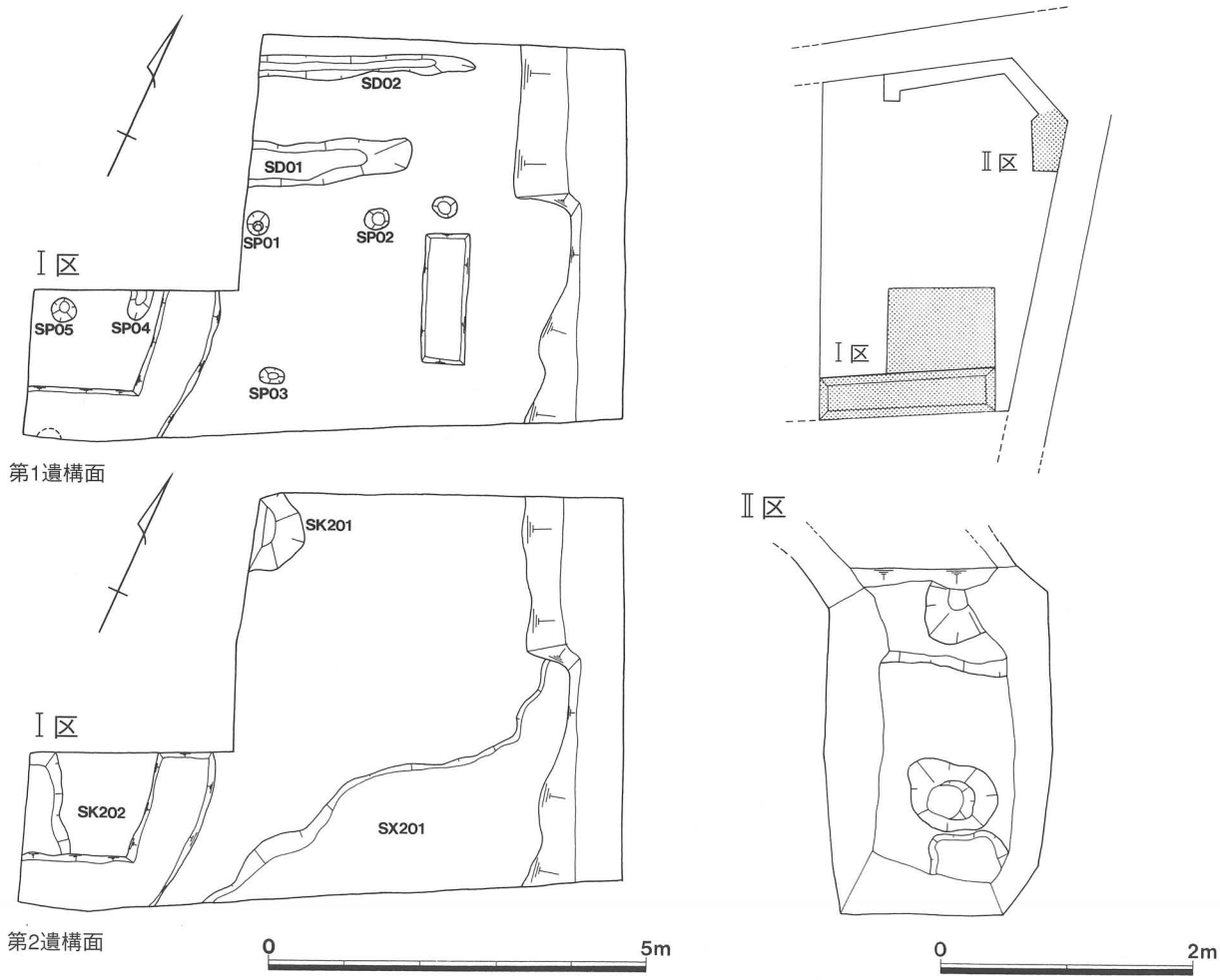


fig. 16　調査区平面図

4．本山（もとやま）遺跡　第29次調査

1．はじめに

本山遺跡は、東の芦屋川、西の住吉川とその間の小河川によって形成された複合扇状地に位置している。当地域は早くから市街地化されていたため、近年まで遺跡の存在が確認されていなかったが、昭和58年に田中町と本山中町で発掘調査が行われ、弥生時代中期と中世の遺構・遺物が見つかっている。特に12次調査では、銅鐸が出土し注目された。

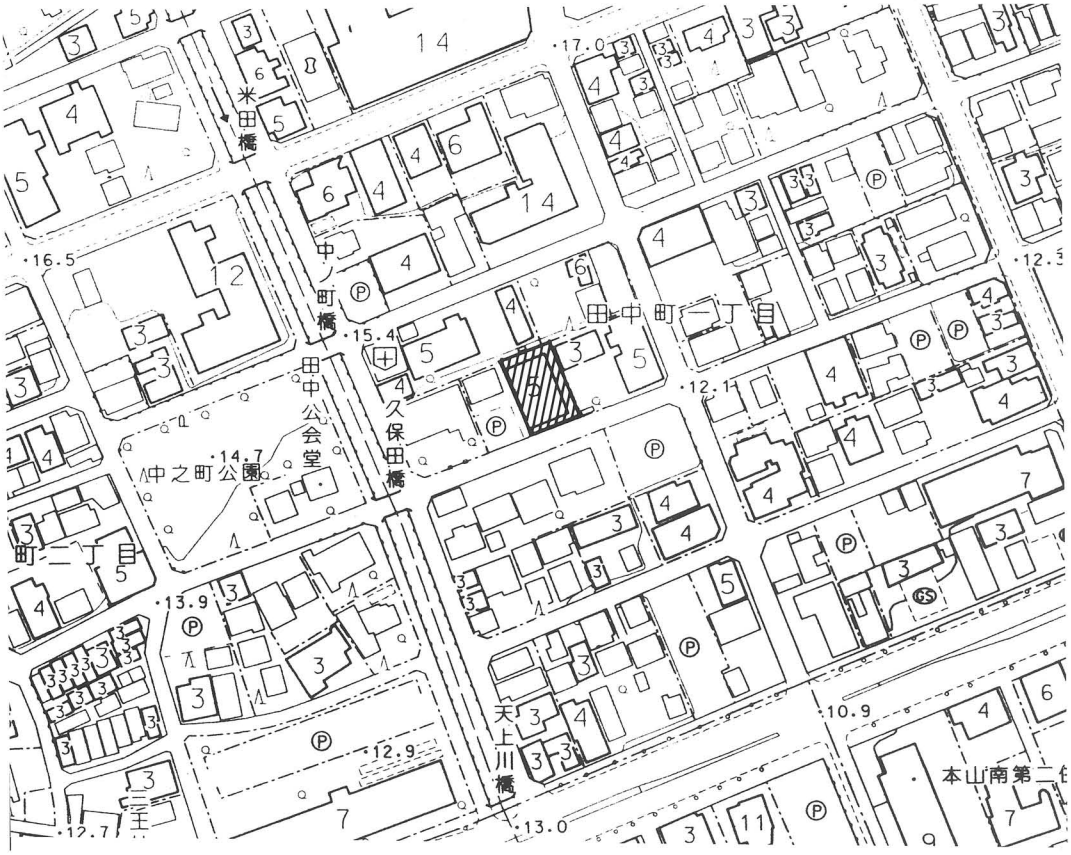
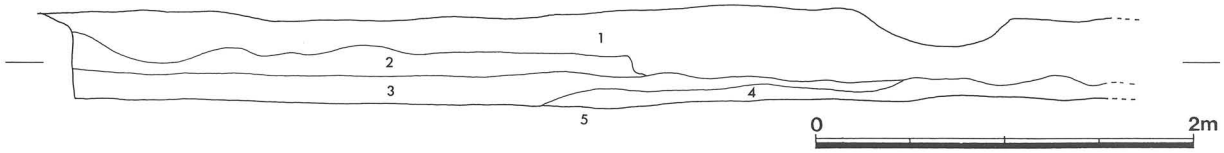


fig. 17
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

調査区の基本層序は、上層から現代の盛土、近・現代のものと思われる耕土とその床土が堆積し、さらにその下層で黒褐色粘土となる。この黒褐色粘土は六甲山南麓に特徴的なバイラン土の層であり地山を形成していると考えられる。



1．現代盛土
2．暗灰色砂質土（近代耕土）
3．茶褐色砂質土（近代耕土の床土）
4．灰茶色砂質粘土（中世土器片を含む耕土）
5．黒褐色粘土（地山）

fig. 18　調査区北壁断面図

なお、今回の調査地においては、南に下がる地形であったため住宅建築の際の整地により、切り土されており北半分では、表土直下において黒褐色粘土が確認された。

耕土と床土は、調査区の南半にのみ堆積しており南端において田圃の区画と思われる石組みと、段差を確認している。田圃の正確な時期は不明だが宅地の造成される直前のものと考えられる。この耕土内からは、１４世紀頃の須恵器や中世の土師器、弥生時代中期の土器、石器などが比較的まとまって出土しており、付近の包含層を運んで造られたものであることがわかる。地山面において明確な遺構は確認されなかった。さらに下層についてグリッドによる調査を行ったところ、土石流による堆積などが観察された。今回の調査においては遺物は確認されなかったが、近隣では、縄文時代晩期あるいは前期の土器が出土する例が報告されており、この土石流の起こった時期もこの頃であると考えられる。

3．ま と め

今回の調査では、明確な遺構が確認できなかったものの、本山遺跡の集落領域を確認する資料を得る結果となり、また本山遺跡近辺の土層の堆積過程を追認する事もできた。

遺物は、28ℓコンテナに約１箱が出土しており、なかには弥生時代中期のものと思われるピエス・エスキーユも確認されている。

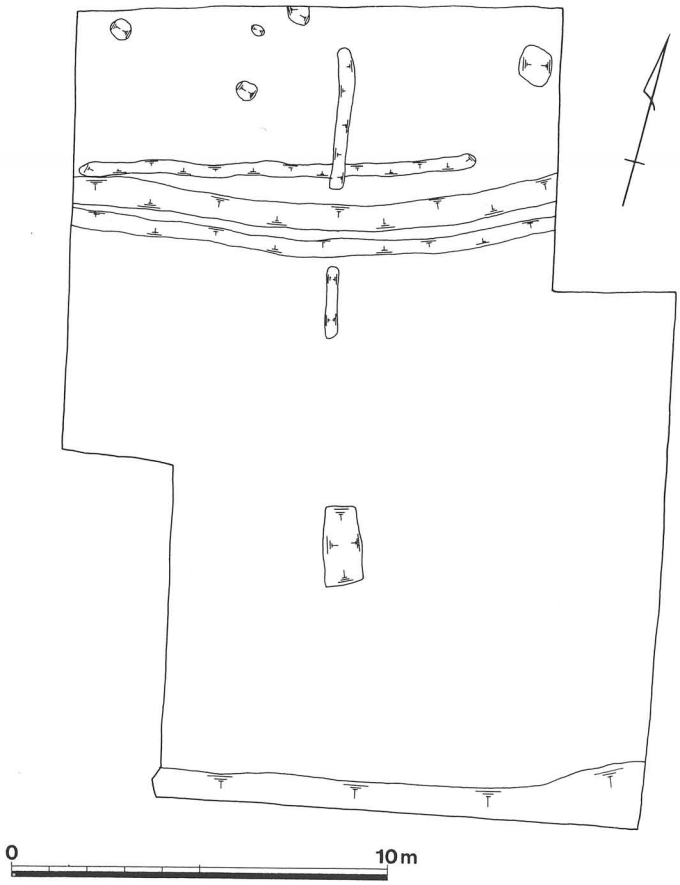


fig. 19
調査区平面図

5．本山（もとやま）遺跡　第30次調査

1．はじめに

本山遺跡は、これまでの調査において弥生時代前期から中期の流路や土坑などが検出されている。今回の調査地は、２次調査・11次調査地の南、平成元年度に銅鐸の出土した12次調査地の西に位置する。

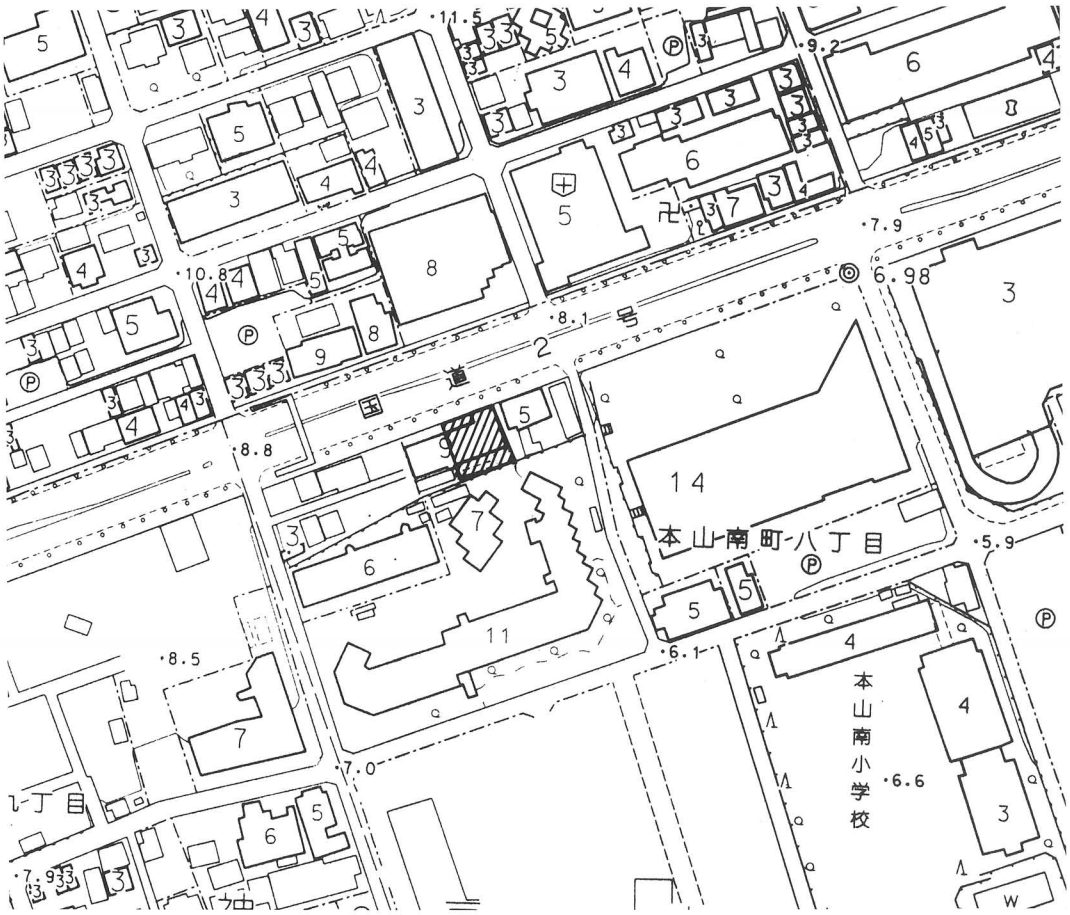


fig. 20
調査地位置図
１：2,500

2．調査の概要

第１遺構面

地表より、盛土、旧耕土、中世包含層をへて第１遺構面となる。調査区の東側では、旧耕土直下において遺構面となるが後世の削平を受けているため遺構はほとんど検出されなかった。しかし、遺構が確認された３トレンチにおいては、検出面がやや深くなる傾向がみられた。

ＳＸ01　７トレンチにおいて検出した遺構である。肩の一部を検出したのみで大半は調査区外に拡がるため規模や性格については、不明である。１２世紀頃の遺構であると考えられる。

ＳＸ02　３トレンチで検出された遺構である。１２世紀頃の遺構であると考えられる。

ＳＸ03　ＳＸ02と切り合い関係にある遺構で、ＳＸ02に切られている。１１世紀頃の遺構と考えられる。

ＳＤ02　３トレンチで検出された南北方向にはしる溝状の遺構で幅20cm、深さ５cmを測る。１３世紀頃の遺構と考えられる。

ＳＫ01　Ｂ区で検出した土坑で直径70cm、深さ40cmを測る。土坑内は、拳大の礫が充填されており、壁面は石が敷きつめられていた。１２世紀頃の遺構と考えられる。

3．ま　と　め　　調査区の西南には２面の遺構面が存在しているが、それ以外の部分では、ほとんど遺構は確認されなかった。調査区の断面においても西へ緩やかに落ちていく地形が確認されている。また、調査区南端付近において急激に遺構面が低くなることから当調査地は更新世段丘面南端にあたるものと考えられる。

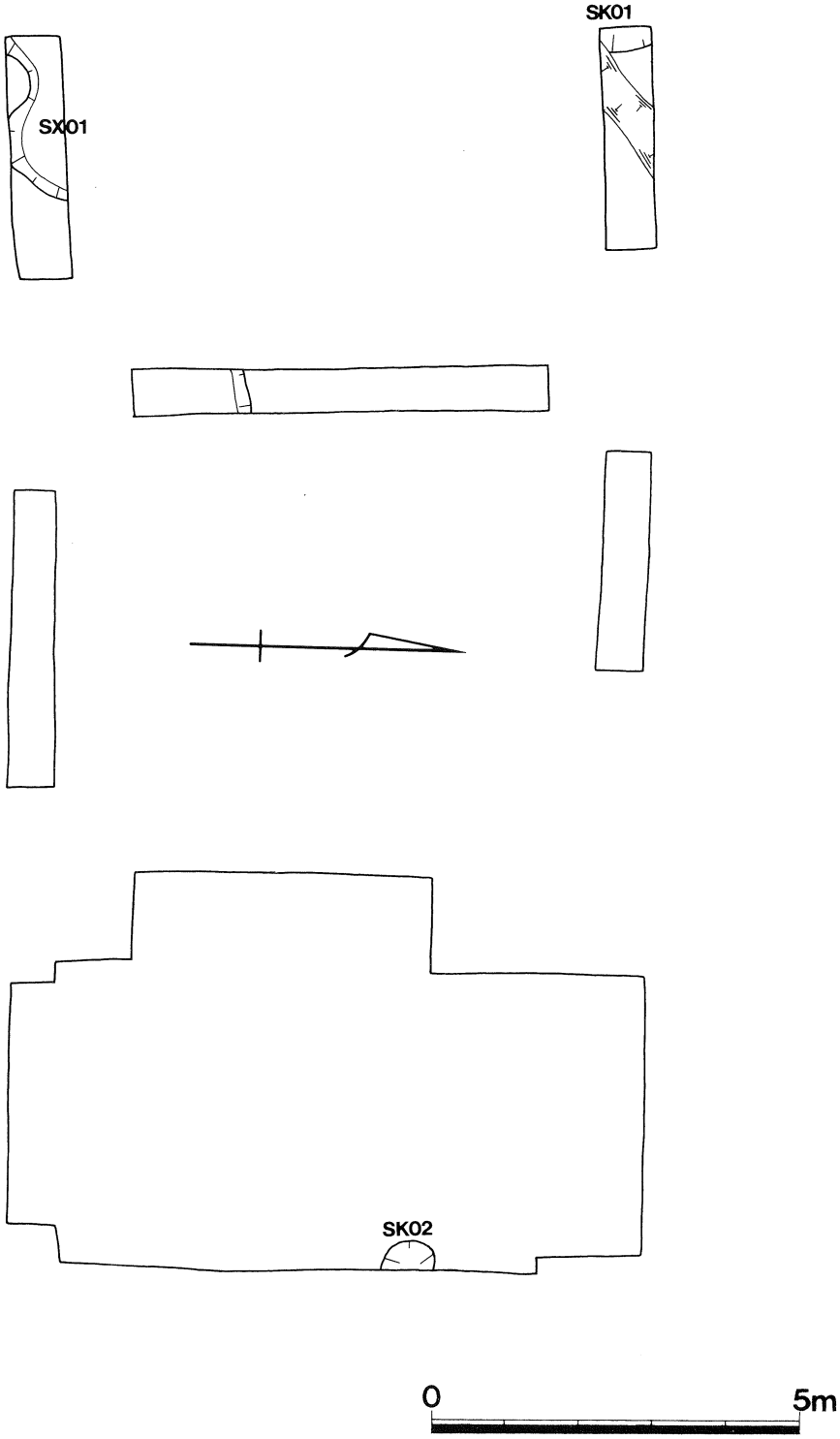


fig. 21
調査区平面図

6．本山（もとやま）遺跡　第31次調査

1．はじめに

本山遺跡は、神戸市東灘区本山北町・中町・南町一帯に所在する縄文時代～中世に至る集落遺跡で、六甲山南麓の複数の河川により形成された複合扇状地上に立地する。過去の30次にわたる調査では土器をはじめ石器、木製品など大量の遺物が出土している他、平成元年度には銅鐸が出土するなど弥生時代を通じての拠点的集落の存在が指摘されているものの、住居址など居住域に伴う遺構の検出例は僅かでしかなかった。近年になり、国道２号線付近の段丘末端において竪穴住居や掘立柱建物をはじめとする遺構の検出例が増えつつあり、注目される。

今回の調査地はＪＲ摂津本山駅の北東に位置し、現在推定されている遺跡範囲の北西限にあたる。現標高は約22ｍである。近接地の調査では平成９年度に東側約50ｍの地点（第28次）で古墳時代中期の遺構・遺物、弥生時代の遺物包含層が確認されている。

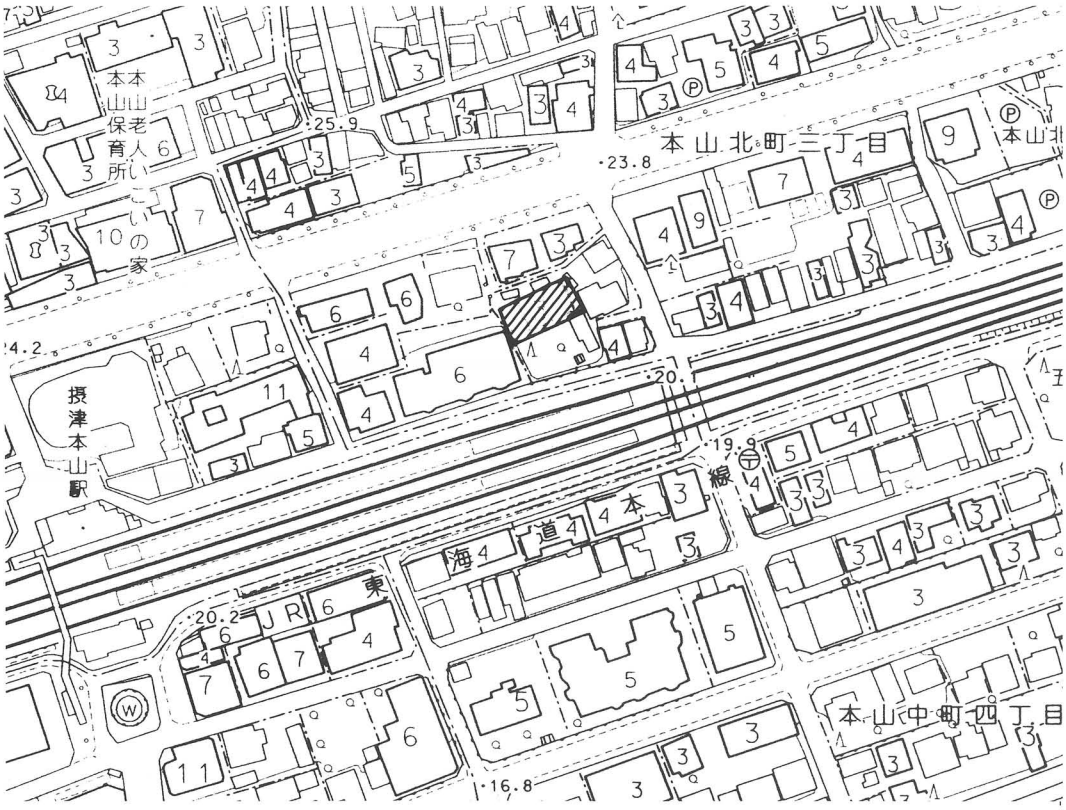


fig. 22
調査地位置図
１：2,500

2．調査の概要

基本層序　調査区内には上から震災以後の盛土層、バイラン混じりの黒褐色粘質土、灰色シルト、暗褐色砂質土、褐色砂質土が順に堆積しており、灰色シルト、暗褐色砂質土は南半にのみ認められる層である。遺構検出面は北側が褐色砂質土の地山面、南側は直上層の暗褐色砂質土面で、T.P.21.40～21.50ｍを測る。なお、黒褐色粘質土は調査区全体に堆積し、古墳時代の須恵器・土師器、弥生時代後期の土器を多く含む他、僅かに中世の遺物も混じる層であるが、この層は後世の整地に伴う二次堆積であることが調査の過程で判明した。

検出遺構　調査の結果、調査区全体において計30基の柱穴が検出された。柱穴の平面形は一部で隅丸方形になるものも認められるが、基本的には円形で、規模は径30㎝前後と径80㎝前後の

ものに分けられる。深さはいずれも10〜15cmしか遺存しておらず、出土遺物も少なく細片が多いため、詳細な時期は明らかでない。また、今回の調査範囲内においては建物の復元もできなかった。

さらに調査当初は盛土直下の黒褐色粘質土層を良好に遺存する包含層として捉えていたが、南半にある灰色シルト層を除去した際にこの下層から暗渠が検出され、埋土中から近世の染付片が出土した。この結果、灰色シルト層は近世以降の耕土層で、黒褐色粘質土層はさらに後世の堆積であることが判明した。建物建築の際に運び込まれた整地土（盛土）であったものかと考えられる。北側には灰色シルトは存在せず、建物の基礎石も地山面より深く及んでいることなどからも、かなりの地形改変が行われたものと思われる。

3．ま と め

今回の調査で出土した遺物は結果的にほとんどが二次堆積層に含まれるものであり、遺構検出面の直上層を含め、調査区内の堆積はいずれも近世以降のものであることが判明した。遺構面に遺存する柱穴からの出土遺物は乏しく、またいずれも細片であるために詳細は不明であるが、古墳時代かと考えられる柱穴が確認されたことにより、先の調査結果と合わせ、周辺に同時期の遺構が広がることが想像される。今後さらに調査が進めば、遺跡の範囲、集落の変遷などがより明確になることであろう。

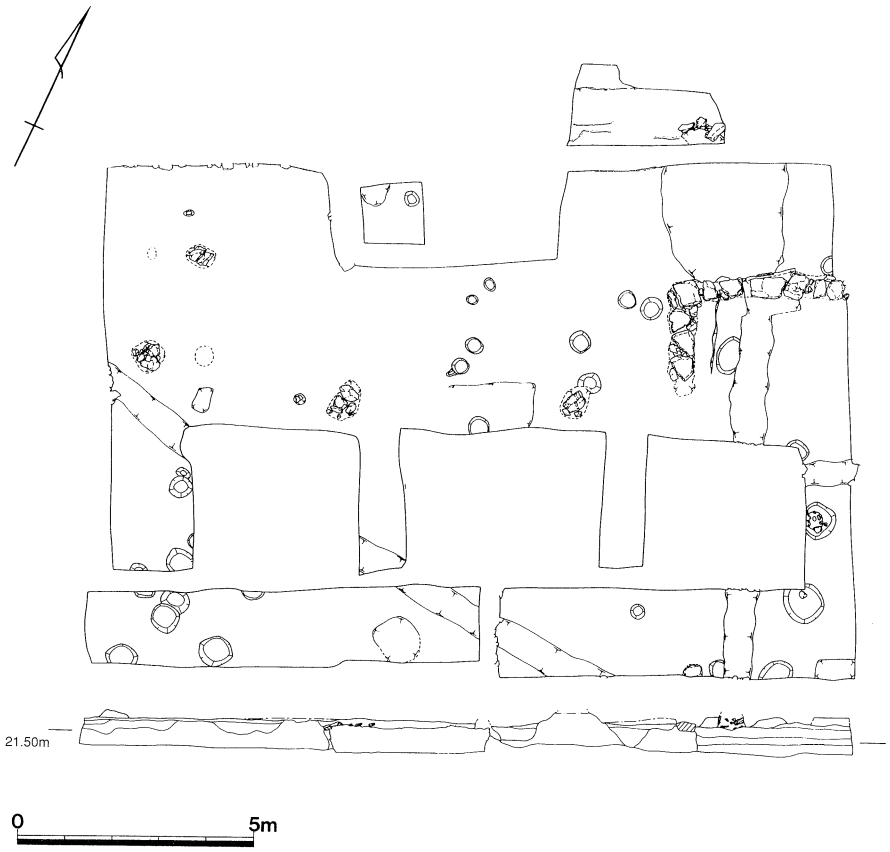


fig. 23
調査区平面図
・断面図

7．本山（もとやま）遺跡　第32次調査

1．はじめに　本山遺跡は、芦屋川と住吉川によって形成された複合扇状地上にあたり、現在のＪＲ摂津本山駅付近から国道２号線の南に至る地区に広がる遺跡である。

本山遺跡は、これまでに31次におよぶ調査が行われてきており、縄文時代早期の押型文土器から弥生時代前期・中期の土器、サヌカイト製石器、中世の遺物、掘立柱建物などが確認されている。さらに第12次調査においては、銅鐸が発見されている。

今回の調査地は本山遺跡の北端に位置しており、標高は約23ｍである。

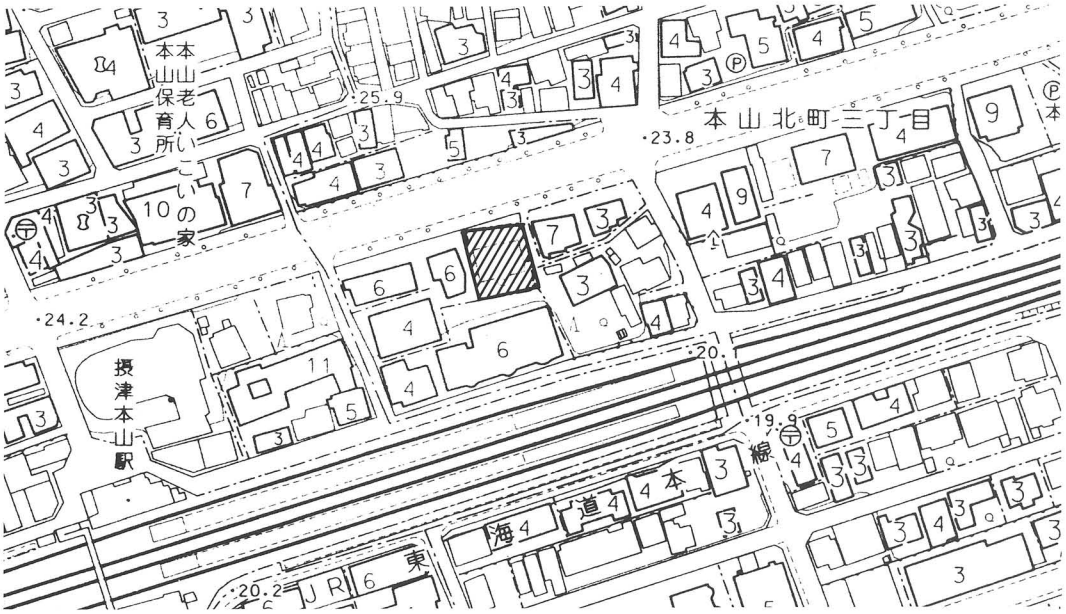


fig. 24
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　調査区は、工事掘削範囲にあわせて１～４のトレンチを設定した。

基本層序　基本層序は、表土・盛土以下、暗灰黄色砂質土・暗褐色砂礫土・灰黄褐色砂質土・黒褐色粘性砂質土〔遺物包含層〕・黒色粘質土〔遺物包含層〕・黒色粘質土（花崗岩風化小礫含む）・黒褐色粘性砂質土・暗褐色砂である。

１トレンチ　撹乱が著しくて、遺物包含層・遺構面はほとんど残存しておらず、西端南側でのみ遺物包含層を検出できた（標高約22.4～22.5ｍ）。土師器・須恵器が出土している。

２トレンチ　東半で落ち込みとピットを１基検出した。落ち込みは幅1.8ｍ、深さ約15㎝分を検出したが、大半は範囲外のため規模は不明である。ピットは、直径17～19㎝で、深さ約10㎝である。埋土はいずれも黒色粘質土である。

３トレンチ　２面の遺構面を確認した。第１面は、黒色粘質土の上面である。トレンチ中央部南壁際で、黒色粘性砂質土を埋土とする深さ約18㎝の土坑を検出した。

黒色粘質土掘削後の第２面では、東半でやや茶色の粘質土をベースとする土坑を検出した。規模は直径約48㎝の円形の土坑で、深さは約15㎝を測り、皿状にくぼむ。埋土は花崗岩風化礫の混入する黒色粘質土である。弥生時代中期と思われる土器片が出土している。

また、中央部から西半にかけて、ピットを４基検出した。直径約12㎝のものと直径20数㎝のものがある。前者は杭跡と思われる。埋土はいずれも黒色粘質土である。

上層の遺物包含層からは弥生土器や古墳時代の須恵器・土師器、中世の遺物などが出土しており、下層の黒色土遺物包含層からは弥生時代中期の遺物が出土している。

4トレンチ　4トレンチでも2面の遺構面を確認した。第1面は黒色粘質土の上面である。トレンチ東半で、ほぼ東西方向の一段下がる落ち込みを確認した。埋土は包含層と類似した黒褐色粘性砂質土である。段差は約10cmである。また、西半で幅約30cm、深さ約5cmの溝を検出した。埋土は黒褐色粘性砂質土である。その溝から西側で、ピット状の落ち込みを数カ所検出したが、明確な遺構とはならなかった。

第2面は、トレンチ東半でピットを4基検出した。花崗岩風化小礫を含む黒色粘質土をベースとしており、埋土は黒色粘質土である。遺物は、ＳＰ08とＳＰ09から土師器の小片が出土している。

3．まとめ

今回の調査では、遺構に関しては調査区の関係上不明な点が多いが、遺物包含層から古墳時代の土器が多く出土した。しかし、中世の土器がごくわずかであるが混在しており、中世段階で整地が行われたようである。

遺物包含層は、西南にいくほど厚く堆積しており、逆に北東側では既に削平を受けているため、遺構面・遺物包含層が確認できていない部分がある。基盤になる土層についても同様に北東から南西への傾斜がみられる。

また、3トレンチ・4トレンチの西半で黒色粘質土のゆるやかな落ち込みを確認した。この落ち込みは、地形のくぼみに堆積したものと思われる。

その他、弥生時代中期の土器やサヌカイト片も出土しており、古墳時代の集落のみならず、周辺に当該期の集落の存在を想定できる。

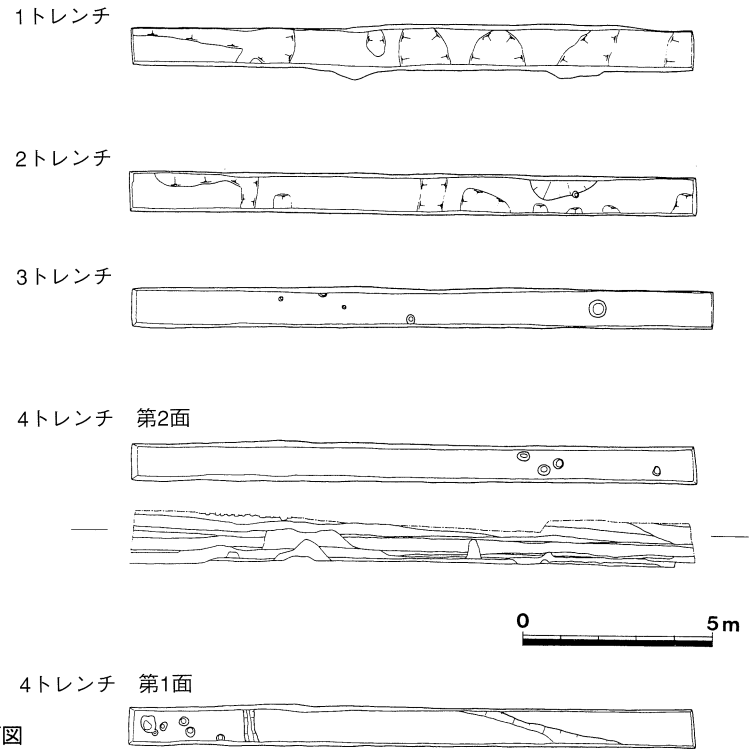


fig. 25
調査区平面図・断面図

8．本山（もとやま）遺跡　第34次調査

1．はじめに

本山遺跡は、これまでに33次にわたる調査が行われており、弥生時代前期から中期の流路や土坑などが検出されている。今回の調査地は、２次調査・11次調査地の西、32次調査地の南に位置する。

本山遺跡の旧地形は、国道２号線を挟んで北側と南側とでは大きく異なり、北側では更新世段丘面から浅い位置で現れる。南側では縄紋海進時の海食崖があり、その南側には沖積地が広がる。

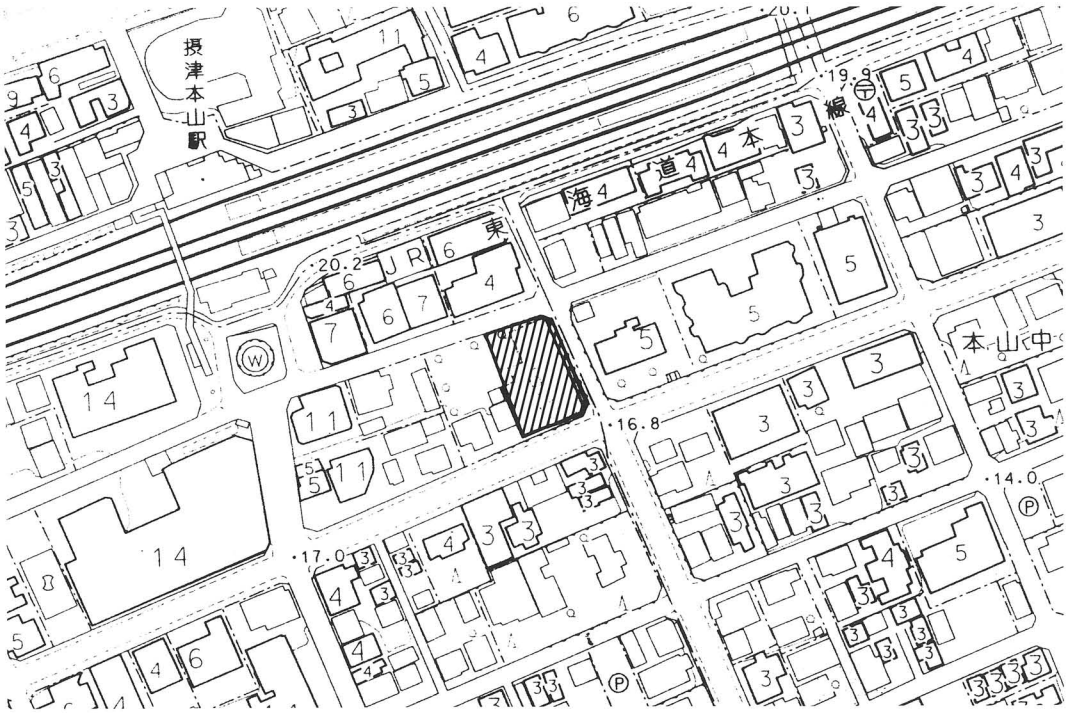


fig. 26
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

第１遺構面

地表より、盛土、旧耕土、中世包含層をへて第１遺構面となる。なお調査区の東側においては、旧耕土直下すぐに遺構面となり、さらに一部削平を受けている部分は第２遺構面が直にみられた。

ＳＫ03　調査区北東において検出した、一辺1.8ｍの隅丸方形を呈する土坑である。

土坑内部には、拳～人頭大の石がぎっしりと詰められていた。羽釜が比較的多く出土している。１４世紀の遺構と考えられる。

ＳＸ01　ＳＫ03の南につづく遺構である。幅60㎝の溝の中に石組みの暗渠状の排水施設を設けており、中央付近には水溜状の施設をもっており、内部には石が充填されている。１４世紀の遺構と考えられる。

ＳＤ13　幅70㎝、深さ15㎝を測る溝状の遺構である。溝の東側には、石材が積まれており、一部直線的に並ぶ部分も認められるところから、石組みの溝であったと考えられる。

なお、溝の底部には焼土が堆積しており、近くに存在していた土塀が焼失したものと考えられる。１４世紀頃の遺構と考えられる。

この他、ＳＤ07・30等、石組みであったと思われる溝が検出されている。

第２遺構面　暗褐色シルト混細砂を掘り下げると古墳時代の遺構面となる。

ＳＤ201・203　ＳＤ201・203は調査区中央部を南北方向にはしる溝状の遺構である。共に幅90cm前後で深さ40cmを測り、一部の断面はＶ字状を呈する。出土遺物から６世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＤ208　調査区の中央を西から東へはしる溝状の遺構である。幅1.6ｍ、深さ45cmを測り、調査区南東部において「く」字状に折れ曲がる。一部の断面は、逆台形を呈する。出土遺物から６世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＤ301　調査区中央を南北にはしる幅約8.0ｍ、深さ140cmの溝状の遺構である。溝内からは、弥生土器、土師器が出土しており、庄内並行期頃に埋没したものと考えられる。

３．ま と め

今回の調査では、全体に２面、東側の部分においては３面の遺構面が確認された。

第１遺構面は、１４世紀代のもので、建物こそ確認できなかったもののＳＤ02・30・13・07・32等溝が集中する部分があり、何らかの区画（字境等）があった可能性が考えられる。ＳＤ13の状況からすれば宅地の境界が想定できる。

また、第３遺構面においては河道を検出した。河道の上層部では、Ⅳ様式から庄内期にかけての土器が多量に出土した。しかし現状において、多量に出土している土器に対して明確に集落の位置を特定できていない。今後、住居址群の検出など居住区域の特定が課題といえよう。

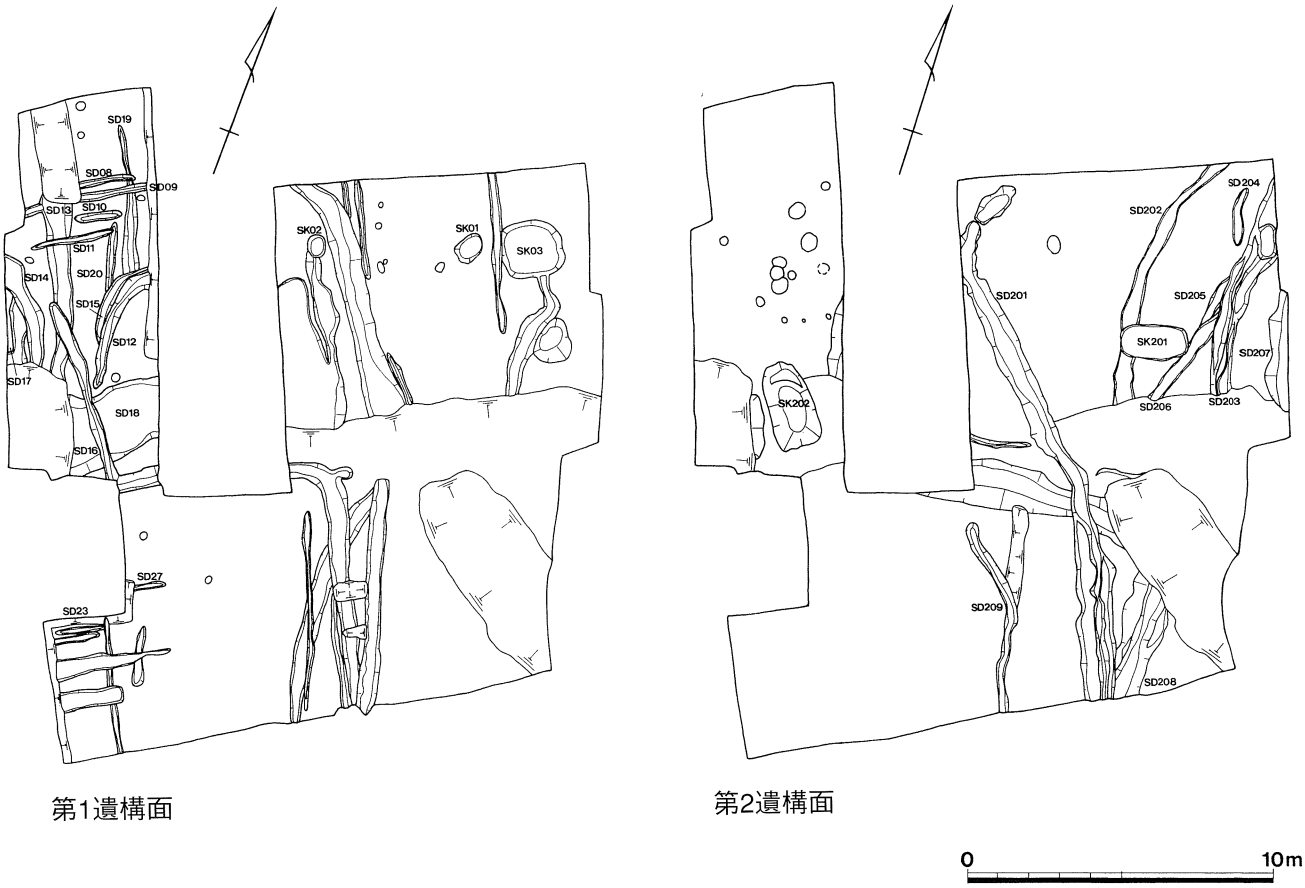


fig. 27　第１・２遺構面平面図

9．魚崎郷古酒蔵群（うおざきごうこさかぐらぐん）　第１次調査

1．はじめに

魚崎郷古酒蔵群は住吉川河口付近両岸の砂堆あるいは自然堤防上に立地し、標高は約２ｍである。18世紀代に灘地域で営まれるようになった酒造業は、日本一の酒造地帯として発達し現在に至っている。

阪神・淡路大震災によって甚大な被害を被った灘の酒造地帯では、歴史的な景観を呈していた古い木造・レンガ造の酒蔵のほとんどが倒壊して姿を消してしまったが、まだ地下に遺存しているであろう近代さらには江戸時代に遡る遺構の記録保存は可能との観点から、埋蔵文化財の調査対象として扱われるようになった。

今回の発掘調査は神戸市内では４例目、神戸市教育委員会が実施する酒蔵の調査としては３例目で、魚崎郷古酒蔵群では初例である。

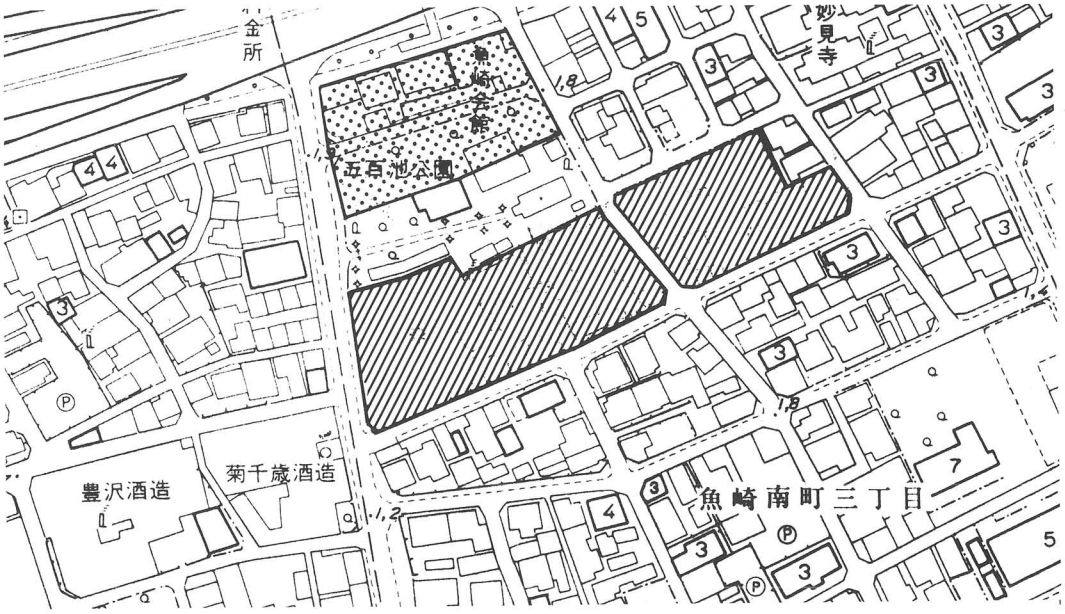


fig. 28
調査地位置図
１：2,500

2．調査の概要

調査対象となった敷地は市道を挟んで隣接する東西２つの敷地で、東側（東蔵地区）で３ヶ所、西側（内蔵地区）で６ヶ所の調査を実施した。調査実施前、西側敷地に関しては松尾仁兵衛商店（金正宗）の明治時代～昭和初年頃の建物配置図が現存することが判明し、

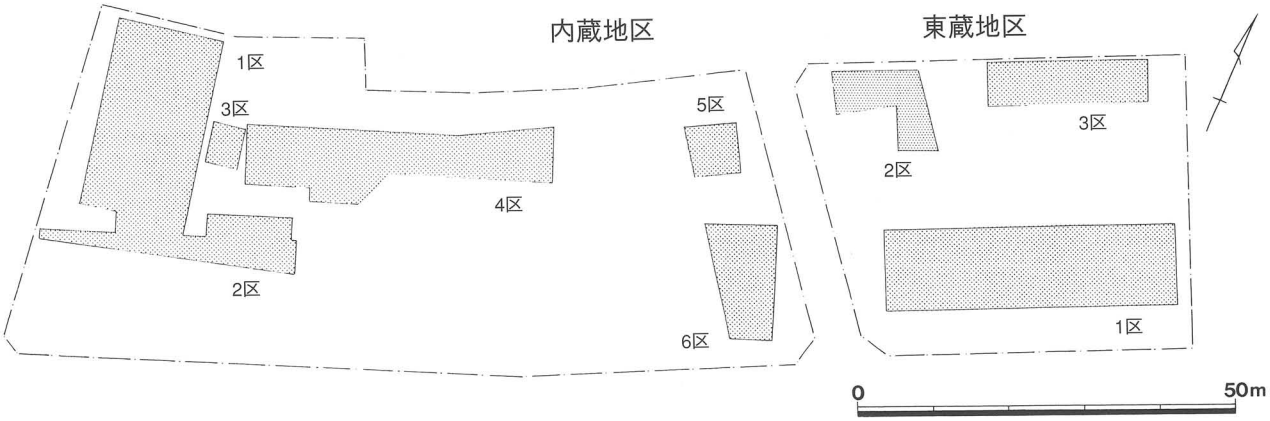


fig. 29　調査区設定図

確認した建物の名称は配置図に従った。また配置図によって他にも松尾仁兵衛商店が以前所有していた酒蔵が存在していたことが判明した。「北蔵」は小さな敷地に細分されたため酒蔵であったことが知られていなかったケース、「朝日蔵」は深江に所在するため、いわゆる灘五郷からは外れているケースである。共に今後神戸市内で古い酒蔵の文化財的な保護を考慮する上で検討を要する内容であるため、簡単ではあるが併せて紹介しておきたい。

東蔵１区　太平洋戦争の空襲で焼失した酒蔵を検出したが、空襲直後に掘り込まれた多くの瓦礫投棄坑と後に再建された酒蔵の基礎等でかなりの部分が撹乱され、遺存状況は極めて悪かった。酒蔵の前身建物と酒蔵の外側で他に石垣を２列検出した。

東蔵　西側の石垣を検出した酒蔵で、調査区の大半が蔵内部に含まれるが他の石垣は調査区外となるため確認できなかった。床面上部は焼失した際の熱で赤変しており、中には焼夷弾が貫通した小孔もあった。床面は点在するようにしか遺存していなかった。床面の貼り直しは１・２回行われていたことが確認できたが、部分的な補修であるのか全面の貼り替えであるのかは不明である。礎石は投棄坑内で転倒した状態で２個体、撹乱の重機掘削で遊離した状態で２個体確認したが、本来はもっと多く存在したはずである。人頭大の花崗岩の丸い石材を根石として４～５個並べ、その上に上面を約25cm四方に整形した花崗岩の切石を置いていた。礎石の柱材が載る面には墨の痕跡が認められたが、墨書や墨打ち線であるのかどうか判読できなかった。西側石垣は長さ約50cm、高さ約30cmの花崗岩の自然石を２段に積んでいる。上段石材の上面には南から約１ｍ置きに「七」～「十三」の漢数字が墨書されていた。石垣の上面はほぼ平坦であることからも、この漢数字は石垣の上に壁材を構築する際の目印である可能性が高い。東側でレンガ列と小さなレンガ敷を１ヶ所ずつ検出した。使用されていたレンガは大正14年に設定された規格に合致しないため、それ以前に造られたレンガである。

前身建物　調査区の西側で検出した酒蔵以前の建物である。遺存状況は悪く建物の東西石列を検出したのみである。石列の近くで花崗岩の自然石を３つ並べた石組遺構を２基検出した。東側石組の石材上面には「七」「七」「十」の漢数字が墨書されていた。

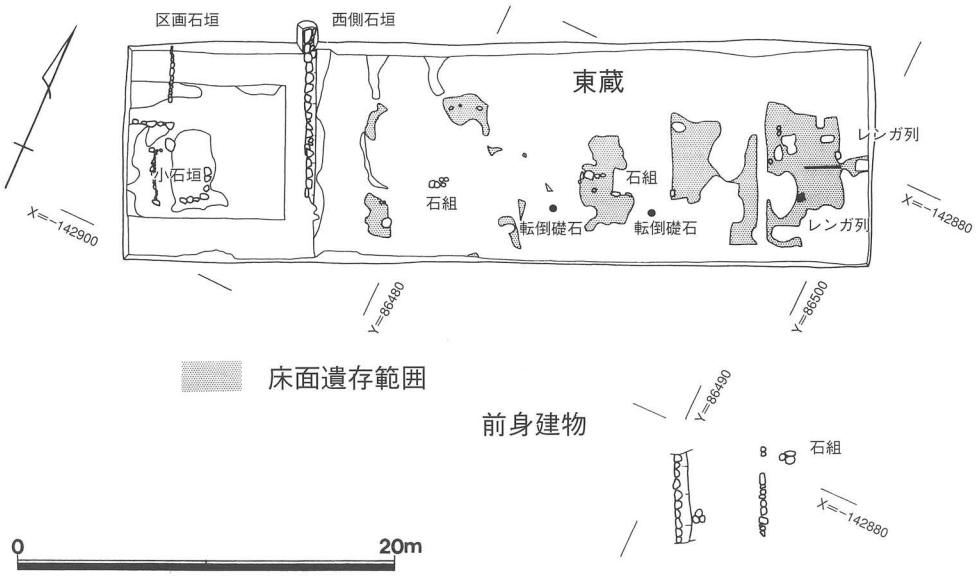


fig. 30
東蔵地区１区
平面図

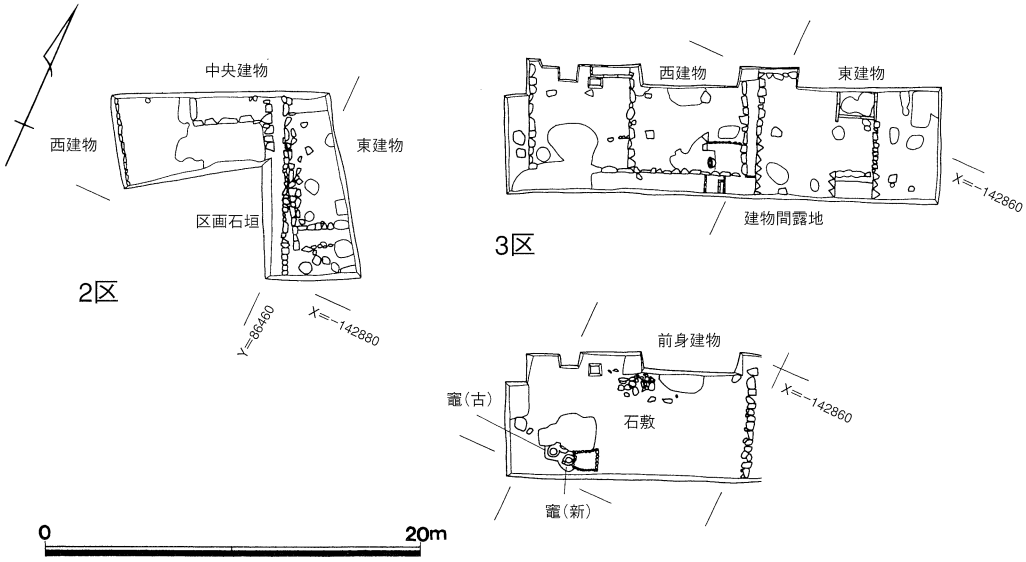


fig. 31
東蔵地区２・３区
平面図

東蔵２区　太平洋戦争の空襲で焼失した建物を３棟検出した他、石垣を１列検出した。

東建物　調査区の東半で検出した建物である。床面に相当する貼り床土が存在しないため、床下に空間がある板貼の建物であったと考えられる。建物築造時の整地層から明治10年の半銭硬貨が出土しているため明治時代中頃の築造の居宅であったと考えられる。南側には幅１ｍの間隔で２条の石列があり、その間には白黄色の貼り床土が、石列の南側には飛び石状の踏石があるため、建物の南隣は庭であったと思われる。西側石垣の下段は花崗岩の自然石、上段は花崗岩の大きな切石を積んでいる。石材の大きさは不揃いであるが、石垣の高さは約60㎝である。石垣の構築方法は中央建物の石垣と共通する。

中央建物　調査区中央で検出した小規模な建物である。周囲に石垣を巡らす堅固な建物であるため土蔵と考えられる。床面の貼り床土が遺存しないが、土層観察から削平された可能性が高い。石垣の構築方法の共通性から東建物と同じ時期に築造されたと考えられる。石材の大きさは東建物よりさらに大きく、石垣の高さは約60㎝である。東側石垣のみ下段の石材が1.6ｍ建物南端を越えて延び、東建物の西側石垣と並んで溝状の構造を形成している。

西建物　調査区の西辺で検出した建物である。石列のみの検出で、内部の構造は不明である。

東蔵３区　太平洋戦争の空襲で焼失した建物を２棟とその前身建物を１棟、竈を２基検出した。

東建物　調査区の東半で検出した建物で、太平洋戦争の空襲で焼失した酒蔵の附属建物と考えられる。建物の西端と北端には石列があり、さらに建物中央に南北方向の石列が１条ある。中央の石列には周囲に石列を持つ方形区画が２ヶ所附属している。南側の方形区画にはモルタルが塗られており、水を使用する施設と考えられる。

西建物　調査区の西半で検出した建物で、太平洋戦争の空襲で焼失した酒蔵の附属建物と考えられる。建物の北端を除く３方には石列があり、さらに建物中央に南北方向の石列が１条ある。床面にモルタルが塗られ、周囲に石列を持つ方形区画が中央石列には２ヶ所、東側石列には１ヶ所附属している。東側石列の方形区画の西隣には石臼が投棄された土坑が１基存在する。水と石臼を使用する施設と考えられる。建物の南隣にあるレンガ列に使用されていたレンガには大正14年に設定された規格に合致するものとしないものが併用されていた。従って大正時代から昭和初年頃に構築された可能性が高い。

fig. 32　東蔵地区２区全景

fig. 33　東蔵地区３区前身建物・竈

前身建物　西建物の下で検出した前身建物で、酒蔵の附属建物の可能性がある。内部に石敷と西端に石列があり、床面の遺存状況はあまり良くないが、複数回の貼り直しが確認できた。建物築造時の整地層から明治９年の一銭硬貨が出土しているため明治時代中頃の築造と考えられる。後に建てられた西建物と比較して石列石材に隙間があってあまり整ったものではないが、西建物の南端よりもさらに南に続いている。裏込めからはかつて垂壺として使用されていたであろう２石半入りか３石入りの備前焼の大甕の破片が出土した。

竈　調査区の南西隅で新古２基の竈を検出した。古い竈は２連の形式で南側に竈本体、北側に焚口の作業場がある。新しい竈は１連の形式で西側に竈本体、東側に焚口の作業場がある。新しい方の竈には煙突が残り、作業場は周囲が石と粘土で構築されるなど遺存状況が良好である。しかし大きさから酒造の蒸米用の竈とは考えられない。

内蔵１～３区・４区西端　江戸時代末頃に築造された重ね蔵形式の酒蔵１式、附属建物２棟、酒蔵の前身建物１棟検出した。既存建造物の配管・解体時の基礎抜取坑で検出した建物は著しく損傷を受けているが、前身建物以外は明治時代～昭和初年頃の建物配置図通りの位置で検出できた。

大蔵　重ね蔵形式の北側の酒蔵である。平面形は長方形ではなく少し歪んでいる。周囲に石垣を持っているが、東側石垣は撹乱で破壊されている。床面は築造時の貼り土と、その上に貼り直されたモルタルの２面を確認した。酒造関連遺構は撹乱で破壊されたと思われ確認できなかった。石垣の段数は北側と西側は３段、前蔵と接する南側は２段である。基底石は花崗岩の自然石、上は花崗岩の大振りの間知石である。西側石垣は前蔵の西側石垣にそのまま繋がり、南側石垣は一旦西側石垣を積んだ後、西側石垣石材の内側に接して積まれている。北側と西側の石垣掘形は隣接する里道の路面上から確認できなかったため、周囲が里道として使用されたのは大蔵築造後であったことが判る。内部には堅固な礎石があるが確認できたものは１基のみで、他は撹乱で破壊されたと思われる。人頭大の花崗岩の割石を根石として５～６個並べ、その上に同じ大きさの花崗岩の割石を置いて礎石とする。切石を使用していないことは築造された時期が他の酒蔵と比較して相対的に古い可能性がある。掘形から江戸時代末頃の遺物が出土しており、蔵の築造時期が推定できる。

前蔵　重ね蔵形式の南側の酒蔵である。平面形は複雑で、南側中央には内側に入り組む部分がある。西側は石垣であるが、他の部分は石列である。内部には礎石が存在したはずである

が、撹乱で破壊されたと思われる。床面は築造時の貼り土によるものと、その上に貼り直されたモルタルと土を組み合わせたもの、モルタルのみの３面を確認した。明確な酒造関連遺構は撹乱で破壊されたと思われ確認できなかった。西側石垣は２段で、大蔵西側石垣と一連のものとして構築されているが、前蔵部分は段数が１段低い。南側石列の西半は西側石垣と同じ大きさの石材を並べているが、北側に面を向けている。東半は一転して小振りの花崗岩の石材を並べているが、特に面を意識はしていない。西側と大蔵に接する北側は丁度中間程度の大きさの石材を並べているが、これも特に面を意識はしていない。西側石垣の外側には長さ10～30㎝、高さ10～20㎝の石材を積んだ小石垣が伴っている。南側石列が内側に入り組む部分で石組遺構を検出した。内法平面は1.5×1.4ｍの長方形で、深さは80㎝である。近現代の遺物が出土したため埋め立てられた時期は新しいが、前蔵の南隣にあるため酒造用具を洗浄する際の水溜等の用途であったと思われる。

附属桶納屋・北蔵附属納屋　酒蔵の附属建物である。明確な酒造関連遺構は検出できなかったが、昭和初年頃の建物配置図に記載があった。南側石列のみの検出であるが、両者を区画する施設は確認できなかったため、一連の建物として築造した後に簡易な仕切りで用途を区別していたと考えられる。大正３年の建物配置図には記載されておらず、また石列は里道の路面上を掘り込んで構築されていたため、大正３年以降昭和初年までに築造されたと推定できる。

座敷（隠居）　前蔵の南隣で確認した建物である。遺存状況が悪く北側と西側の石列を検出したのみであるが、建物配置図に記載されていた。北側石列は同時に前蔵南側石列でもあるため、大蔵・前蔵の築造と同時に築造されたと考えられる。配置図ではもう少し調査区外に続くようであるが、調査区南辺で石列を検出したため内部に石列があったことが判る。

里道・里道西側　大蔵の北側と大蔵・前蔵・座敷（隠居）の西側で検出した。建物配置図に記載されている通り少し歪んだ「Ｔ」字形をしていた。路面には微細な石炭滓の様な黒色炭化物が敷かれていたようで、断面では細い黒色の縞が無数に確認された。石炭滓であれば酒蔵の釜場

fig. 34　内蔵地区前蔵

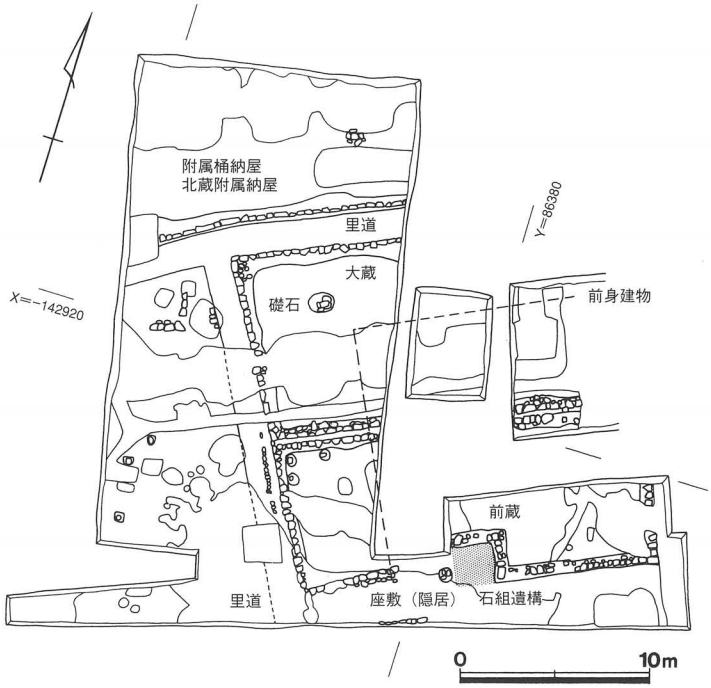


fig. 35　内蔵地区１～３区平面図

で使用されたものを転用した可能性がある。また里道の西側では石列・土坑・礎石等を検出した。この部分は建物配置図には記載がないため、松尾仁兵衛商店の所有地でなかった可能性が高い。武庫郡魚崎村が神戸市に編入後の区画整理の際、西側の市道が拡幅されると同時に里道が廃道となり、松尾仁兵衛商店の敷地が現在の姿になったと考えられる。

前身建物　酒蔵築造以前の建物で、遺存状況が悪く西側と北側の石列を検出したのみである。西側石列の直上に前蔵の北側石列が積まれていたため、酒蔵築造の際に解体されたと考えられる。貼り土の床面を１面確認したため土間を持つ建物であったことは判明するが、建物の性格は不明である。北側石列の北隣で大蔵築造以前の溝や土坑を検出しているが、建物との関係も定かではない。石列の遺存状況も悪く石材が欠落する部分が多いが、石材の大きさは北側より西側の方が大きく、北西角の石材はさらに大きいものを使用している。

内蔵４区　既存建造物の基礎・解体時の基礎抜取坑で著しく撹乱されているが、建物配置図に記載がある釜場と井戸を検出した。

釜場　破壊されたレンガ造りの竈１基分の痕跡である。竈周囲と煙突があったと推定される方向に延びる高熱による赤変部分と、竈のレンガの周囲に塗り込めたと考えられる裏貼り粘土が僅かに確認されたのみである。周囲の撹乱から多量のレンガと耐火レンガが出土したが、レンガには大正14年に設定された規格に合致するものとしないものが混在しており、大正14年以降にレンガの積み直しが行われたことが判明する。いわゆる灘地域では通常酒造用の竈は内法直径１ｍ前後の大きなものが大小２基並列する形式であるが、確認した竈の痕跡は小さいため１基単独形式の釜場であった可能性がある。焚口作業場の周囲は石積みであったが、南側の最下段しか残っていなかった。床面は新古２枚確認し、新しい床面はモルタル塗りで東側の一部にレンガが併用されていた。モルタル部分の東端に30㎝×20㎝の枡がモルタルで造り付けられていた。古い床面は総レンガ敷で、南側石積みの東半がさらに１段下がる状態でつくられていた。このレンガは大正14年の規格に合致しない古いものであった。古い方の床面は竈の痕跡の中央に対面しており、少なくとも築造当時には竈が１基しか存在しなかったことを裏付けている。

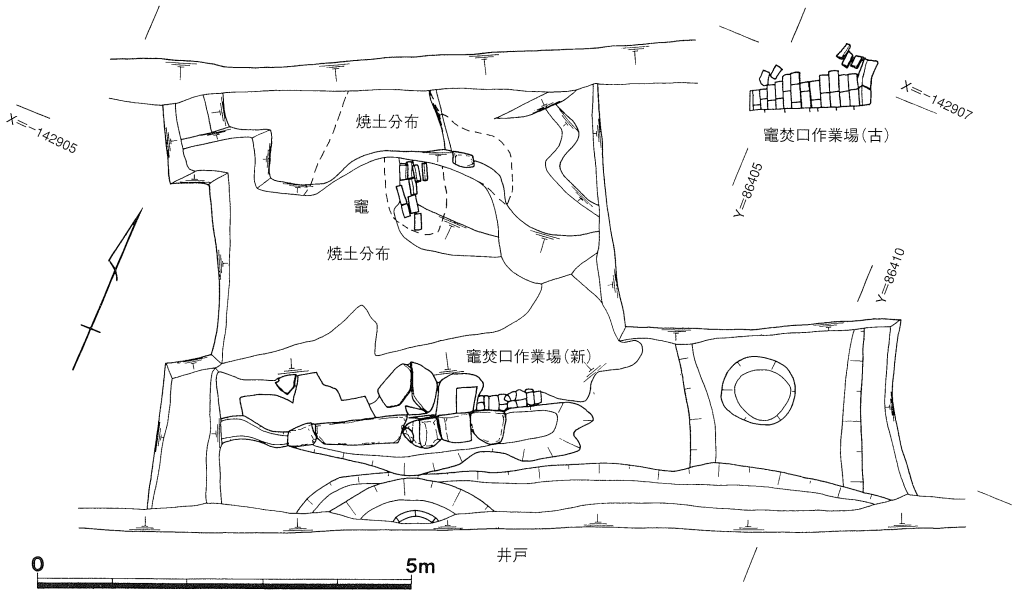


fig. 36
内蔵地区４区
釜場平面図

井戸　焚口作業場南隣で検出した井戸瓦積みの井戸である。恐らく釜場の破壊時に井戸枠の上部が崩されて真砂で埋め立てられたと思われる。枠内は調査区外となるため掘削できていないが、井戸瓦積みであることから井戸の開削時期は江戸時代から近代のある時期と思われる。大量の水を使用する洗米・蒸米作業を簡便にするため、通常酒蔵では米洗場・釜場と井戸は接近した位置に配置するが、本蔵でもそのように構築されていたことが判る。

内蔵５区　既存建造物の附属施設である地下タンクが構築されていたため著しく撹乱されており、遺構・遺物は全く確認されなかった。撹乱層の直下は自然堆積の砂層であった。

内蔵６区　築造時の基礎・解体時の基礎抜取坑で西半は著しく撹乱されていたが、西外側に石列を伴う建物を１棟検出した他、建物の北隣で削平された竈と石垣を検出した。

建物　周囲に石列を持つ建物である。北側と西側の石列を確認したが、西側石列の遺存状況は悪く大半の石材が欠失し、抜取穴と築造時の掘形を検出したのみであった。北側石列は石材の大きさが不揃いである。西側石列の約１ｍ外側には石材の大きさの小さな石列が１条並行している。建物内部の検出面積が狭いため柱穴や礎石等は確認できていないが、建物の北側には江戸時代末頃の遺物が多量に分布していた。

竈　建物の北隣で検出した竈である。建物との関係は不明であるが、建物が存在した当時この部分には直径約50㎝の竈が、全く同じ位置に３回繰返して構築されたことになる。竈の上部は削平されて底の部分のみの検出であったが、２回目に構築された竈には火の通り道を形成していた石材が遺存しており、竈本体は南側で北側に焚口の作業場が存在したことが判る。竈の周囲には掻き出された炭や灰のため、暗灰色の縞状の土層が約20㎝の厚さで形成されている。しかし竈の大きさからは酒造の蒸米用の竈とは考えられない。

北蔵　建物配置図によって「魚崎村五百三拾弐番地・五百三拾四番地」、現行住居表示では魚崎南町３丁目19・22に松尾仁兵衛商店が明治から昭和にかけて所有していた酒蔵があったことが判明した。現在はビルや商店、市道、公園になっている。ただ配置図には「北蔵二号三号」と書かれていることで、さらに以前に松尾仁兵衛商店の所有であった北蔵一号が近隣に存在していたことになり、一号である以上、内蔵に次いで古い酒蔵であった可能性が高い。現在は北蔵一号の所在地を確定する資料がないが、東蔵の北隣、「北蔵二号三号の東」隣の街区は区画整理以降のものであり、ここが北蔵一号であった可能性が残る。本宅横の内蔵が最も古いとすると、北蔵の築造時期は江戸時代末から明治時代初年頃と考えられる。

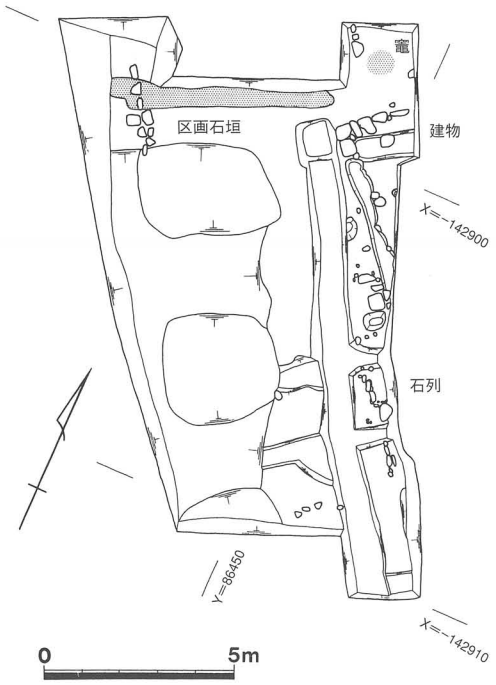


fig. 37　内蔵地区６区平面図

朝日蔵　建物配置図から「本庄村深江字東濱百六拾六ノ壱・百六拾壱ノ弐」、現行住居表示では

深江南町２丁目３－31・１－17に松尾仁兵衛商店が大正から昭和にかけて所有していた酒蔵があったことが判明した。現在は剣菱酒造の酒蔵（旭蔵）と建築会社の社宅となっている。木造の酒蔵は阪神・淡路大震災で倒壊し、モルタルの床面が露出した状態となっている。深江で酒造業が営まれていたことは大正十年発行の『武庫郡誌』に記載があり、「松尾仁兵衛商店」の名も掲載されている。また現在でも太田酒造（金紋道灌）が醸造している。いわゆる「灘五郷」を五郷のみに限定した場合、深江は含まれないことになるが、灘の酒造地域をどう捉えるかが問題になってくる。朝日蔵の明治時代の所有者は蔵元であること、また現在露出している床面の下には築造時の貼り土の床面が遺存している可能性が高いことから、酒蔵の築造年代は不明であるが明治時代さらには江戸時代に遡る可能性が残る。

3．ま と め

魚崎郷の住吉川左岸一帯は灘五郷でも歴史的な景観が良好に残っていた地域であるが、震災で古い酒蔵が姿を消し、現在では景観は写真の中でしか窺うことはできない。その中で実施された今回の発掘調査では、東蔵地区では太平洋戦争時の空襲で焼失した酒蔵と附属建物群、内蔵地区では大正時代の建物配置図通りの位置で検出できた江戸時代末頃築造の重ね蔵形式の酒蔵とその前身建物を確認した。中でも重ね蔵形式の酒蔵はその後の増改築で当初の姿を留めず、近代的な酒蔵に建て替えられるまでは一棟の木造の酒蔵と認識されていた。灘五郷での酒蔵の発掘調査はまだ端緒についたばかりで、調査対象や調査方法もまだ試行錯誤の段階である。酒蔵の建物全体が調査できる事例は非常に少なく、今回のように工事影響範囲外のために未調査部分が存在したり、また既に破壊されている部分が多いため、酒蔵構造や醸造工程で解明できない点を含む調査事例は今後も出てくるであろう。そのような中で今回の調査で灘地域での酒蔵の理想形とも考えられる重ね蔵が、江戸時代末頃に築造されていたことが確認できたのは１つの成果と言えよう。

fig. 38
調査地遠景

10. 魚崎郷古酒蔵群（うおざきごうこさかぐらぐん）　第２次調査

１．はじめに　今回の調査は、酒蔵関連の調査として実施されたもので、神戸市内において５例目、魚崎郷内では２例目となる調査である。

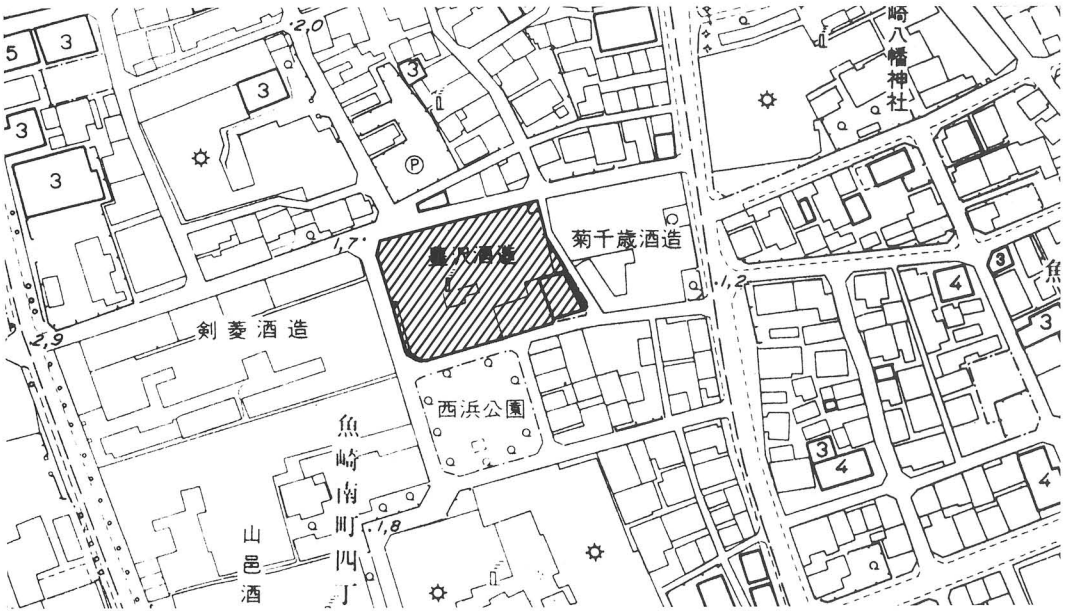


fig. 39
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要　Ｉ区は北東側の調査区である。第１面は「大蔵」築造時に伴う遺構面である。

Ｉ区

第１面　試掘調査時点では「大蔵」に相当する位置で礎石が14ヶ所存在していたが、解体終了後の調査時には確認できなかった。しかし、Ｉ区西半下層に根石が存在することがわかり、礎石の位置関係を追認することができた。根石はＩ区で計７ヵ所検出した。

礎石　礎石は下段に根石を４石程度据え、その上に大きめの石を１石置かれている。

石垣４　Ｉ区東半で検出した南北方向の石垣で北半が残存している。南半は「酒蔵２」築造時に抜き取られたものと思われる。東側に面を揃えており、「大蔵」の東壁にあたる。

地下室　Ｉ区東端で検出した。掘形は盛土直下より切り込まれている。煉瓦積みによるもので、東西長約５ｍ、深さ約１ｍである。煉瓦の法量から、築造は大正以前と思われる。

fig. 40　Ｉ・Ⅱ区全景

fig. 41　Ⅱ区石列区画・小竈１

Ⅱ区　　Ⅱ区の西半は「前蔵」が建っていた場所に当たり、東側は撹乱が著しい。「前蔵」には西から船場・洗い場・石炭置場・釜場などの施設があった。

第1面

釜場　　解体時にかなり撹乱されており、一部を残して構造は不明である。調査区南壁のボイラー室から続く部分付近には焚口があったようで、耐火煉瓦が多く出土した。一部弧状に巡る煉瓦が検出されており、これが釜を支える煉瓦の一部であった可能性がある。

また、同じ面で階段状に構築された煉瓦構造物を検出した。煉瓦は、内面に煤が著しく付着しており、煙道へ続く部分であったと思われる。時期は、使用されている煉瓦から、大正以前と思われる。さらに、掘形埋土は、焼土を非常に多く含み、それ以前の釜場を潰して造り直されたことがうかがえる。

煙道　　釜場で検出した、北西から南東方向に延びる煙道である。

調査区中央部の南東端は、94×116cmの方形に煉瓦を敷き煙突の基底部となる。底は煉瓦を中心が窪むように敷きつめ、煉瓦の下には周囲に四角く石を並べる。石の上には粘土が貼りつけられており、石の下は砂層を切り込んで土坑を掘り、茶褐色砂質土を充塡している。重量を受けとめるための工夫と思われる。

煙道部分は、煉瓦壁体のずれから改築されていたことが判明した。当初は、煙突部分から北西方向にのびて、約2.6mのところで北方向へ屈曲する煙道である。その後、煙突部分より約1.3mの所から壁面を造り直し、ほぼ直線状となる煙道となる。

使用されている煉瓦はＪＩＳ規格に合わないもので、大正年間の築造と考えられる。

第2面　　石垣や石列、不定形の落ち込みなどが検出された。

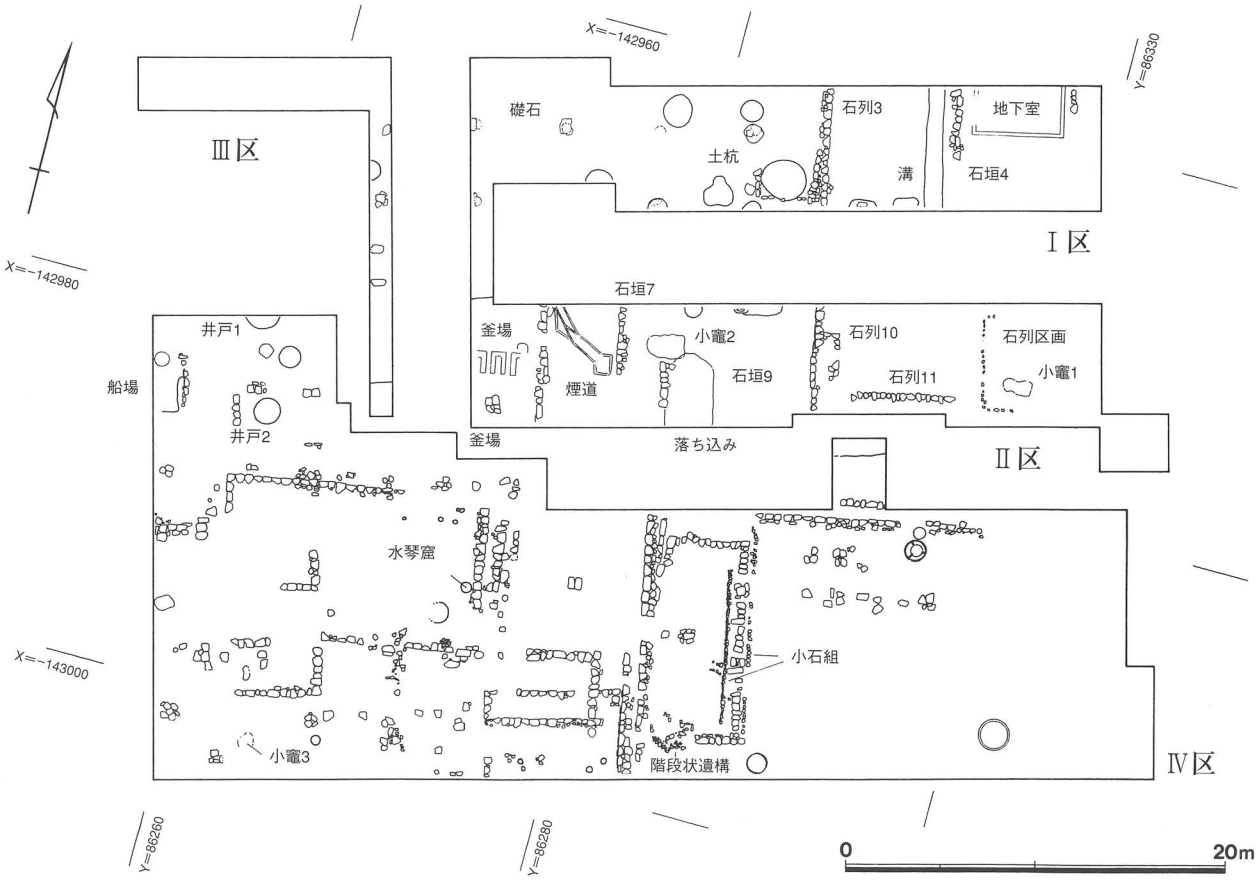


fig. 42　調査区平面図

fig. 43　Ⅱ区釜場

fig. 44　Ⅱ区小竈２

第３面　Ⅱ区東端で、南北長5.4ｍ、東西長約4.5ｍ分を検出した。10～30㎝大の亜角礫を使用し、

石列区画　方形に区画している。

小竈１　Ⅱ区東端の石列区画の東南隅に位置する。若干崩落しているが、長さ約２ｍ、幅約１ｍで、１基の燃焼室を設けた半地下式の竈である。

燃焼室の壁は黄色粘土を用いており、底部には「凹」形に組んだ石囲いの灰落としが設けられている。上端は、石を円形に並べる。東半は方形に石を組み、粘土を巻いている。

遺物は、染付・陶器・土師器・土錘が出土している。

小竈２　Ⅱ区西端で検出した。長さ210㎝、幅140㎝で、１基の燃焼室を設けた半地下式の竈である。構造は、小竈１と同様、西半が円形の燃焼室で東半が方形の焚口となっている。

燃焼室は10㎝ほどの礫を二、三段積み、粘土を巻く。底部は「凹」形の灰落としが設けられており、焚口の袖部分には丸瓦を縦に据えている。

Ⅲ区　北西側のＬ字状調査区である。東西方向の部分では撹乱のため遺構面は存在しない。

第１面　南北方向のトレンチでは、北半で礎石の根石を２ヵ所確認した。「大蔵」の礎石の一部

礎石　である。また、南端で落ちを確認した。「前蔵」南端の基礎によるものと思われる。

Ⅳ区　敷地の南半を占める調査区であるが撹乱が著しい。また、南東部分は遺構の密度が希薄であるが、当初から建物が存在しなかったのではないかと思われる。

第１面　Ⅳ区西北隅で検出した。「前蔵」の西端に位置するが、西側は調査区外のため不明である。

船場　東辺に２段積みの石垣12が存在する。下段は不均等な石を用いているが、上段は側面が長方形に近い石を用いている。底は南から階段状に落ち込んでいき、最深部は皿状に窪んだ円形のコンクリートが存在する。

第２面　Ⅳ区北西隅で検出した井戸である。掘形は直径約３ｍで、酒造で用いた樽を逆さに２段

井戸１　重ねて井戸枠としている。樽の直径は116㎝、高さ110㎝で、厚さ５㎝程度、幅20～30㎝の板材を組み合わせている。下層はやや粗い砂になっており、標高－20㎝で湧水点となる。瓦・染付片などが出土している。

井戸２　井戸１の南側に位置する。掘形規模、使用している樽などは井戸１に類似する。検出面は井戸１より下層である。石垣13が東側に位置しており、関連したものと思われる。

小竈３　東西幅約２ｍの大きさで検出したが、南側は撹乱により破壊されており不明である。

西半に炉があり、この部分は粘土帯を東西に２列設置し、底部には平らな石を敷いてい

fig. 45　Ⅳ区井戸１

fig. 46　Ⅳ区水琴窟

る。東側は南北方向に石を並べる。

水琴窟　上部は撹乱で削平されている。掘形の直径約60～80㎝、深さ約50㎝を測る。小円礫の上に甕を逆さに据え、その上部に漆喰を浅い鉢状にして水を受ける構造である。内部には、平瓦が置かれていた。漆喰は、東側は石列20の上端から、西側は壁面として据えた石の下端にかけて施されている。

屋敷に伴うものと考えられる。時期は江戸末あるいは明治期と思われる。

第３面　石列28とほぼ重なる位置に２列存在する。西側の石組は畑の上に小円礫で２段に積まれ

小石組　ており、所々さらに１石を積んでいる。

東側の石組みは４～５段に同様の小円礫を積んでおり、その上端は石列28にほぼ等しくなる。西面する石組である。

３．ま　と　め

以上のように、今回の調査では撹乱が多かったものの、現行の建物に先行する建物基礎や竈、井戸などの施設を検出することができた。調査結果から面を大まかに捉えると、①「大蔵」「前蔵」築造時の面（大正以降）②これらに先行する建物の面（明治）③当該地での酒造の始まりと思われる面（江戸後期）④それ以前の畑の面となる。

第１面では、釜場と船場を確認した。釜場は、石炭から重油へと燃料が変化することに伴い、釜の構造も当然変化を受けており、その結果、同じ場所で何回かの改築がされていたと思われる。ただし、煙道とは直接のつながりを確認することはできていない。

Ⅰ区第２面で確認した土坑や石列は、本来「大蔵」には施設がないため、前身の建物に付随する施設と考えられる。Ⅳ区では石列・石垣を多く検出したが、軸方向を違える石列群が存在しており、一連の建物群としてとらえられる。しかし、酒蔵に関連するような施設を検出にはいたらず、各々の建物に対する位置づけはできていない。

第３面では、特にⅡ区において竈を２基検出できた。構造的には伊丹郷町で検出されている竈と同様である。燃焼室は１基であるが、酒造用竈と思われる。

最終面は畑である。場所によって異なるが、東西方向および南北方向の畝を検出した。

詳細にみれば、現代の建物は勿論、先行する建物群についても何度か改修・改築がなされており、細かく時期を分類することも可能と思われる。しかし、遺物の検討と各遺構の関連付けが不十分なため、時期を含めて大まかな把握にとどめておきたい。

11. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　第30次調査

1．はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山地南麓を流れる住吉川、石屋川等の河川により形成された扇状地上に立地する、弥生時代中期～中世にかけての複合遺跡である。

周辺においては、住吉東古墳をはじめとする古墳群や奈良時代の掘立柱建物などが発見され、現在までに29次にわたる調査が実施されている。

今回の調査は、マンション建設に伴うもので、遺跡に隣接することから試掘調査を実施したところ遺構・遺物が確認されたため、実施されたものである。

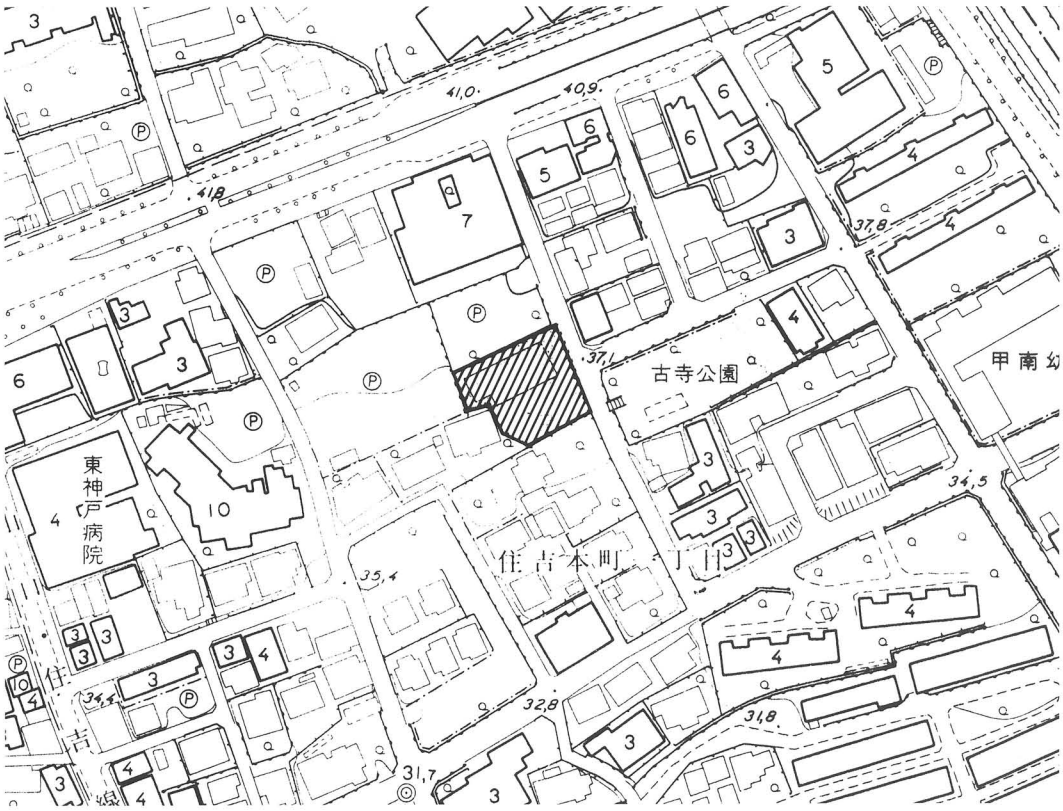


fig. 47
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

調査区の層序は、表土、盛土の下に、厚い洪水砂が堆積している。この下に、旧耕土、中世の包含層である淡灰色土を挟んで、第1遺構面のベースとなる褐黄色土に至る。

この下に、何層かの砂質の間層を挟んで第2遺構面のベースとなる黄褐色砂となり、さらに何層かの砂質の間層を挟んで第3遺構面のベースとなる暗灰色シルトに至る。この層には遺物を僅かに含むが、その下に堆積する褐黄色砂以下には、人頭大以上の転石が含まれるボルダー層となり、遺構・遺物は確認されなかった。

第1遺構面

調査区の南東側で確認された遺構面である。北側は削平のため存在しない。

東壁にそって石組遺構が2箇所検出された。

石組み1

調査区東壁に沿って検出された石列である。東側に礫が敷かれているようであるが、調査区外のため詳細は不明である。

石組み2

調査区北東部隅において検出された石列である。30～60cmほどの面を持つ石を使い、並べている。

第２遺構面　黄褐色砂をベースとする遺構面である。調査区の南東隅で流路を１条、また南部においてピット群が存在し、掘立柱建物を１棟検出した。

建物１　調査区中央部において検出された東西２間、南北２間の掘立柱建物である。総柱で柱間は、東西2.8m、南北2.0mある。柱穴の残りは、非常に良く深さ50～70cmある。

出土遺物が少量で時期は不明である。

流路　調査区の南東隅を北東から南西にむかって流れる自然流路で深さ80cmを測る。

第３遺構面　第２遺構面を覆う乳白色の洪水砂を除去した下層の暗灰黒色シルトにおいて溝１条、土石流状の砂溜まりを検出した。

ＳＤ11　調査区南部を南北にはしる、幅170cm、深さ10cmほどの溝である。

ボルダー層　第３遺構面のベースである暗灰黒色シルトにおいても僅かに遺物が含まれたためさらに下層の褐黄色砂まで堀り下げた。以下の堆積は、人頭大～それ以上の転石を含むボルダー層となる。

３．ま　と　め

従来、住吉宮町遺跡の範囲は、当該地よりも、やや南で収まると考えられていた。

今回の調査においては、中世の時期を中心とする遺物や遺構などが検出されており、遺構はさらに調査区外にのびている。

住吉宮町遺跡が今まで周知されていたよりもさらに北へ広がることが確認された。

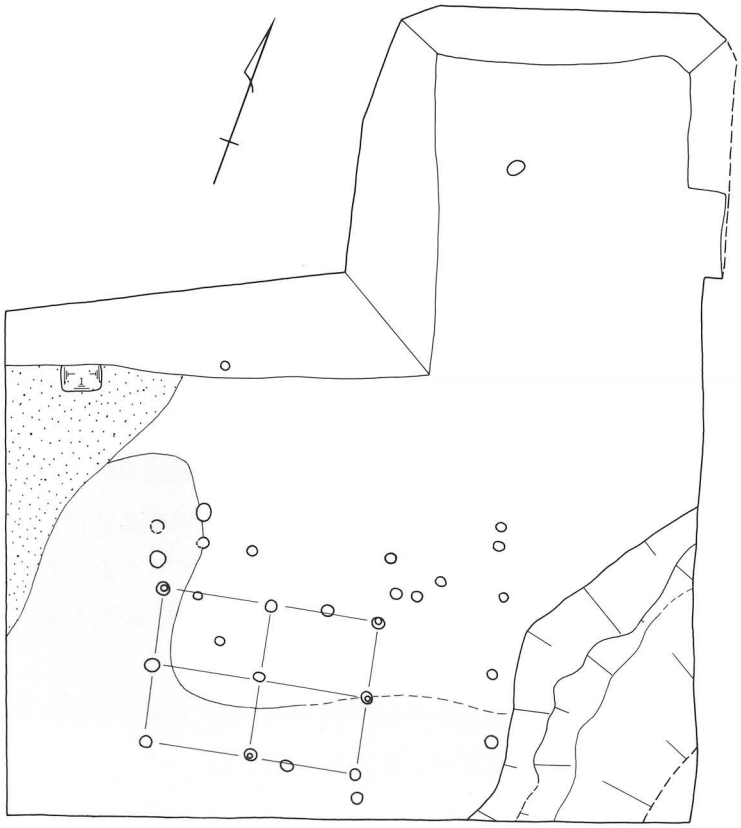


fig. 48
第２遺構面平面図

0　5m

12. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　第31次調査

1．はじめに　住吉宮町遺跡は、六甲山麓から南に流れる住吉川と石屋川によって形成された扇状地に立地し、標高約20mのところに位置している、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。昭和60年に発見されて以来、これまでに30回に及ぶ調査が行われている。

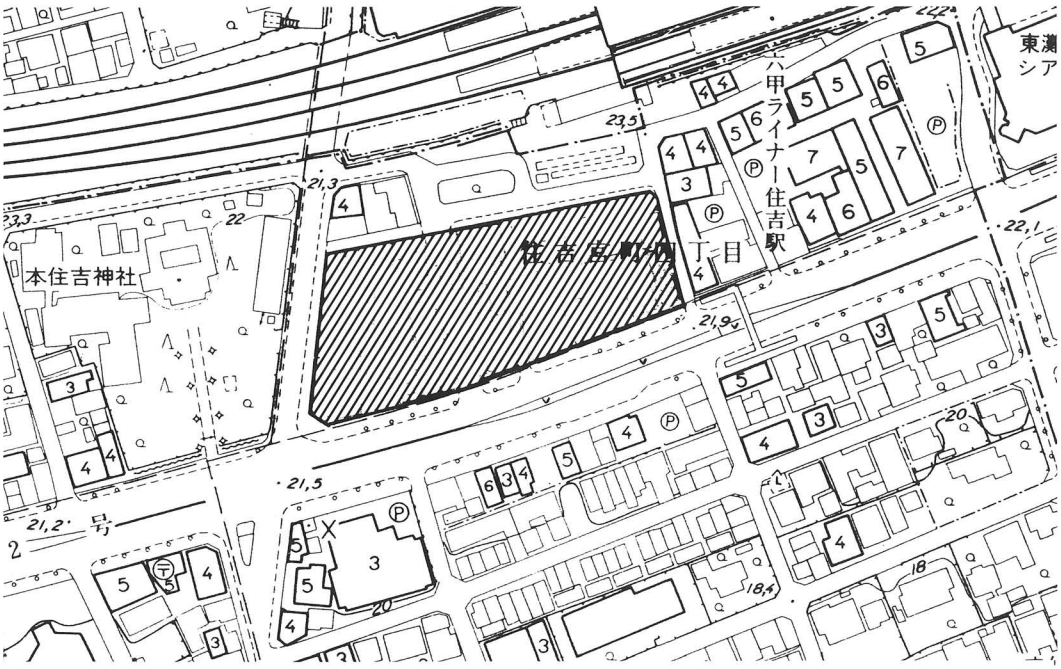


fig. 49
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　今回の調査では4時期の遺構面を検出した。

第1遺構面　鎌倉～室町時代及び、近世の遺構面である。後世の建物基礎により西側及び南側の大部分は削平を受けている。井戸、土坑、落ち込み状遺構、溝、掘立柱建物の柱穴と考えられるピット多数を検出している。

第2遺構面　奈良時代の遺構面である。調査区の北東端（Ⅳ区）にのみ遺構面が存在しており、遺構の中心はこれより東側に広がっているものと思われる。検出遺構は、ピット、土坑、不定形の落ち込み等である。

第3遺構面　古墳時代後期の遺構面である。古墳10基、石棺墓9基、埋設甕1基を確認した。古墳は調査区東半に隣接して、石棺墓7基は調査区西半に一定の間隔でほぼ主軸をそろえてみつかっている。出土遺物から古墳は東端の1号墳が最も古く、西側ほど築造時期が新しくなると推定される。

1号墳　調査区東端に位置する2段築成の方墳で、今回の調査で見つかった古墳の中では最も大きく、時期も5世紀後半と最も古い。墳丘は一辺14m、下段の高さ70cm、上段の残存高70cmをはかり、その周りには一辺17.5m、墳丘裾からの幅2m、深さ70cmの周濠が巡っている。墳丘斜面には、葺石として直径10～30cmの河原石が敷きつめられている。下段と上段との境目には幅60cmのテラス部分があり、円筒埴輪がたてられている。削平を受けているため埋葬施設は確認していないが、上段斜面にも転落した円筒埴輪片が確認されるため墳頂部にも埴輪が並べられていたと考えられる。

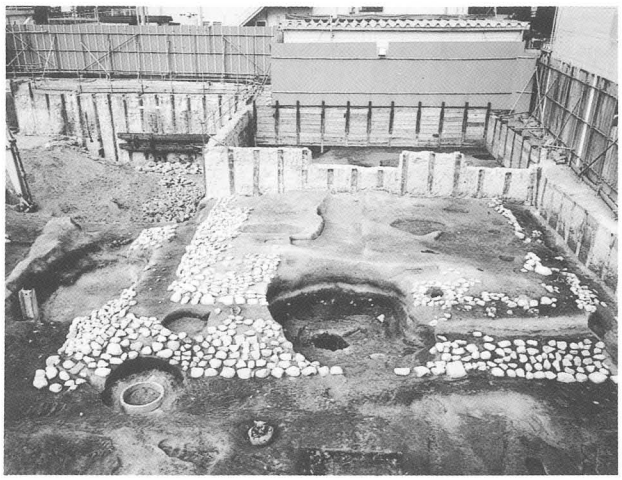


fig. 50　1号墳

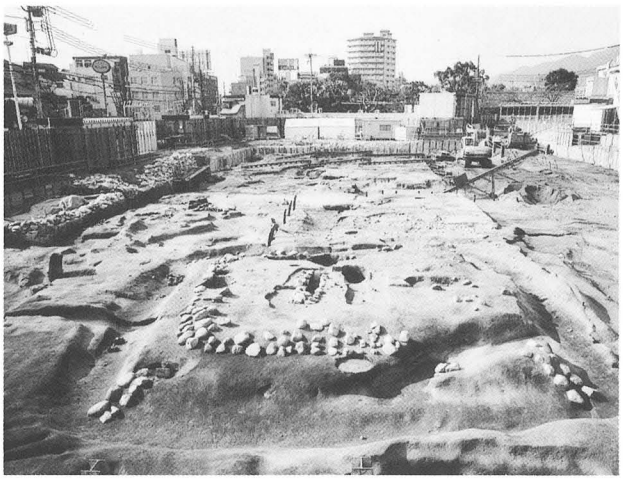


fig. 51　3号墳

2号墳　調査区北東端に位置する5世紀後半の方墳である。古墳の一部は調査区外であるが、一辺10m、残存高50cmの規模で、一辺12m、墳丘裾から幅1m、深さ40cmの周濠が巡る。葺石はなく、埴輪も見つかっていない。

3号墳　調査区東半のほぼ中央に位置する5世紀末～6世紀初頭の方墳である。墳丘は一辺11.5m、残存高1.1mの規模で、一辺12.5m、墳丘裾から幅1.3m、深さ50cmの周濠が巡る。変則的な2段築成をみせており、北半分は1段、南半分が2段の墳丘である。埴輪はなく葺石は四隅と南半分の斜面の上段にのみ施されている。墳頂には北側に木棺（長さ2.5m以上×幅60cm、深さ15cm）、南側に河原石組みの石棺（長さ2.2m×幅40cm、深さ27cm）が、東西方向に並んで据えられている。鉄刀が1振、棺と平行して埋納されている。

4号墳　調査区東半の南端に位置する6世紀前半の古墳である。墳丘は東西11m、南北4m以上残存高80cmの規模で、一辺12m、墳丘裾から幅1.5m、深さ95cmの周濠が巡る。墳頂部には、約2.5mおきに円筒埴輪が立てられている。

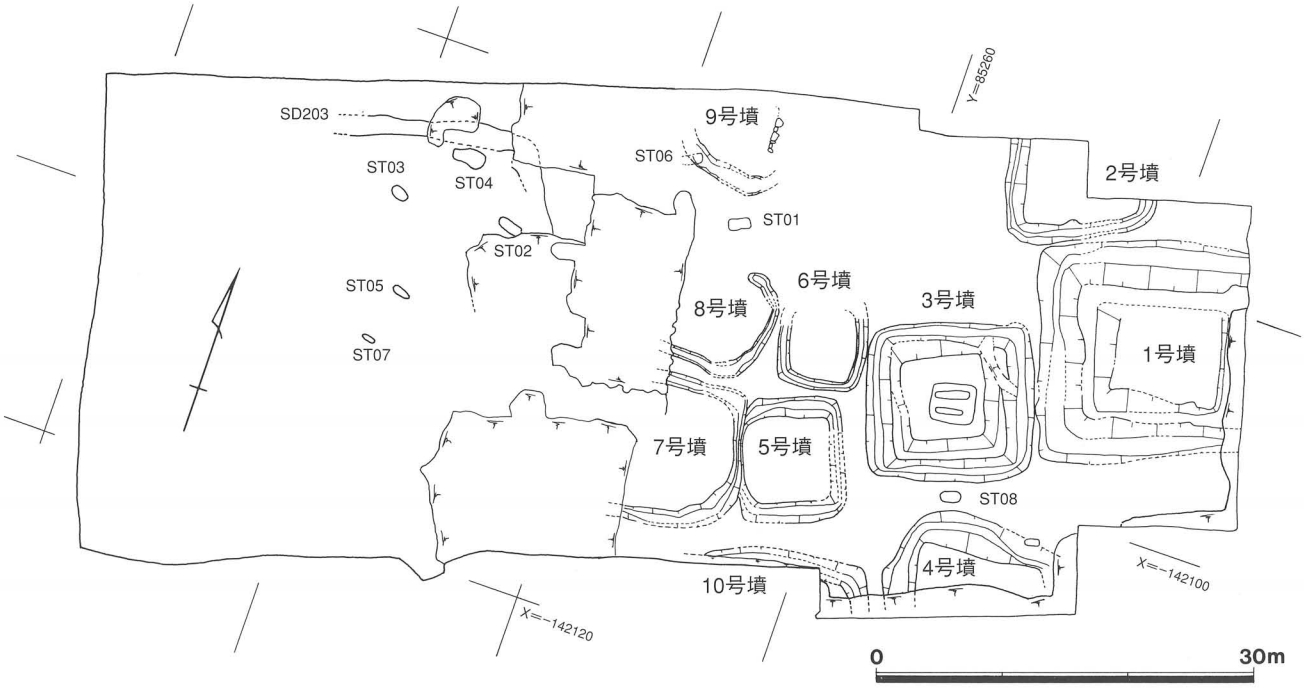


fig. 52　第3遺構面平面図

5号墳　調査区中央部南側に位置する6世紀前半の古墳である。墳丘は削平を受けており、周濠のみ確認できる。周濠は南北10m、東西8.5m、幅1.7m、深さ45cmを測る。

6号墳　5号墳の北隣りに位置する6世紀前半の古墳である。周濠の規模は、一辺7m、幅80cm、深さ20cmである。

7号墳　5号墳と切り合い関係にある6世紀後半の古墳である。周濠のみ確認できる。周濠の規模は、一辺12.3m、幅1.2～1.8m、深さ25cmである。

8号墳　7号墳の北隣りに位置する6世紀後半の古墳である。周濠の規模は一辺7m、幅50～100cm、深さ20cmである。埋設された須恵器の大甕が出土している。

9号墳　調査区中央部北端に位置するが、墳丘は削平されている。埋葬施設である横穴式石室のみ残存。石室はほぼ磁北方向（N10°W）に向いて造られており、玄室の東壁と、羨道の東壁の一部のみ確認できる。

なお石室の南側に、検出長7m、幅1.5mの周濠と考えられる溝を確認しており、この溝の形より墳形は円墳であると推定できる。6世紀前半頃のものと考えられる。

10号墳　調査区中央部南端に位置し、北側周濠の一部のみを確認している。現状での規模は、一辺12m、幅1.8mである。6世紀後半の古墳である。

石棺墓　調査区西半を中心に9基の石棺墓を確認した。出土遺物が少ないので正確な時期は不明であるが、他の古墳同様5世紀後半～6世紀前半のものであると考えられる。なお石棺墓8・9は他のものとは方向が異なり、共に大変小型であることから、他のものと属性が異なると考えられる。特に石棺墓8は控えの石を積んで造られており、また副葬品に鉄製品を確認している。

	縦（cm）	幅（cm）	深さ（cm）	主軸方向	備　　考
石棺墓1	104	35	30	N85°E	
石棺墓2	150	25～30	28	N61°W	
石棺墓3	60	13	24	N49°W	
石棺墓4	165	25	24	N80°W	鉄製品出土
石棺墓5	120～	20～30	——	N57°W	歯残存
石棺墓6	60～	23	24	N66°E	
石棺墓7	80	25～30	24	N60°W	
石棺墓8	75	25	33	N71°E	鉄製品・須恵器の高杯出土
石棺墓9	57	20	20	N64°E	

検出石棺墓一覧表

ＳＸ201　1号墳の南側で70cm×55cm、深さ40cmの土坑の中に、口縁部を北に向けて寝かされた状態の須恵器の大甕が出土している。時期は1号墳より新しい。

第4遺構面　弥生時代後期の遺構面である。遺構は調査区東半を中心に広がっており、西に向かって緩やかに傾斜している。検出された遺構は竪穴住居6棟、土坑26基、溝3条、落ち込み状遺構、土器溜り、河道である。

ＳＢ401　調査区東側のほぼ中央部分に位置する8.5m×7.5m、南壁がやや広がる台形に近い形の住居である。検出面からの深さは約60cm、ベッド状遺構を持ち主柱は4本である。

ＳＢ404　調査区東側、ＳＢ401の南側に位置する一辺4～5mの六角形の住居である。北西部はＳＢ406に切られている。検出面からの深さは40cm、ベッド状遺構を持ち、周壁溝は南東側のみ確認できる。主柱穴と考えられるピットを5基検出した他8基のピット、3基の土坑を確認した。なお鉄斧などの鉄製品が住居の北西より数点出土している。

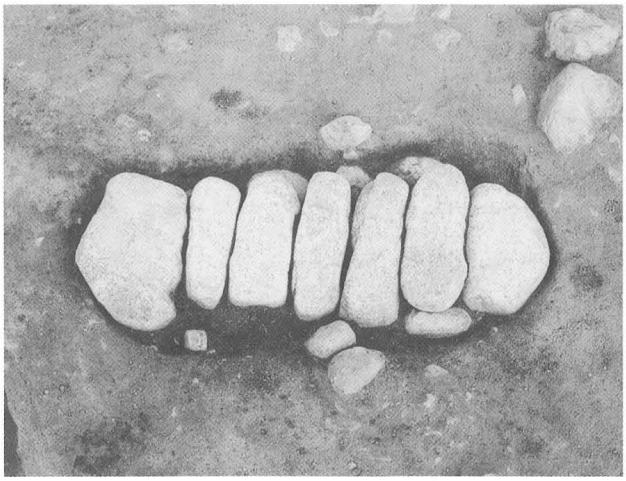


fig. 53　石棺墓 7

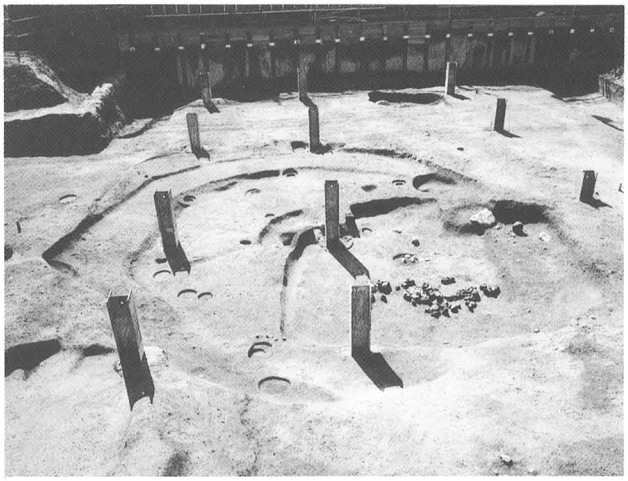


fig. 54　ＳＢ404・406

3．ま　と　め

今回の調査で特筆すべきことは、以下の３点である。

まず第１点は、弥生時代後期の集落の様子を広い範囲で確認することができた点である。川に近い微高地に住居をつくり、各々貯蔵穴と考えられる土坑を備えている。また、川辺では、水辺の祭祀の跡と考えられる痕跡も確認している。

第２点は、住吉宮町遺跡の古墳群を広範に確認できたことである。今回の調査区内では東半は古墳、西半は石棺という区域分けが見受けられる。また10基発見された古墳の中で、最も大きい１号墳を最初に築造し、これの西側に次々に古墳を築造している様子が確認できる。また１号墳の北側周濠内より１頭分の馬の歯が出土しており、一部顎の骨も残っていることから、頭部を切断して供献したものと思われる。このような馬の殉殺例は、北部九州、大阪の北河内周辺、長野県伊那谷周辺に多くみられるが、近畿地方では少なく、兵庫県内では初めての発見である。

第３点は、住吉宮町遺跡のこれまでの調査であまり見つかっていない鎌倉～室町時代の遺構を確認したことである。今回は建物跡等は検出していないが、井戸や土坑などを確認しており、今後周辺の調査で集落のひろがりを確認できると思われる。

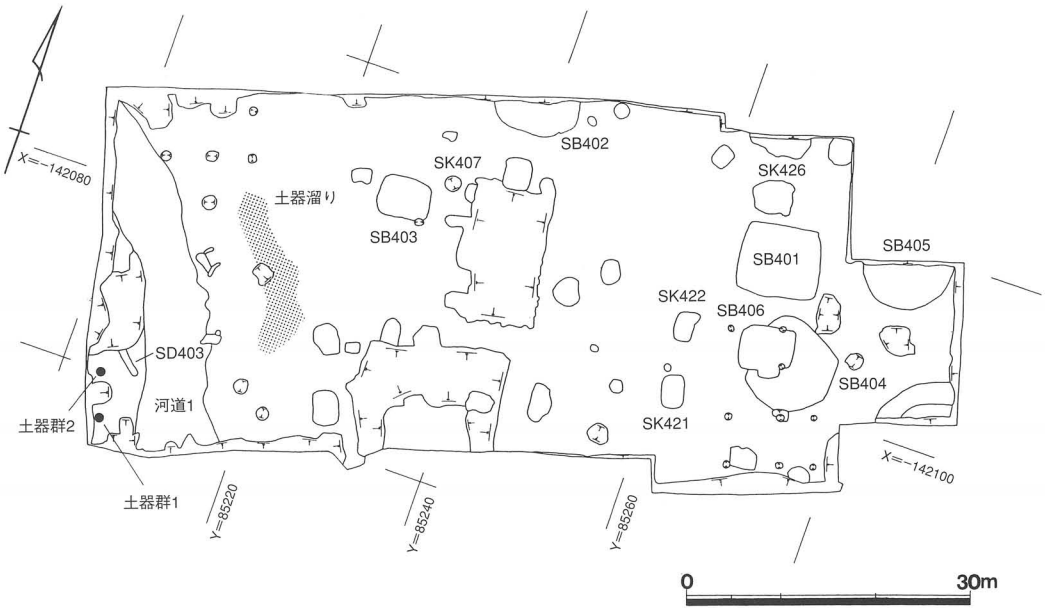


fig. 55
第４遺構面平面図

13. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　第33次調査

1．はじめに　住吉宮町遺跡は住吉川が形成した扇状地上の右岸側に立地する遺跡で、標高は約20ｍである。六甲山系南麓は市街化が早くから進行し、現在でも埋蔵文化財の存在がよく分かっていないケースがある。住吉宮町遺跡の発見も昭和60年のことであり、周知の遺跡となってからまだ年月が浅い。しかし市街地の再開発やＪＲ住吉駅舎の建替に伴う発掘調査、阪神・淡路大震災の復興に伴う発掘調査が進み、今回で33回目の調査となった。

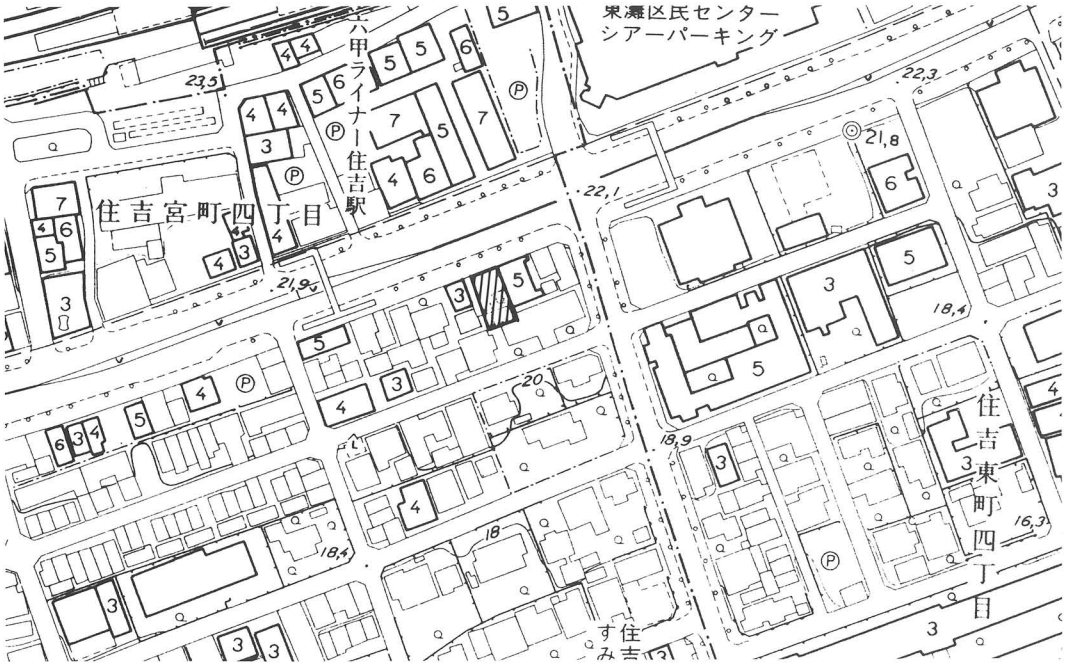


fig. 56
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　調査範囲は東西約６ｍ、南北約２ｍのトレンチが３ヶ所である。トレンチは南から順に第１～３トレンチとそれぞれ呼称したが、第２トレンチの中央は大きな撹乱で破壊されていたため東西両端のそれぞれ約１ｍ分しか調査できなかった。

基本層序　基本層序は上から近現代の盛土、宅地化以前の耕作土・数層の旧耕作土、遺物包含層である灰褐色土・暗茶色砂質土・黒茶色粘質土の各層、基盤層である暗灰褐色粗砂と続く。灰褐色土上が奈良時代頃、黒茶色砂質土上が古墳時代後期、暗灰褐色粗砂上が弥生時代後期の遺構面と考えられる。

第１遺構面　奈良時代頃の遺構面で、土坑１基、旧河道１条、ピット２基を検出した。

旧河道　第１トレンチ南東角で検出した浅い旧河道の北西岸の部分である。断面は皿状で深さは約40cmまで確認したが、調査区外に続くため規模は不明である。底には流水によって浸食された凹凸が多数存在した。埋土は上部が黄褐色土、下部が灰褐色砂である。遺物は土師器片・須恵器片が出土した。

第２遺構面　古墳時代後期の遺構面で、柱列１条、落ち込み２カ所、ピット４基、炭と灰の集中部１カ所を検出したが、第３トレンチでは黒茶色砂質土の上に洪水層である淡灰茶色礫混じり砂が堆積し、その上面が遺構面であった。

ＳＡ201　第２トレンチ西側で検出した掘立柱列である。柱間１間分のみの確認で、調査範囲が狭

いため建物の角である可能性も残るがここでは単に柱列として取り扱った。柱列の方向はほぼ東西方向で、柱間は約1.8mである。柱穴の掘形は直径約50～60cmの円形と楕円形、柱痕は直径約10cm、深さは約15cmである。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。

炭灰集中部　第2トレンチ西端で直径約50cmの範囲に炭と灰が集中する部分を検出した。遺構の埋土中に混和するのではなく、遺構面上に集中するため焚き火跡の可能性が高い。

第3遺構面　弥生時代後期の遺構面で、土坑1基、ピット5基を検出した。

ＳＫ301　第3トレンチ西端で検出した楕円形の土坑である。西端が調査区外に続くが、長径約110cm、短径約60cm、深さ約55cmで、埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器片が出土した。

3．ま と め

住吉宮町遺跡は埋没古墳群の存在など通常の集落遺跡にはない特殊性を有しているが、市街地に位置する遺跡であるため震災後急に調査事例が増加し、新たな調査成果が蓄積されていっている。今回の発掘調査では奈良時代頃・古墳時代後期・弥生時代後期の合計3面の遺構面を確認し、土坑・掘立柱列・ピット等を検出した。西側至近地の第25次調査では中世の遺構面を確認しているが、今回は確認できなかった。遺構面は後世の耕作によって削られてしまった可能性が高い。調査面積が狭いため、検出した掘立柱列やピットは建物を構成するかどうか不明である。しかし集落の居住域であることは確実であり、調査地点周辺は市街地の駅前である本遺跡内でもまだ大規模建造物が少ない部分であるため、地下には遺構・遺物が良好な状態で残されていると判断される。

調査地点北側に分布する古墳群の広がりは今回の調査でも確認できなかった。縄文海進時の埋没海蝕崖が国道2号線に沿った位置に想定されているが、古墳群はこの埋没海蝕崖より北側に造営されていたと判断される。

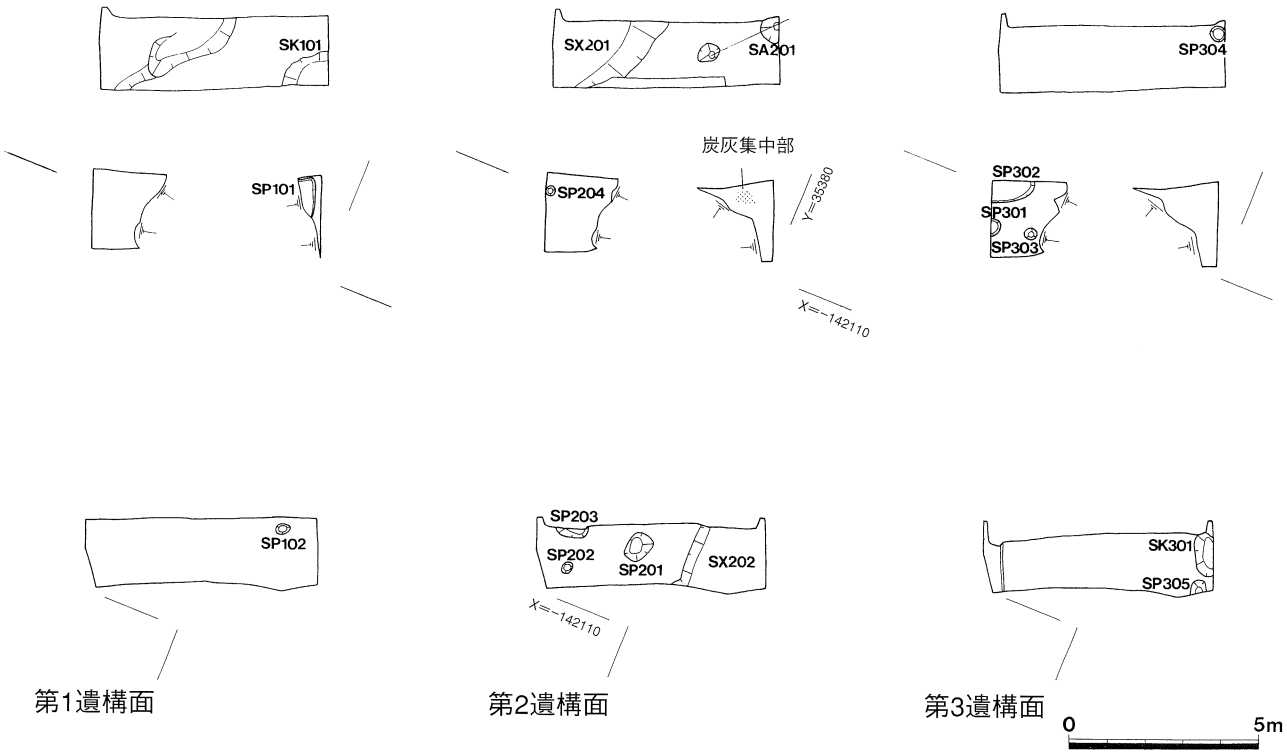


fig. 57　調査区平面図

14. 郡家遺跡城ノ前地区　第39次調査

1．はじめに　郡家遺跡は、天神川の沖積作用によって形成された扇状地上に位置する、弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。その範囲は御影町郡家、御影、御影中町を中心に、東西約800m、南北500mに及ぶ。

fig. 58
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　今回の調査においては、土坑2基、ピット27基、不明遺構2ヶ所を確認した。遺構から出土した遺物は弥生時代Ⅴ様式土器を中心に一部古墳時代のものが混じる。

ＳＫ01　調査区の南西で確認された不整楕円形の土坑である。長辺2.0m、短辺0.6m、深さ45cmを測る。埋土から弥生時代Ⅴ様式の土器だけがまとまって出土しており、遺構の時期を示すと考えられる。機能は不明である。

ＳＫ02　ＳＫ02は調査区の北西隅で確認された。大半は調査区外のため、形状や規模は不明であるが、検出された範囲では径1.0m、深さ10cmを測る。古墳時代と弥生時代後期の土器が混じって出土している。

ピット　検出されたピットからは遺物が出土したものもあるが、微量のため混入か一次堆積時のものか判断し得ない。いずれも弥生時代Ⅴ様式の土器である。その配列は不規則で、建物などを構成しない。

ＳＸ01　調査区の南側で検出された。検出された範囲で径7.7m、深さ50cmを測る。土石流で削られた住居址の可能性も考えられる。

土石流　北側に源流をもち調査区の中央を斜めに横切る形で南西に向かって流れる。人頭～拳大を中心に大きいものはひとかかえ以上もある巨礫の群集であり、黒褐色砂をマトリックスとする。遺物がほとんど出土しなかったが、層序から弥生時代後期あるいはそれ以前と考えられる。

さらに遺構面以下の堆積状況を確認するために調査区東端を断ち割り調査を行った。遺構面より下層には、約１ｍ以上の深さで花崗岩細粒を多く含むバイラン土の堆積がみられ遺構等は確認されなかった。

３．ま と め

今回の調査で確認できた遺構面は１面で、その出土遺物の時期は古墳時代後期と弥生時代後期である。近接する第８次調査地において確認された鎌倉～平安時代の遺構面は既に近・現代の耕作によって削平され消失したと考えられる。

今回検出したような土石流堆積層は、郡家遺跡の過去の調査においても多く確認されている。弥生時代後期前後、六甲山を源流とする土石流災害が頻繁におこったことが窺えるが本調査区でみた土石流堆積層はそのレンズ状の断面構造は小さくまとまった規模で、舌状の流れの末端あるいは、本流から派生した小さい支流を見ているものと考えられる。

検出された遺構は、明確に機能を示すものはないが、堆積過程の複雑さが遺構検出を困難にしたものか、もともと遺構の希薄な地点なのか容易に判別できない。本調査区の北隣でも過去に調査がなされ、同様の不明瞭な遺構を検出しており、北から南西に向かって地層の流れ出し的な作用が働いていた可能性も考えられる。

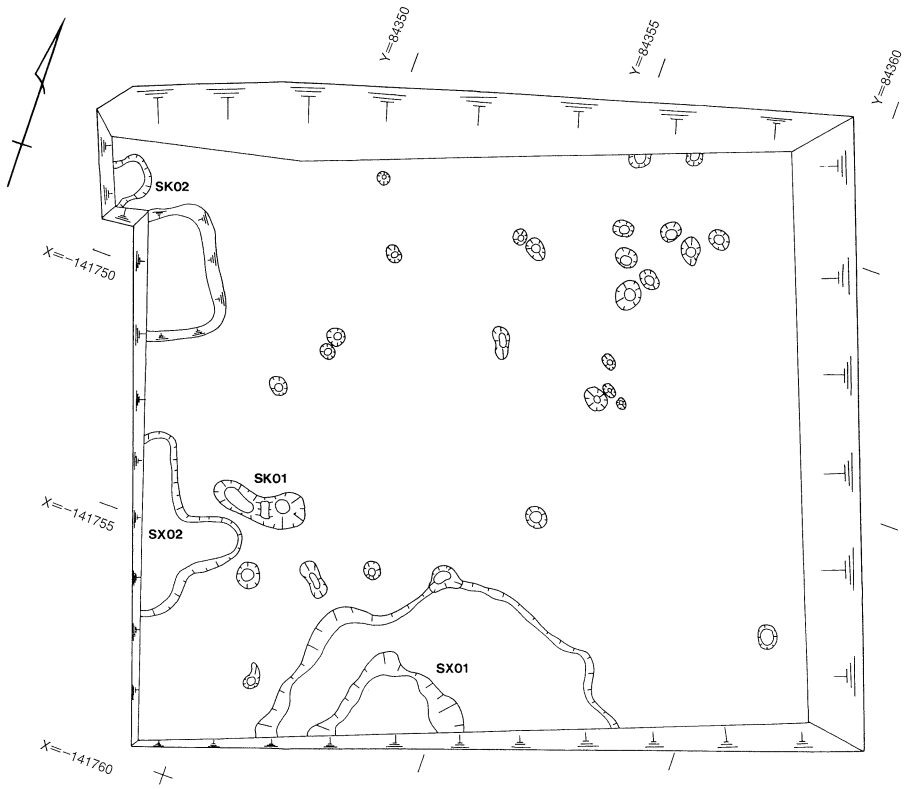


fig. 59
調査区平面図

0　10m

15. 郡家遺跡城ノ前地区　第40次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、石屋川と住吉川によって形成された複合扇状地上に立地する、縄文時代から中世にかけての遺跡である。城之前地区では、弥生時代後期の周溝墓や土器棺墓、弥生時代後期から古墳時代初頭と、古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居や掘立柱建物が多数検出された。また、中世の掘立柱建物や溝などの遺構も確認されている。

今回の調査地は、標高約40mの北東から南西への緩斜面上に立地する。現況地盤は、西側の道路面に対して、約2mの比高差がある。

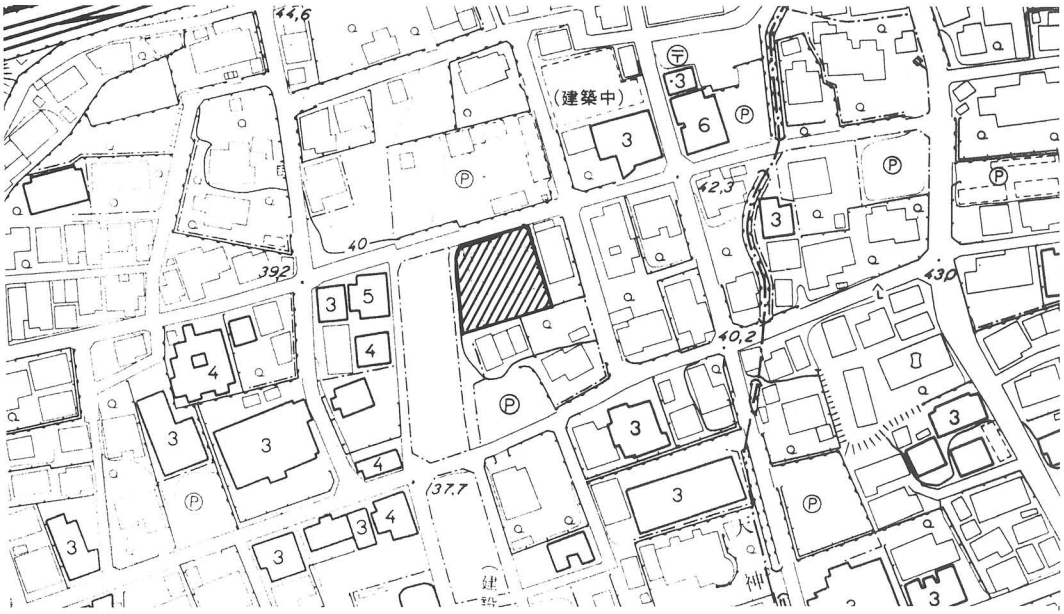


fig. 60
調査地位置図
1：2,500

2. 調査の概要

第1遺構面

流路1

調査区の大半を占める流路1を検出した。南北方向の大きな流れであり、その土量は膨大である。東肩の一部は検出できたものの、西側は調査区外になるため全体の規模は不明である。埋土は何層かに分層可能であるが、大きくは2層にわかれる。上層は褐色砂で、礫層を挟んで下層は黄褐色砂となる。礫層はある程度面的に広がるようである。礫間には隙間があり、砂が充填していなかった。上層・下層ともあまり時間差を置かず、流れる方向を変えつつ、洪水で一気に堆積したものと思われる。

遺物は弥生時代から室町時代までのものが主体であり、須恵器甕と片口鉢・土師器皿・瓦器椀などのほか、瓦・すり鉢がごく僅かに混在して出土している。層位と出土遺物から、近世以降と判断してよいものと思われる。

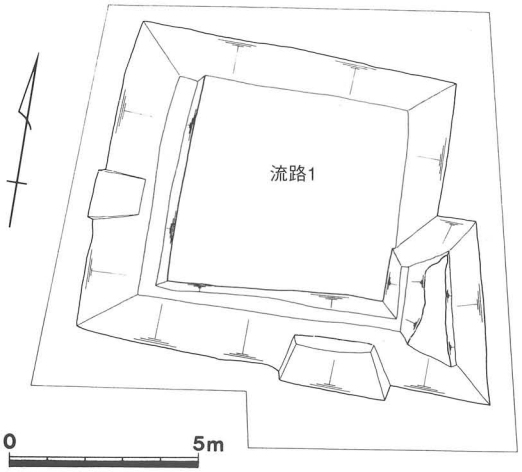


fig. 61　調査区平面図

調査区の南壁沿いと西壁沿いにトレンチを設定し、工事影響深度の現地表下3mま

で掘削したが、依然流路の堆積状況を示しており、底面の検出には至らなかった。

第2遺構面　以下の遺構面は流路1に大きく削平されており、調査区南東隅でのみ確認できた。第2遺構面は、後述の流路2の最終埋土と思われる褐色砂上面である。

遺構は、土坑2基と落ち込みを検出した。埋土はいずれも淡黄褐色極細砂であるが、遺物は出土しなかった。包含層からは、須恵器・土師器・瓦器が出土している。

ＳＫ01　東側は調査区外のため規模は不明であるが、南北で約1ｍ15cmを測る土坑である。深さは約20cmである。

ＳＫ02　東側は調査区外のため規模は不明であるが、南北で約80cmを測る土坑である。深さは約15cmである。2段に掘り込まれており、南側がピット状に深くなる。

ＳＸ01　不定形の落ち込みで、南側は調査区外のため不明であるが、南北長で約2ｍ65cmを測る。深さ約20cmである。

第3遺構面　黄褐色砂を埋土とする南北方向の流路2を検出した。ほぼ西肩を検出しているものと思

流路2　われるが、幾分かは流路1により削平を受けている。斜面部にはベース層起源の褐色砂質土が堆積しており、ある程度掘削から時間がたった後、洪水等で一気に埋没したものと思われる。幅や深さは東側が調査区外になるため不明であるが、検出面での最大幅は約1ｍ80cm、最大の深さは約1ｍ30cmである。埋土より、須恵器・土師器・瓦器が出土している。

第4遺構面　流路2の西肩と流路1に挟まれた褐色砂上面で検出した。黒褐色砂質土の遺物包含層からは、古墳時代後期と思われる遺物が出土している。遺構は、ピット3基と細い溝状の土坑を検出した。

ＳＫ03　現存長約90cm、幅約30cm、深さ約5cmの溝状土坑である。埋土は黒褐色砂質土で、土師器小片が出土している。

3．ま と め

今回の調査では、古墳時代後期と中世の遺構、そして近世以降の流路を確認した。

調査区の大半は流路1で、堆積状況は第34次調査地と同様である。それ以前の遺物包含層・遺構面を大きく削平しており、土量と堆積状況などから考えると、周辺に相当な災害を及ぼしたものと思われる。

流路2については、第30次調査地第2遺構面で検出された中世の流路と同一である可能性がある。その他、僅かではあるが、古墳時代の遺物包含層・遺構を確認できた。上層の中世遺構とともに、東方に遺跡が広がることを予想させるものである。

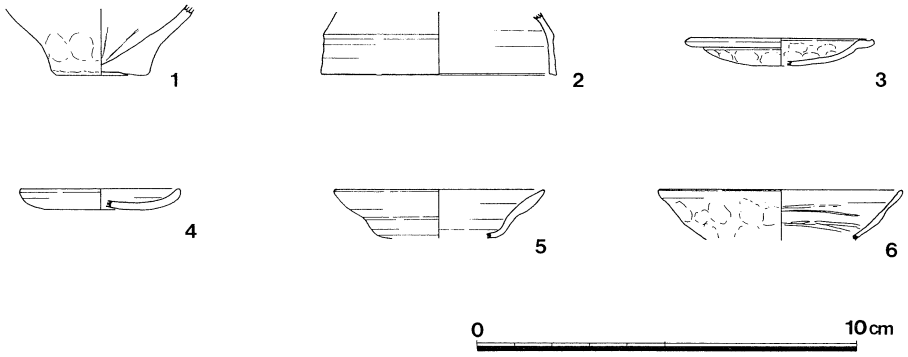


fig. 62
出土遺物実測図

1．弥生土器　2．須恵器　3～5．土師器　6．瓦器

16. 郡家遺跡大蔵地区　第７次調査

１．はじめに

郡家遺跡は、六甲山麓から南に流れる住吉川と石屋川によって形成された扇状地に立地する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。

当遺跡の大蔵地区は、昭和54年の第１次調査で奈良時代の掘立柱建物を検出したことにより、菟原郡衙との関連で広く知られるようになった。今回の調査は、大蔵地区の第７次調査にあたる。

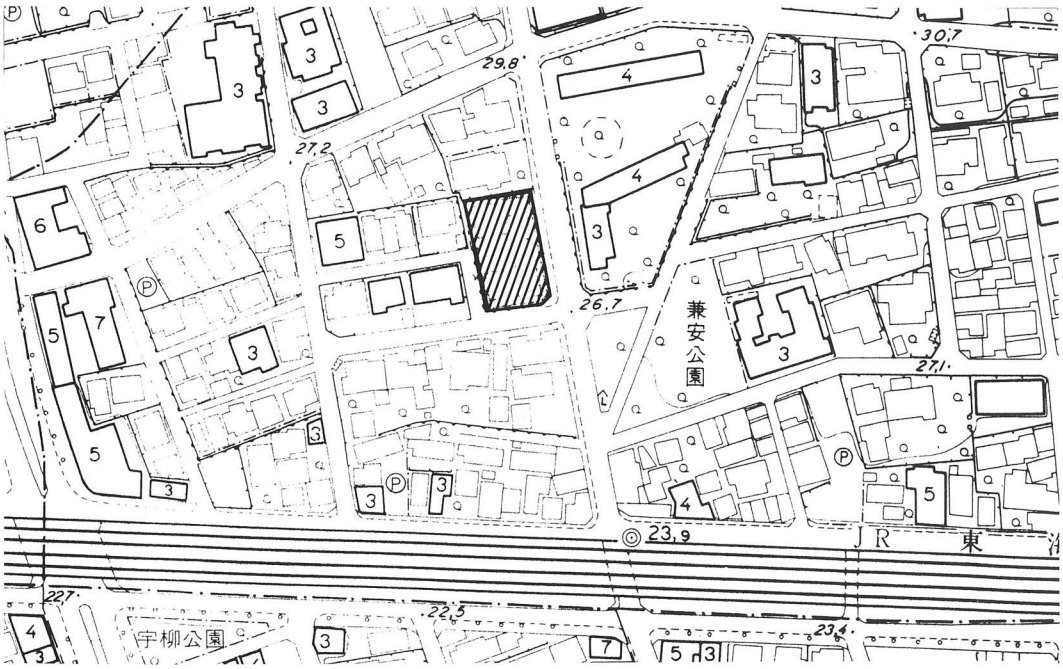


fig. 63
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

基本層序　基本的な層序は、現地表から約150cmが現代の盛土で、その下が近世～近代の旧耕土層となっている。さらに下には古墳時代～弥生時代の遺物を包含する暗茶褐色細砂層、褐灰色粗砂混じり中砂層と続き、褐色粗砂層の地山となる。この地山は自然の洪水堆積層である。第１遺構面は暗茶褐色細砂層の上面、第２遺構面は褐灰色粗砂混じり中砂層の上面、第３遺構面は地山上面で検出した。

第１遺構面　飛鳥時代～室町時代の遺構面である。調査区の東半は、近現代の建物基礎により大部分が削平されているが、西半については良好な状態で検出できた。掘立柱建物５棟、ピット、溝、土坑を検出した。

掘立柱建物１　柱間南北３間×東西２間（4.8×3.4m）の規模で、主軸をN20°Wにもつ。掘立柱建物２と切り合い関係にあり、掘立柱建物２のほうが新しい。柱穴の掘形は大きいもので径90cm弱、小さいもので径50～60cmの円形である。柱痕から柱は直径15cm程度の断面円形であることが確認された。出土遺物から７世紀前葉の遺構であると推定される。

掘立柱建物２　柱間南北２間×東西２間（4.3×3.2m）の規模で、主軸はほぼ真北方向に向いている。柱穴の掘形は大きいもので１m前後、小さいもので70cm前後の隅丸方形で深さは50cmを測る。柱痕から柱は直径20cm程度の断面円形であることが確認された。出土遺物から７世紀前葉の遺構であると推定される。

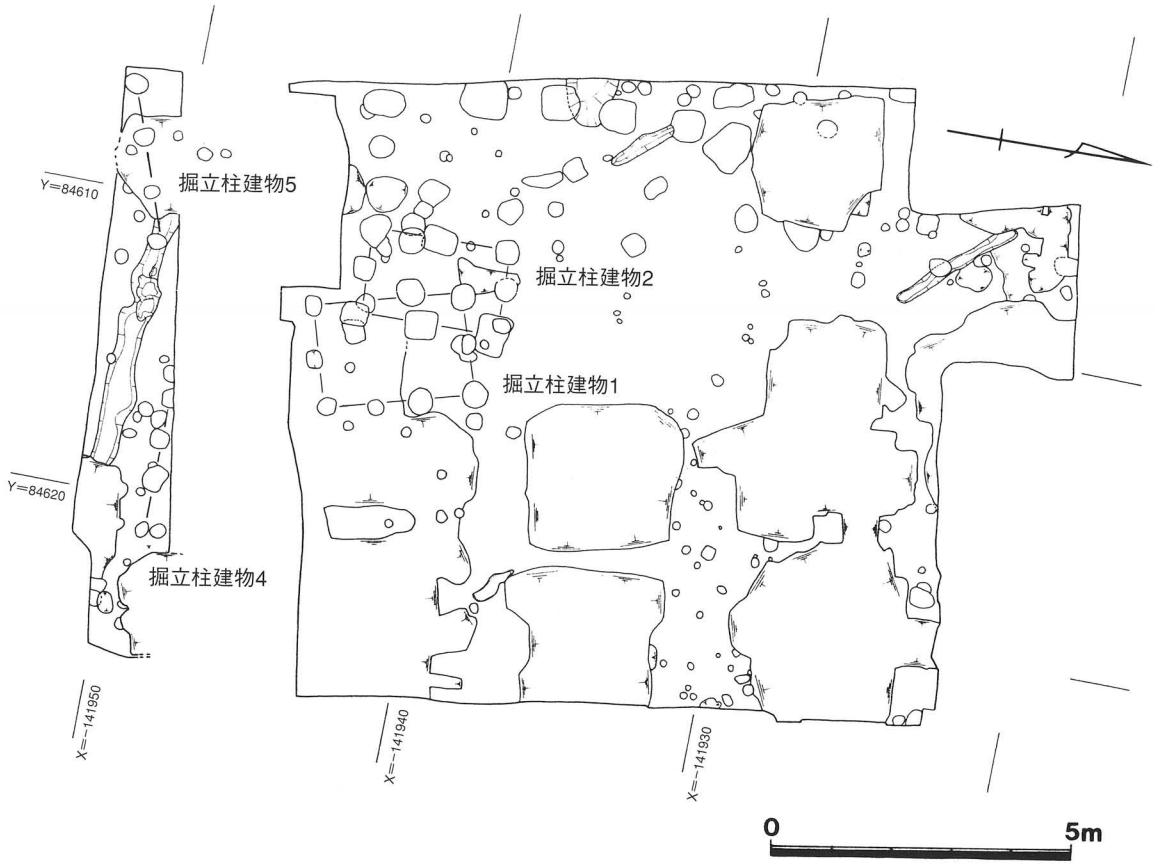


fig. 64　第１遺構面平面図

掘立柱建物３　調査区の西端で検出されたため東西の規模は不明であるが、柱間南北３間で、主軸はほぼ真北方向を向いている。柱穴の掘形は一辺1.1ｍ前後の隅丸方形で、深さ50㎝である。柱痕から柱は直径15㎝程度の断面円形であることが確認された。出土遺物から７世紀前葉の遺構であると推定される。

掘立柱建物４　共に、柱間東西３間以上、南北の規模は調査区外のため不明である。柱穴の掘形は径50
掘立柱建物５　㎝前後の円形である。中世の遺構であると推定される。

土坑１　調査区西端で検出した、長径1.3ｍ×短径0.7ｍ、深さ10㎝の楕円形の土坑である。中からは、中世の瓦質土器が出土している。

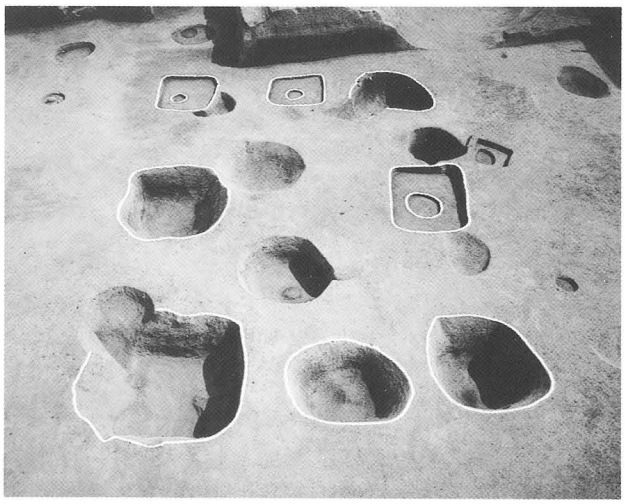


fig. 65　掘立柱建物１

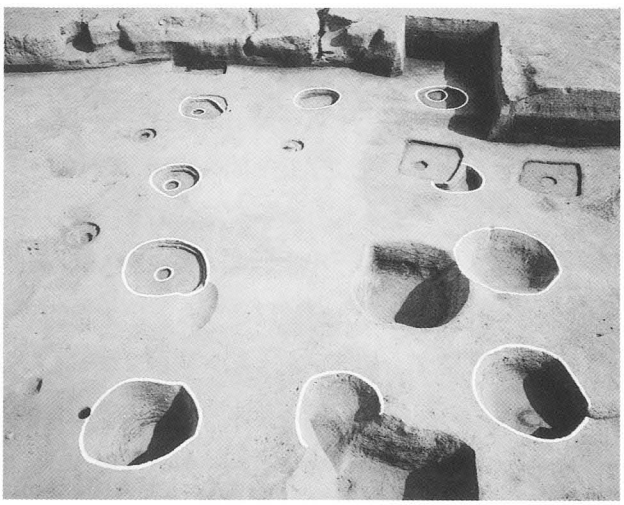


fig. 66　掘立柱建物２

第２遺構面　弥生時代後期と古墳時代後期の遺構を同一面で検出した。遺構面は近現代の建物基礎によって一部破壊されていたが、当初の予想より良好に遺存していた。竪穴住居４棟、ピット等を確認した。

竪穴住居１　古墳時代後期の一辺5.5ｍ以上の方形の竪穴住居である。検出面からの深さは、25cmを測る。周壁溝は全周せず、南壁には設けられていないようである。主柱については明確でないが、４本柱と考えられる。

竪穴住居２　弥生時代後期の2.5ｍ以上×1.5ｍ以上の方形の竪穴住居である。検出面からの深さは、25cm弱である。大半は調査区外に延びるため、詳細は不明である。

竪穴住居３　弥生時代後期の一辺６ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居である。検出面からの深さは約50cmをはかる。主柱は４本で、その中央に長径80cm×短径70cm・深さ20cmの楕円形の土坑を設けている。西壁のみ周壁溝とベッド状遺構が全周するが、南壁ではそれらを切るように土坑（長径150cm×短径85cm・深さ30cm）がある。この土坑は南壁に接するようにあり、中からは弥生時代後期の甕が出土している。

竪穴住居４　弥生時代後期の一辺８ｍ以上の方形の竪穴住居である。検出面からの深さは、約40cmである。周壁溝は南壁で確認しているが、全周するかは不明である。おそらく４本柱で、長径100cm×短径80cm・深さ10cmの中央土坑を有する。

第３遺構面　弥生時代中期の遺構面である。ピット、溝、土坑を検出した。ピットは、いずれも深さ10cm弱と浅く、建物の柱穴にはならないようである。また今回の調査区から、北西約100ｍの地点で、この時期の自然流路が検出されているが、今回の調査区内では確認していない。おそらくこの時期、当地は遺跡の中心地ではなかったと考えられる。

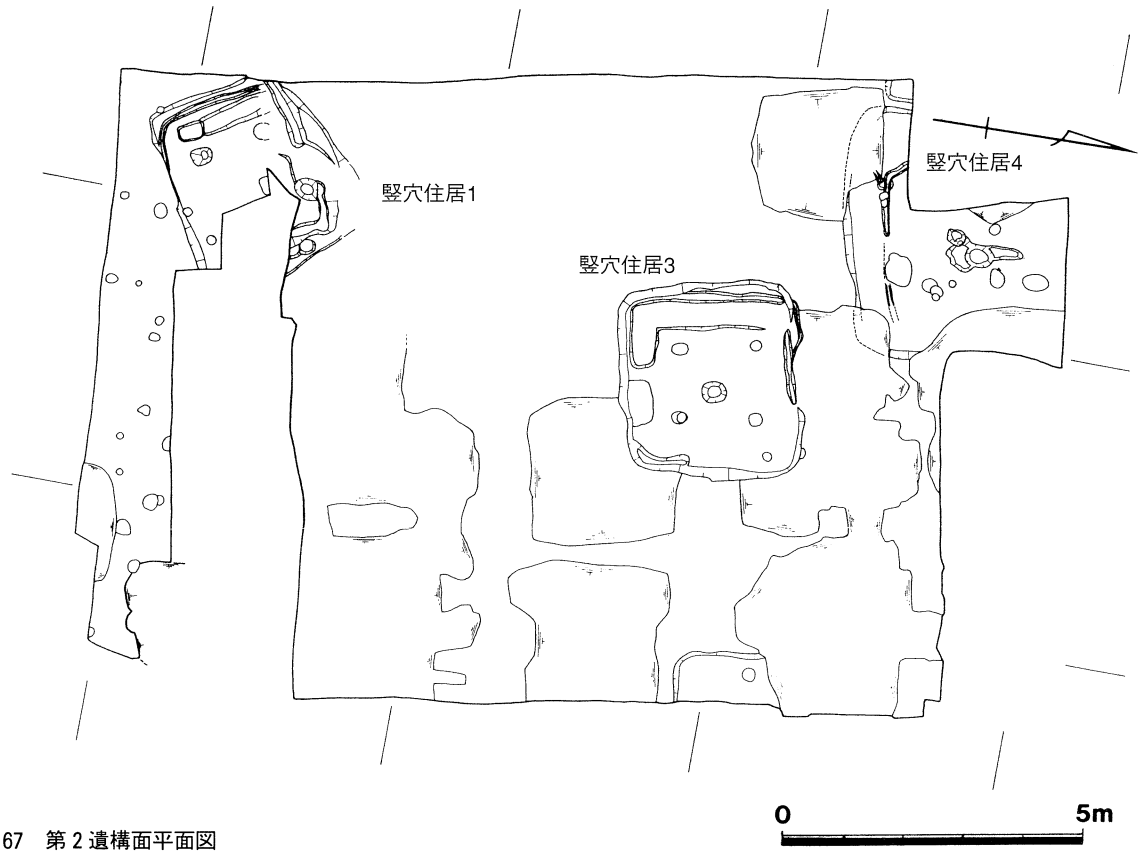


fig. 67　第２遺構面平面図

fig. 68
竪穴住居 3

3．ま と め

今回の調査で特筆すべきことは、以下の２点である。

まず１点は、飛鳥時代の掘立柱建物を３棟検出したことである。奈良時代の菟原郡衙の推定地である大蔵地区で、これに先行する時代の建物が見つかったのは今回が初めてであり、郡衙の所在地を考えるうえで大変興味深い。

２点目は、弥生時代後期の竪穴住居３棟を検出したことである。この３棟は隣接するように見つかっている。また今回の調査区から北西約100ｍの辺りでこの時期の川がみつかっており、川の近くに集落を営んでいた様子が想像できる。

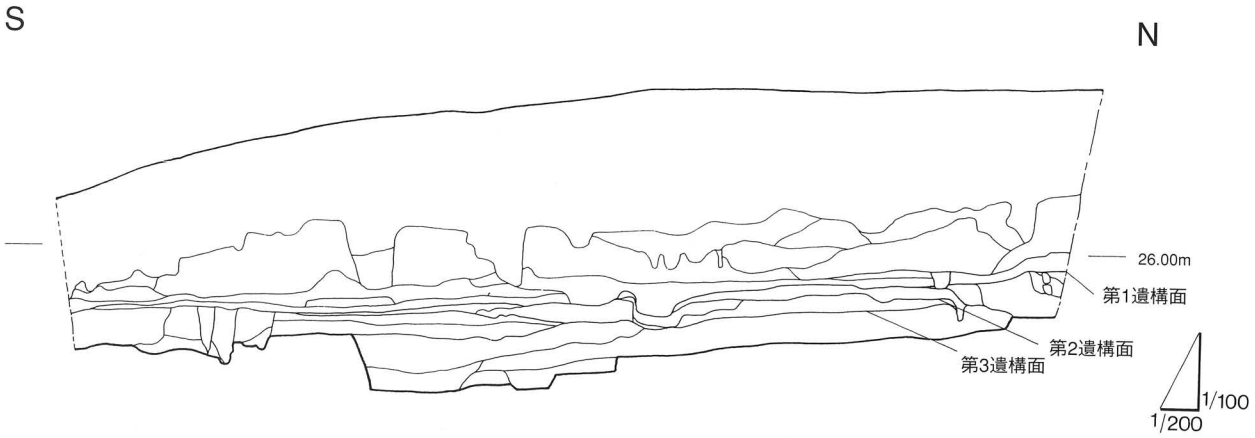


fig. 69　調査区断面図

17. 郡家遺跡中地区　第７次調査

１．はじめに

郡家遺跡は、特に奈良時代には菟原郡衙が所在したと推定されている遺跡である。このため、以前から数十次にわたる調査が行われてきている。この結果、弥生時代・古墳時代・中世の集落跡も多く見つかっている。

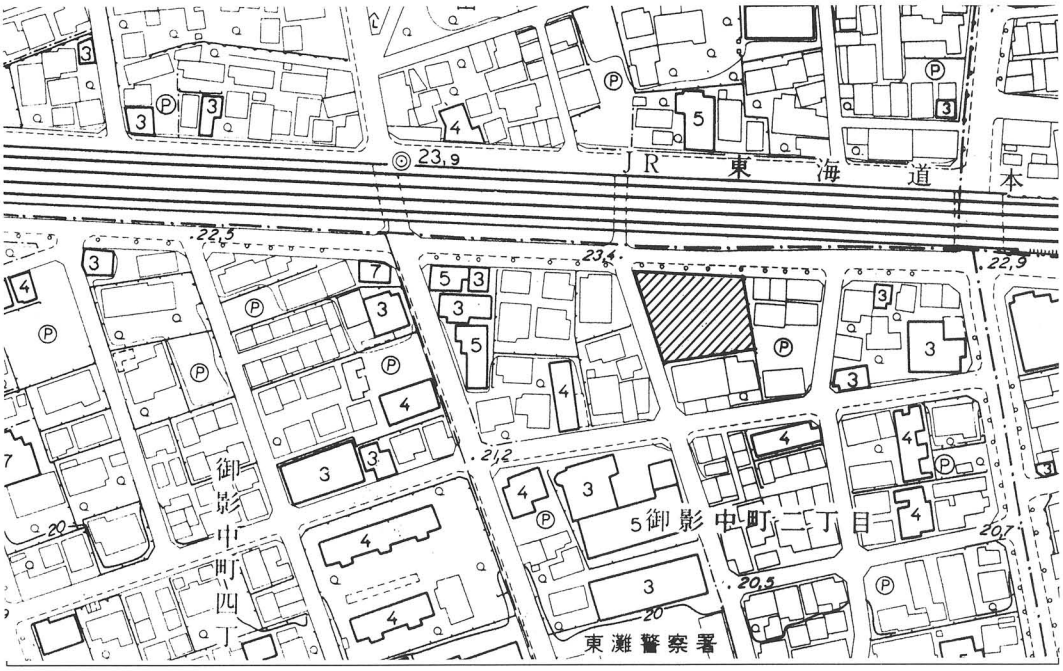


fig. 70
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

調査の結果、古墳時代後期・古墳時代終末期・平安時代後期の３時期の遺構を検出した。なお、本来は、平安時代後期の遺構に関しては、遺物包含層の上面での検出が可能であった。しかし、遺物包含層自体が約10～15cmと厚くはないことから、遺物包含層を掘り下げた面で、他の時期の遺構と合わせて検出することにした。

fig. 71　ＳＢ01

古墳時代後期　柱穴と土坑を検出した。出土土器から判断して、６世紀後半と考えられる。

柱穴は、数十穴以上検出したが、建物を復元できなかった。土坑は２基検出した。１基は、遺構が西側の調査区外に広がるため約半分しか調査できなかったが、１個体分の壺が押し潰された状態で出土している。当初は、完形の壺が当遺構内に据え置かれていたものと考えられる。

古墳時代終末期　柱穴を検出した。数十穴以上検出したが、建物を復元できなかった。出土土器から判断して、７世紀前半と考えられる。

平安時代後期　柱穴を検出した。このなかで、２間×４間の総柱建物（ＳＢ01）１棟を復元することができた。西側桁行方向で8.4ｍ、南側梁行方向で4.7ｍを測り、柱穴間の平均距離は、西側桁行方向で2.1ｍ、梁行方向で2.35ｍである。棟軸方向は、Ｎ８°Ｗを指向する。出土土器から判断して、１２世紀後半と考えられる。

３．ま と め　調査の結果、古墳時代後期・古墳時代終末期・平安時代後期の３時期の集落の存在が明らかとなった。建物を復元できたのは平安時代後期の１棟のみであるが、他の時期に関しても、同様の建物があったものと考えられる。各時期の遺構とも、調査範囲が限られているため、その性格を明らかにすることはできない。

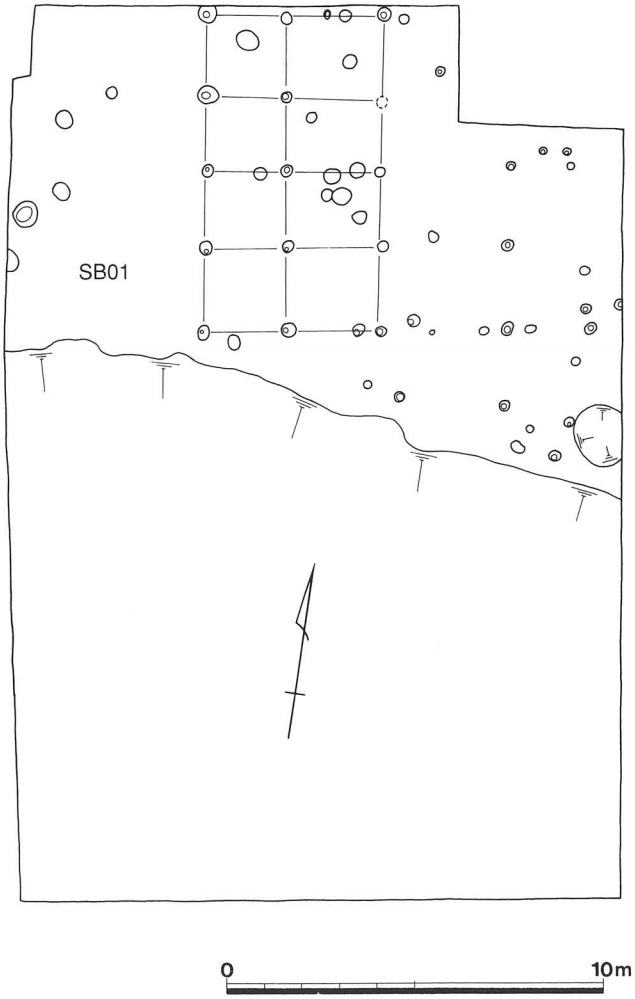


fig. 72　調査区平面図

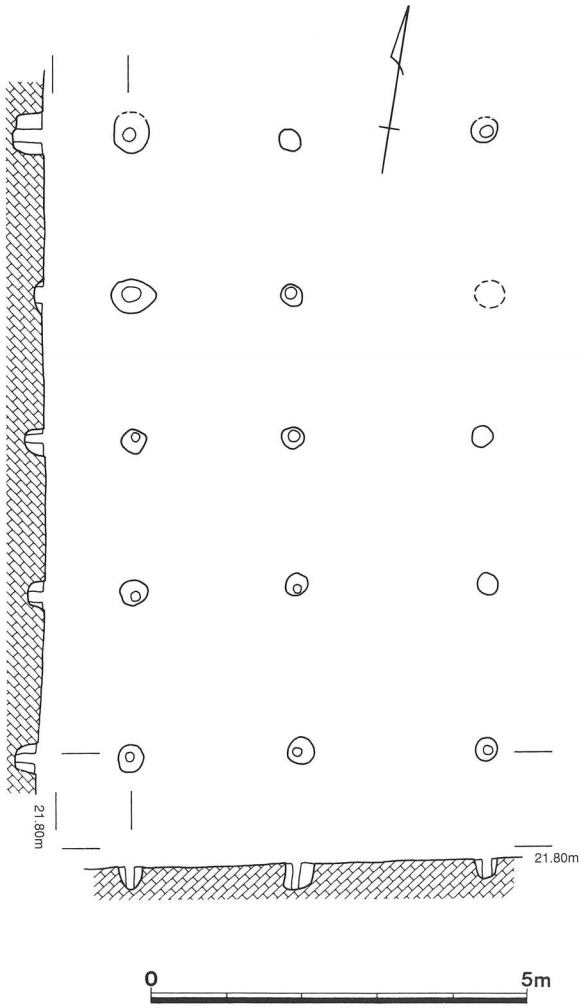


fig. 73　ＳＢ01平面図・断面図

18. 都賀（とが）遺跡　第10次－1・2調査

1．はじめに　都賀遺跡は、六甲山南麓に流れる都賀側左岸に位置する標高40m前後の扇状地上に立地している。昭和62年に神戸市による都賀地区住宅改良事業に伴う試掘調査が行われ、弥生時代の遺物包含層が確認され、はじめて遺跡の存在が明らかとなった。

これまでの調査の結果、縄紋時代後期末から古墳時代前期初頭の竪穴住居、奈良時代末から平安時代初頭の掘立柱建物、土坑、溝などを検出している。

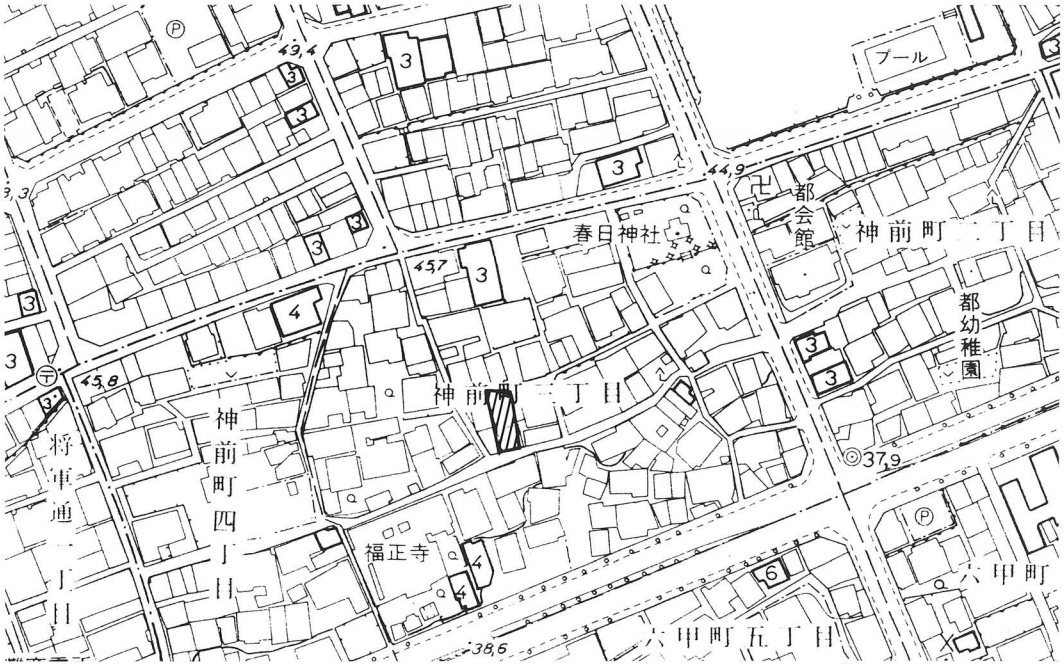


fig. 74
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　基本層序は、盛土、旧耕土の下に包含層である褐色細砂、暗褐灰色砂混じりシルトで弥生時代の遺構面となる黒褐色シルトとなる。

中　世　第1・2遺構面においては不定形の土坑やピットを検出した。

埋土の状況から少なくとも掘立柱建物が2時期存在していたものとみられる。

弥生時代　方形周溝墓は確実なものだけでも2基以上検出し、台状部内に土壙墓1基を検出した。

方形周溝墓1　周溝墓のほぼ全体を検出した。台状部の規模は、南北4.6m、東西4.4mを測る方形のものである。上面は後世の開墾等で少し削平されているが、北溝底から台状部の頂部までの比高は41cmを測る。台状部を区画しているいずれの周溝も、他の周溝墓と共有関係がある可能性が高い。

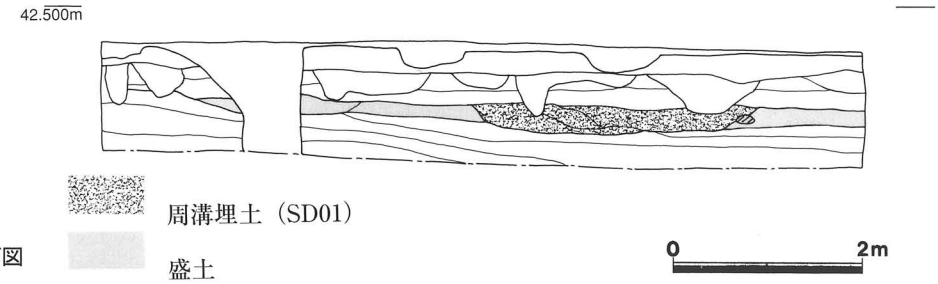


fig. 75
調査区断面図

北溝は肩幅1.00m、深さ23cmを測り、東溝と西溝が逆L字状に折れて形成している。西溝は肩幅1.31m、深さ24cm、東溝は肩幅1.43m、深さ32cmを測り逆L字形を呈する。また、南溝は肩幅0.98m、深さ17cmを測る。溝の断面形は、いずれもU字形である。北側中央と南西・南東隅に陸橋部をもつ。

西溝によって形成されている台状部の北西隅部分には、小さな立石がある。その石を含

fig. 76
第2遺構面全景

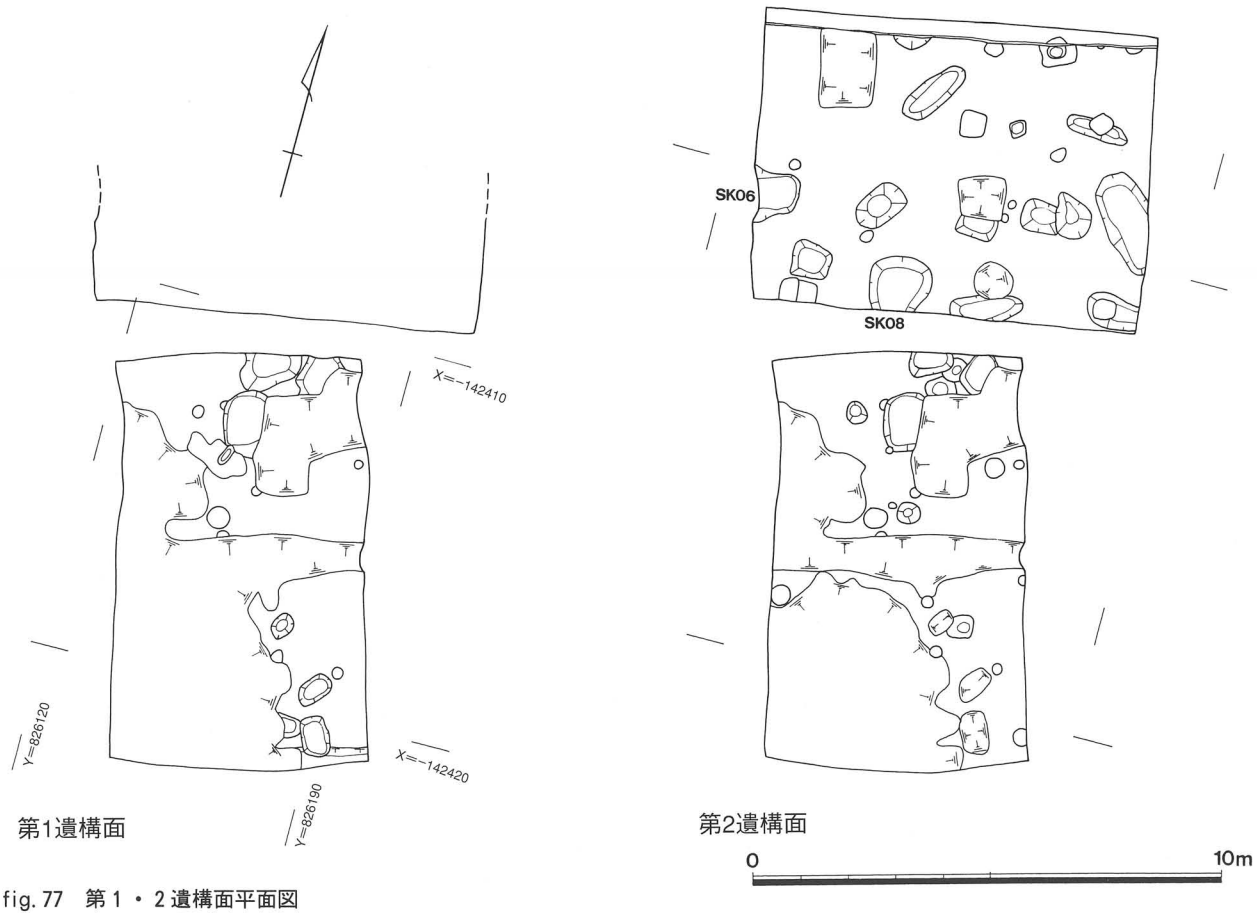


fig. 77　第1・2遺構面平面図

めて3石、コーナー部にならべられている。台状部に伴い人為的に置かれたものと考えられる。また西溝では台状部斜面のコーナー付近で壺が2点出土している。

ＳＫ201　埋葬施設としては、中心からややずれたところで、土壙墓（ＳＫ201）を検出した。東西98cm、南北96cm、深さ27cmを測る楕円形の土壙である。

上層から壺1個体分が出土している。おそらく供献土器として立てられていたものとみられる。

方形周溝墓2　北西隅部分のみを検出した。台状部の規模は不明である。周溝部の形状は方形を呈するものと考えられる。北溝底から台状部頂部までの比高は57cmを測る。北溝は他の方形周溝墓と共有関係がある可能性が高い。

北溝は肩幅1.23m、深さ33cmを測り、反Ｌ字形を呈する。溝の断面形はＵ字形である。北西隅に陸橋部をもつ。台状部斜面に貼り石状のものを施していた可能性がある。

北溝の台状部側の溝底で壺が1点出土している。また溝のコーナー部分の西の溝底でも壺が1点出土しており、西側にも方形周溝墓が存在する可能性がある。

また西溝では、コーナー付近に墓壙を穿ち、小さな甕で合わせ口にした壺を埋置し、その甕の上に、土器棺の主軸にほぼ直交するように別の棺を置いていた。壺棺と甕を覆っていた壺の東半分は石で覆われており、その石は台状部側から徐々に小さな石になるように並べて置かれていた。この状況は、方形周溝墓1の北西隅の石の並びに類似するものであ

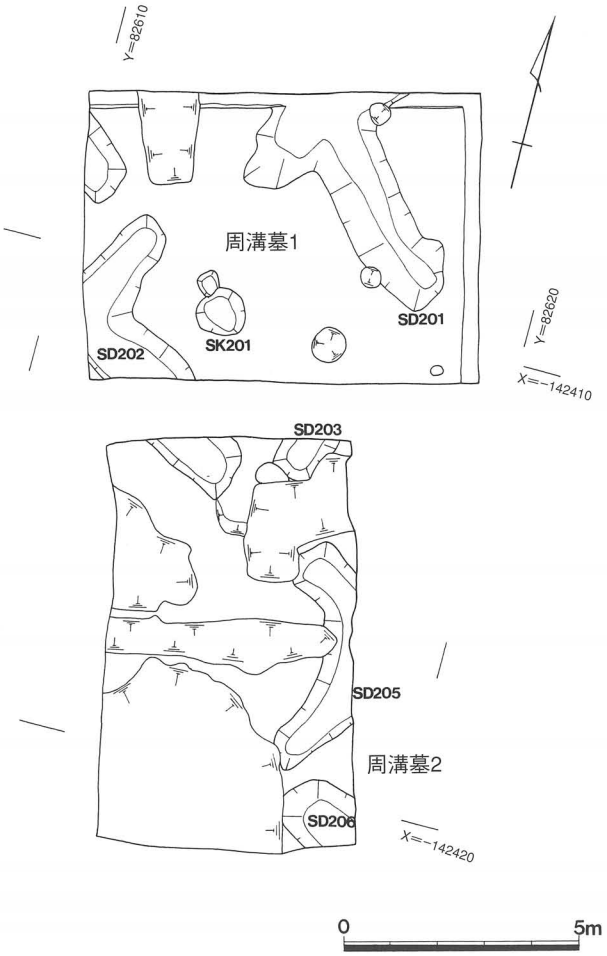


fig. 78　第3遺構面平面図

fig. 79　ＳＫ201

fig. 80　ＳＤ206

る。この他にも壺が2点以上出土しているが、前述の壺の口縁付近に覆いかぶさるような状態で出土している。

溝から出土している土器は、いずれも凹線が認められないもので、Ⅲ様式の範疇に納まるものと考えられる。

3．まとめ

今回の調査では、方形周溝墓を2基以上確認した。これまでの調査成果を合わせると、10基以上の方形周溝墓が築かれており東西140m以上、南北が70m以上の墓域になることが判明した。また尾根筋にあたる頂部付近には、やや大型の一辺10m程度の方形周溝墓が築かれ、斜面地には一辺5m程度の小規模な方形周溝墓が築かれているという規模や立地の差違が窺える。

また、周辺の遺跡において都賀遺跡の方形周溝群を墓域とする集落である可能性が認められる遺跡は現在確認されていない。なお、都賀遺跡における弥生時代中期の墓域はさらに東に延びる可能性があり、同時期の集落の確認と共に今後の調査に期待したい。

fig. 81
北区周溝墓1

fig. 82
南区周溝墓2

19. 都賀（とが）遺跡　第11・12次調査

1．はじめに

都賀遺跡は都賀川左岸の標高40m付近の扇状地上に立地する集落遺跡である。現在推定される遺跡の範囲は灘区神前町３丁目一帯のおよそ100m四方に広がる。過去の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居、奈良～平安時代の掘立柱建物、中世の建物などが検出されている他、縄文時代早期後半の土器が出土するなど縄文時代から営々と続く遺跡であることが明らかになりつつある。

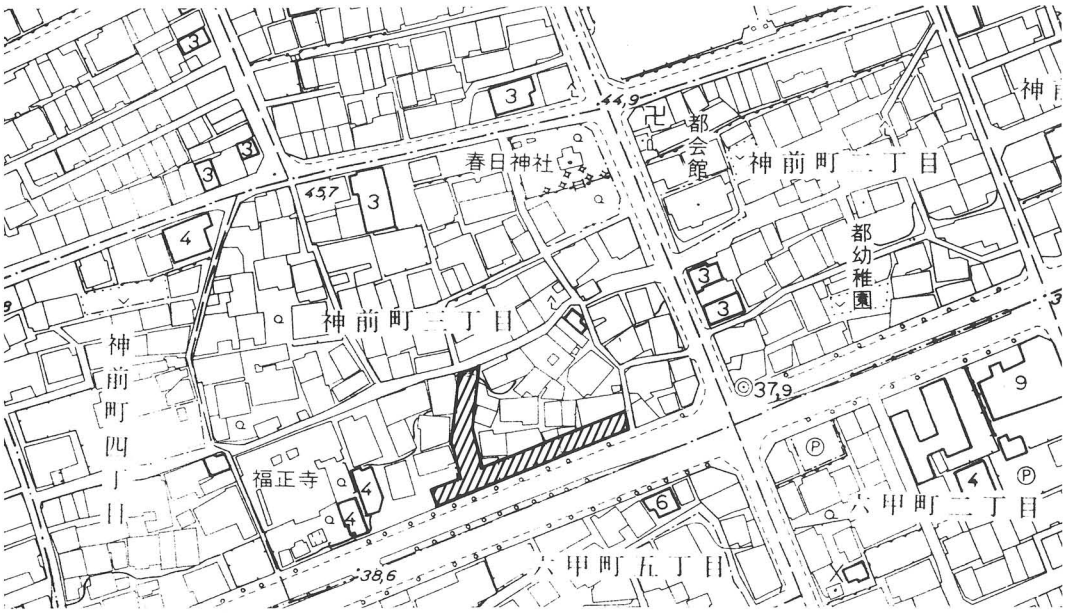


fig. 83
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査区の大部分は近世～現代の建物基礎や排水溝、井戸などによる撹乱を受けており、いずれの調査区も遺構の残りは良好とはいえない。Ａ区では盛土層直下で弥生時代～中世の遺構が確認された（第１遺構面）。さらに下層においても遺構面が確認された（第２遺構面）。Ｂ・Ｃ区では盛土層の下は近世～近代の整地土が堆積しており、その下の中世の遺物を含む包含層が数層あり黄褐色礫混砂質土の地山に至る。途中、黒褐色粘性砂質土面で弥生時代～中世の遺構が確認された（第１遺構面）。なおＢ区では地山層が北に落ち込み、この部分をいずれも厚さ５cmほどの砂と粘質土で交互に埋め、整地を行っている。都賀遺跡で通常認められる黒褐色砂質土はない。２面の整地面と地山面の合わせて３面の遺構面が確認された。

Ａ　区

黒褐色シルト質極細砂層面で検出した遺構面である。溝１条、土坑３基、柱穴20基を確認した。

第１遺構面

ＳＤ101　検出幅約１ｍ、深さ10cmの溝である。調査区内での検出長は約1.5ｍである。調査区外に続くため全体の規模は不明である。出土遺物が細片であるため遺構の時期について判然としないが、周辺調査の結果による埋土の状況などから中世の遺構である可能性が高い。

ＳＫ102　径約1.5ｍのやや歪な円形の土坑と考えられる。土坑の中央に人頭倍大の礫が３個あり、石の上部の埋土中から獣骨、獣歯が出土した。出土遺物は弥生土器が大半であるが、１４世紀代と考えられる陶器片が出土しており、遺構の時期と考えられる。

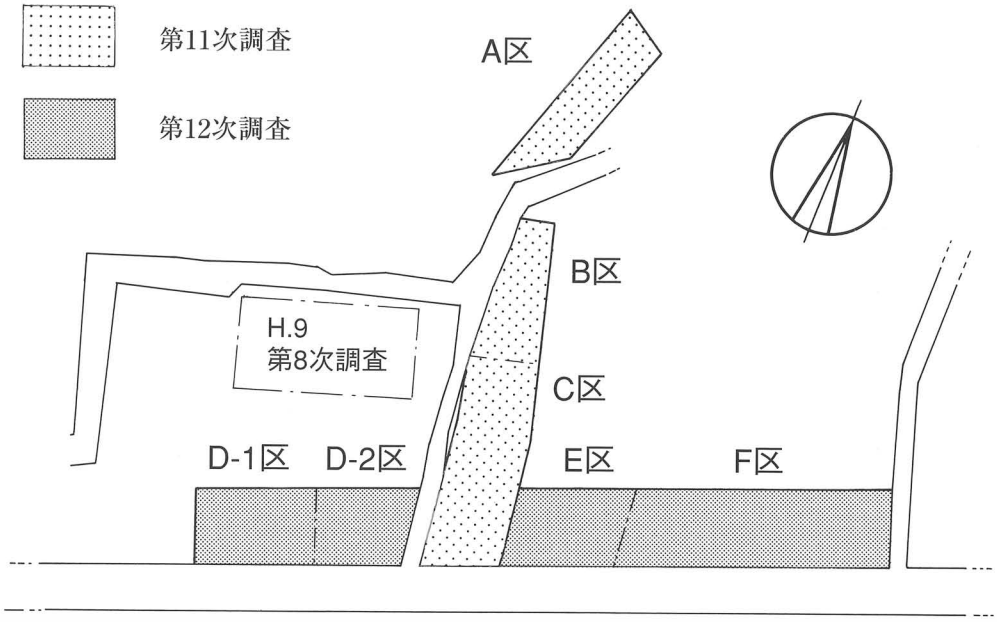


fig. 84
調査区設定図

柱　穴　調査区の北側を中心に20基の柱穴を検出したが、建物等には復元できなかった。遺物も非常に少なく、それぞれの時期については明らかでない。

第２遺構面　黒褐色極細砂質土層面（T.P.40.00～40.20m）で検出した遺構面である。溝１条、土坑２基、柱穴12基を確認した。

ＳＤ201　調査区北側で検出した幅80cm、深さ20cmの東西方向の溝である。調査区内での検出長は約1.3mである。出土遺物が細片であるため遺構の時期については判然としないが、周辺での調査結果による埋土の堆積状況などから弥生時代の遺構である可能性が高い。

柱　穴　調査区の北側を中心に12基の柱穴を検出した。北端で一列に並ぶ４基の柱穴を確認したが、これに対応する柱列は見つかっておらず、建物であるのかどうかは明らかでない。弥生土器と考えられる小片の遺物が出土した。

黒褐色極細砂質土の下層については断ち割り調査の結果、黄褐色砂礫が続くことが判明したが、北端の僅かな部分で、間層に灰色細砂が存在することが確認された。平成７年度の第６次調査で縄文時代の遺物が多く出土した層と同じ堆積と考えられるが、今回は遺物は全く出土していない。

Ｂ・Ｃ区　Ｂ・Ｃ区境部分を頂点に北側、南側の両方向に下がる地形を呈する。頂点部分は地山の上に貼土を行い成形した台状の施設（ＳＸ102）となる。北側では、地山面が深く落ち込み、ＳＸ102の面まで整地を繰り返した状況が確認された。

第１遺構面　Ｃ区の黒褐色粘性砂質土面とＢ区の褐色砂面で確認された遺構面（T.P.38.50～38.70m）である。溝４条、土坑６基、柱穴５基、台状遺構２基を検出した。

ＳＤ102・103および土坑は近世の遺物が出土している。

ＳＸ101　一辺約３ｍの台状遺構である。周囲より30cmほど高くなっており、北側には一部で２段積みとなった石垣が設けられる。上面中央にＳＫ104・105の２基の土坑がある。石垣上端

を面とする２段構成の施設と考えられる。

ＳＸ102　　Ｂ・Ｃ区境にあり、地山の上に貼土を行い成形した台状遺構である。撹乱により南側が曖昧となっているが、幅６～７ｍの台状の区画と考えられる。北西角には50cmを越す大石が並ぶが、東側は裏込めの栗石が残るのみで、上面に貼られた黄色極細砂も一部崩れている。上面にはＳＫ106・107の２基の土坑がある。

fig. 85　Ａ区第２遺構面全景

fig. 86　Ｃ区第１遺構面全景

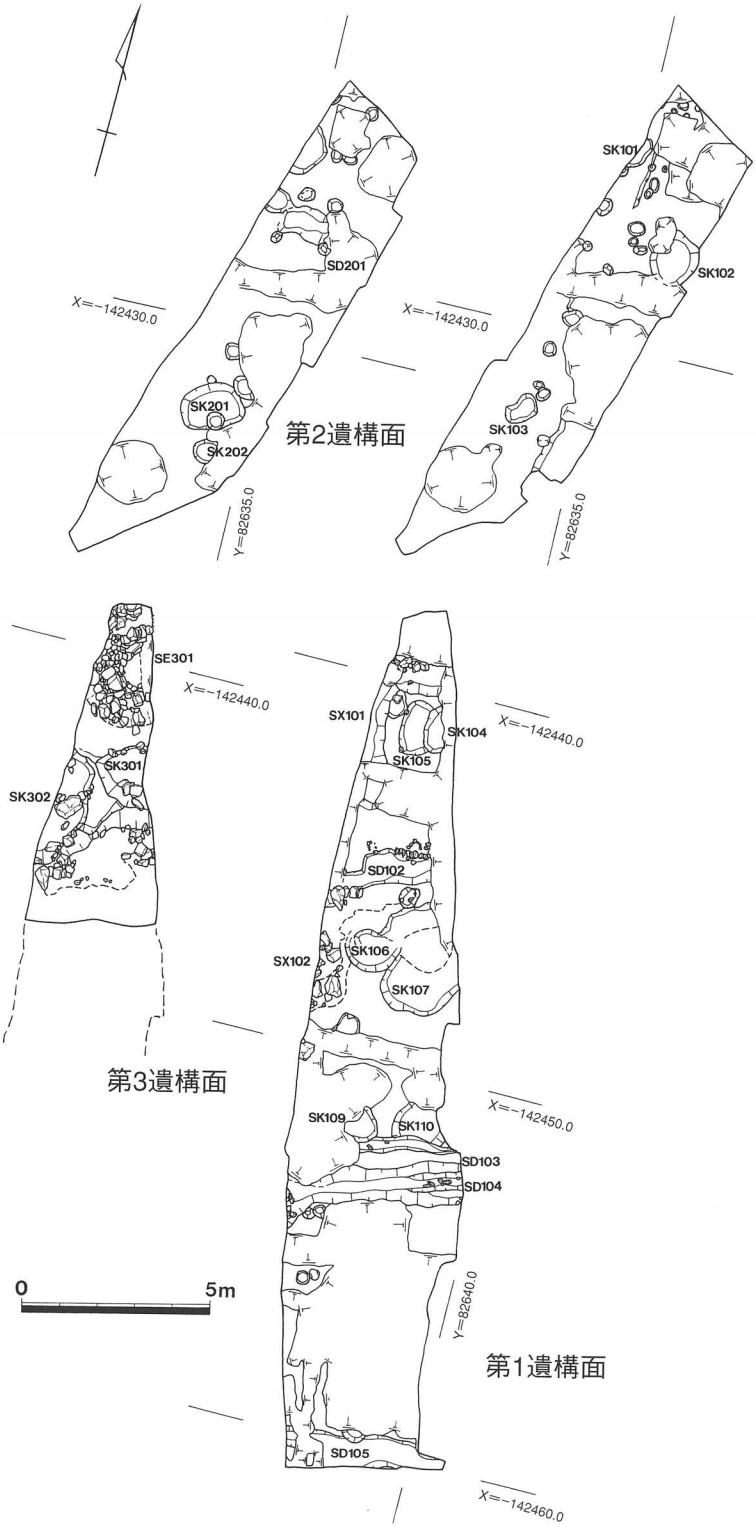


fig. 87　Ａ～Ｃ区平面図